[著]虚淵玄(ニトロプラス)
[イラスト]中央東口
Eisen Flügel
アイゼンフリューゲル
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

アイゼンフリューゲル

虚淵玄（ニトロプラス）
イラスト　中央東口

Eisen Flügel

アイゼンフリューゲル

〔著〕虚淵玄（ニトロプラス）
〔イラスト〕中央東口

Contents

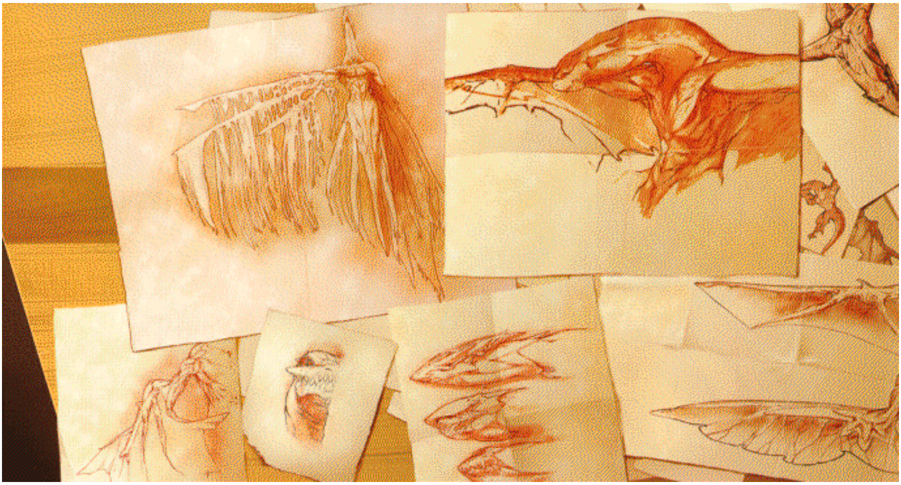
プロローグ …………… 011

［第一章］鋼鉄(くろがね)の翼 …………… 013

［第二章］挑戦の翼 …………… 099

［第三章］再生の翼 …………… 169

デザイン・小林美樹代＋ベイブリッジ・スタジオ



目次

プロローグ
[第一章]　鋼鉄くろがねの翼
[第二章]　挑戦の翼
[第三章]　再生の翼

Eisen Flügel

アイゼンフリューゲル

［著］虚淵 玄（ニトロプラス）
［イラスト］中央東口

GAGAGA

主要登場人物紹介

カール・シュニッツ
主人公。「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」専属テストパイロット。
ヘレン・ヴァイニンガー
ヴァイニンガー博士の孫娘。カールの恋人。
グスタフ・ヴァイニンガー博士
「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」研究主任。無頼の老技術者。
オットー＆アルベルト
「プロジェクト・ブリッツフォーゲル」開発チームスタッフ。ヴァイニンガー博士の直弟子。
クルツ
ヴァイニンガー飛行場専任通信士。
エリック
ヘレンの弟。幼生龍のジークフリードを飼っている少年。
ゲプハルト・ミュラー
シルヴァーナ国空軍中佐。

プロローグ

　まず天と地が分かれた始まりの時代、大地は根を持つ草木たちの居場所であり、大空は翼持つ龍りゅうたちの領域だった。
　その後、数々の神話を経てヒトの時代が訪れる。人間たちは土を耕す知恵を得て、草木たちの営みを飼い慣らし、その恵みを我が物として、大地の覇者の座を奪い取った。地上に生まれた彼らにとって、それはさして困難でもない征服だった。
　だが翼を持たぬ人間たちには、天の覇権の簒さん奪だつは遙はるかに困難であった。龍とその眷けん属ぞくは草木たちより遙かに強壮なる神秘であった。それでも、その背に翼を持たぬ人の子らには、代わりにモノを造る指と、積み重ねた知識と、そして飽くことのない情熱があった。
　長い、長い歳月がかかった。
　やがて日食も、虹にじも、雷鳴も、龍たちの仕業ではないと解明された。ついには風を受けて宙を舞う術すべすらも見み出いだされた。そして鉄を鍛え、窯かまの中に封じ込めた火の力で、はばたく翼を模造する者が現れた。
　機械仕掛けの歪いびつな、ちっぽけな翼で、雛ひな鳥どりのように弱々しく舞い上がる小さな者たちの姿は、蒼そう穹きゅうを舞う王たちからすれば憐れん憫びんにも値せぬものだっただろう。龍りゅうたちは眼下よりの挑戦など一顧だにせず、ただ天空の覇者であり続けた。
　だがそれでも、人々は翼を夢に見続けた。
　大地にあまねく繁栄し、大おお海うな原ばらまでも征してなお、彼らは空に手を差し伸べた。幾人もの夢ゆめ見み人びとたちが、知力と勇気の限りを尽くし、大空へと挑んでは散っていった。より速く、より彼か方なたまで——いつの日かヒトの技が、神々の翼に届く日を夢見て。

　これより綴つづられるのは、今はもう過ぎ去った追憶。龍の翼に神秘があった頃ころの物語。

遙はるかなる神々の領域を目指した、挑戦者たちの記録である。

［第一章］

鋼鉄（くろがね）の翼

1

　翠すい緑りょくに輝く淡水が、しずしずと下流に運ばれていく。その澄んだ静せい謐ひつな川かわ面もを、時折猛烈な旋風が掻かき乱し、泡立てながら上流へと遡さかのぼっていく。
　旋風の主は霞龍ネーベルドラッヘの尾だ。普段は山岳の高空に遊ぶ小型龍が、今は川面に腹が映るほどすれすれの低空を、猛たけ々だけしく疾駆している。それも三頭。鏃やじり型の隊列を微み塵じんも崩さぬ、鮮やかな編隊飛行である。
　霞龍ネーベルドラッヘの飛翔は巡航速度においてすら三〇〇ノットを上回る。急降下中のハヤブサの最大速度ですら二〇〇ノットに達するのがせいぜいなのだから、天翔る龍の眷けん属ぞくたちがいかに生物として規格外にあるのか窺うかがえよう。
　その推力の源は猛スピードで震動する襞ひだ状の尾だ。そこから巻き起こる空気圧が、両肩の強きょう靱じんな翼による空力特性と相まって、驚異の高速飛行を成立させている。むしろ飛行原理すら解明されていない虹龍グレンツドラッヘなどの超越種に比べれば、まだしも霞龍ネーベルドラッヘは人類にとっても与くみしやすい相手といえよう。
　現に、いま三頭の霞龍ネーベルドラッヘに後塵を浴びつつも果敢に挑戦しているのは、憤然とターボプロップエンジンを唸うならせるレシプロ航空機である。
　実験航空機『エトピリカ』――全幅三五フィート、重量五〇〇〇ポンドにまで絞り込んだ小柄なレーサー仕様の機体と、一七五〇馬力を叩き出す液冷一二気筒エンジンの組み合わせは、おそらく現時点において民間、軍用を問わず最強最速を自負できよう。わけても最大の特徴は、大出力の回転ピッチを相殺する二重反転プロペラの採用だ。これにより速度と安定性を両立させたエトピリカは、未だ世界でも数少ない、龍の飛行能力に追随しうる性能を獲得した機体となった。これ

までに記録された最高速度は四一二ノット。そのフルスロットルでの追跡が、今、先行する霞龍ネーベルドラッヘたちの最後尾へ、じわじわと距離を詰めていく。
　これを追跡劇と見て取るならば、獲物目掛けて猛たけり昂たかぶる狩人かりゅうどはエトピリカの側であっただろう。が、涙滴型の風防キャノピーの中において、二人の搭乗員のうち後席の一人については、まるきり真逆の心境にあった。
「やーッ！　だぁぁぁぁッ!!　もー止めぇぇぇぇッ!!　てってば!!」
　轟ごう々ごうと吼えるエンジン音に負けじとばかり金切り声を張り上げるヘレン・ヴァイニンガーは、うら若き乙女としての慎みも恥じらいも、既にまったく意中になかった。そもそもか弱い淑女に対する繊せん細さいな心遣いなど、前席で操縦桿かんを握っている男にはこれっぽっちも期待できないと、もう彼女はとっくに身に積まされて心得ている。
　事実、カール・シュニッツは後席に乗せた恋人の悲鳴などまったく意に介さず、むしろ闘争のスリルに満面の笑みさえ浮かべていた。
　遮さえぎるものなど皆無な高空ならいざ知らず、高度三〇フィートあるかないかという匍ほ匐ふく飛行で、この速度は無謀の極みであった。ひとつ操縦を誤れば、即座に機体は水面に触れて木っ端微み塵じんに砕け散る。しかも風防キャノピーには先行する霞龍ネーベルドラッヘたちが巻き上げた水飛沫しぶきをもろに浴び、視界の状況は最悪だ。凄腕のテストパイロットとして鳴らすカールの操縦技術をもってしても、これは狂気の沙汰と言うほかない。
　ヘレンにしてみれば、ここで生命を賭として霞龍ネーベルドラッヘたちを追尾することにはなんの道理も意義もない。が、その認識が操縦者にまったく通用していないのが、彼女の不幸であった。
　カールにとって、この追跡は神聖にして侵すべからざる儀式であり、空を飛ぶ意味そのものに通じていた。そしてまた、それはカールに追われる霞龍ネーベルドラッヘたちも同様なのだ。
　龍は、決して同族で互いに傷つけることはない。その鋭利な牙も鉤

かぎ爪づめも、あくまで食物連鎖を巡る狩りと自衛においてのみ振るわれる。

代わりに龍同士の闘争の手段となるのが、飛翔の速度を競う『レース』だ。その群体としての習性は未だ謎に包まれているものの、彼らの階級が『速さ』のみに拠ょって優劣づけられていることは明らかになっている。龍たちの興味は『速きモノ』のみに向けられ、それを凌りょう駕がすることに闘争性のすべてを傾ける。それがこの謎に満ちた生物の、唯一解明されている習性であった。

そして龍の認識において、明らかに鳥類よりも大型、かつ高速で飛行する人類の機械装置は、ひときわ鈍重かつ不格好ながらも、それでも『同胞』と見なすべき存在なのだろう。しばしば龍のテリトリーに踏み込んだ航空機が、縄張りの主に背後から追跡され、居い丈たけ高だかに追い抜いていくその後ろ姿を見せつけられるという出来事は、定期航路を飛ぶパイロットであっても年に数回は体験する。龍にとっては、相手が『追い抜かせた』時点で恭順を示したものと納得するらしく、それ以上の危害を及ぼすこともないため、航空機の側もただ黙って見送ればなんら航行に支障をきたすわけでもない。太古から天空を縄張りとする先せん達だったちの、いささか手荒い挨あい拶さつ、程度に見過ごすのが、普通のパイロットの対処である。

ところが、カール・シュニッツの場合は違う。彼がパイロットとして鍛えに鍛えたその辣らつ腕わんを揮ふるうのは、まさに龍たちに挑戦することが目的なのだ。

今日にしてみても、たまたまテストフライトのスケジュールが空いた隙すき間まに、ヘレンを伴って遊覧飛行するという、かねてからのプライベートな約束を果たすのが目的だったのだ。それが霞龍ネーベルドラッヘの登場によって急変した。巡航中のエトピリカをまんまと追い抜かれたカールは途端に頭に血が上り、同乗者の存在など眼中なく『私闘』の虜とりことなってしまったのである。

さらに騒ぎを嗅ぎつけた別の霞龍ネーベルドラッヘが二頭、三頭と飛来して合流し、状況は今に至る。霞龍ネーベルドラッヘたちは既に過去の

レースで互いの雌し雄ゆうを決しているらしく、相争う様子はない。いずれもエトピリカの速度を『挑戦者』として相応ふさわしいものと見なした以上は、各々が等級において近いランクに位置するのだろう。先行する一頭の軌道を、寸分の乱れもない編隊を組んで追随トレースしている。彼らの等級に割り込もうとするならば、エトピリカを駆るカールもまた、同じ飛行を要求されるのだ。先行者のルートを逸それることなく、挑戦者はさらに速度で凌りょう駕がして追い抜くか、あるいは力尽きて諦あきらめるか、いずれかの結末によってレースは決着する。

「いい加減に――もうッ、やめてってば！　こういう馬鹿はあたしのいないときにして！」

「大丈夫だって。たかが霞龍ネーベルドラッヘ、慌てなくても、すぐ片付くからよ……」

　ヘレンの糾弾に対するカールの返答には、およそ誠意など欠片かけらもない。きっとおそらく傘のないまま小雨に降られたときも、こんな風に連れをいなすのだろうと思わせるような口調であった。そもそもその言い種ぐさを深読みするならば、カールに降参の意志は毛頭なく、あくまで霞龍ネーベルドラッヘたちが根負けするまでこの勝負を続行する気でいるのだろう。

「や――君ってば、もう！　最ッ低!!　女の子連れでケンカとか――しかも龍なんかと！」

「こんなの、ただのじゃれ合いさ。ケンカのうちにも入らねぇ！」

　レースが長引くにつれて、各々の霞龍ネーベルドラッヘたちにも、いよいよスタミナの個体差が現れ始めた。まず三頭目がじわじわと先頭集団から引き離されて、次第にエトピリカと併走する位置にまで退がりはじめる。

　風防キャノピーを隔てたすぐ隣、手を伸ばせば届きそうな錯覚を覚えるほどの間近に接近した霞龍ネーベルドラッヘの容姿に、思わずヘレンは息を呑んで見入った。

　剛毛とも棘きょく皮ひともつかぬ鋭利で細長い鱗うろこに覆われた体表。槍やりの穂を連想させる鋭角な円えん錐すい状の頭部から、太い首

を介して両肩の翼に至るまで、まるで風洞実験で設計されたかのように滑らかで洗練された流線型のフォルム。だが縦に割れた瞳どう孔こうにギロリと一ひと睨にらみされて、ヘレンは喉元まで出かかった悲鳴を噛かみ殺すと同時に、それが紛れもなく野生の猛獣であることを思い知る。

　いよいよ速度を維持しきれなくなったその霞龍ネーベルドラッヘは、脱落を悟った途端に、尾を畳んで両翼を拡げ、急減速した。一気に後方警戒鏡バックミラーの彼かな方たへと遠ざかるその姿が、くるりと前転して嘶いななきを放つ。

　いざ負けたとなれば龍たちは潔い。己より速く疾駆するモノには、ただ無上の敬意をもって見送るのみである。

「も……もう気が済んだでしょ！　ちょっと⁉」

「まだまだ！　あと二頭！」

　カールとヘレンが言い争ううちにも、風防キャノピーの外を飛び去っていく景観は次第次第に山がちとなり、川の岸辺も岸壁となって垂直にそそり立つようになってきた。その圧迫感に、いよいよ速度感が恐怖を伴いはじめる。

「わ、わ、わ……」

　霞龍ネーベルドラッヘたちも、さすがにこの隘あい路ろで四〇〇ノット近い速度を維持するのは無謀と判断したのだろう。川かわ面もから離れて高度を取り、渓谷の間をすり抜けるのにギリギリのライン取りを選び始める。

「甘いぜ！」

　速度のみならず運動性能においても、エトピリカは霞龍ネーベルドラッヘに劣るものではない。その底力とレスポンスにおいて、カールはこの機体に絶対的な信頼を寄せていた。そしてその潜在力のすべてを引き出す操縦技術を、彼自身もまた自負していた。

　速度は充分。翼の揚力に頼らずともコントロールを失うことはない。カールは鋭いエルロン操作で機体を垂直にバンクさせ、あとはピッチングだけを頼みに渓谷へと斬り込んだ。いきなり体勢を真横に

倒されたヘレンが金切り声で抗議する——が、全神経を操縦桿かんに集中させたカールの耳には届かない。
　一方で霞龍ネーベルドラッヘたちにとっても、この渓谷での速駆けは極限の体技を要求されるものだったのだろう。今度は二番手の龍が、岸壁への激突を避けるのに没頭するあまり先頭への追走が疎おろそかになり、スピードが鈍りはじめる。
「もらった……」
　カールはバンクを戻して揚力を取り戻しつつ上昇。怯ひるんだ霞龍ネーベルドラッヘを一気に抜きにかかる。下から迫るエトピリカの機首を、ついに二頭目はブロックしきれなかった。追い抜かれると同時に降参を示す前転を見せて、渓谷の底へと降下していく。
　二位、三位の同胞を立て続けに突破され、最後の霞龍ネーベルドラッヘはいよいよ挑戦者の力量を認めざるを得なくなった。匍ほ匐ふく飛行の我慢比べも、隘路での度胸験だめしも通用しないとなれば、あとは純然たる力比べを残すのみである。霞龍ネーベルドラッヘは渓谷から進路を変え、やおら真上に向かって急上昇にかかった。
「そうこなくっちゃな——ッ！」
　エトピリカもまた機首を掲げ、ズーム上昇で追走する。エンジンの雄お叫たけびとともに、視界から水平線が意味を失い、見る見るうちに大地が背後へと遠とお退のいていく。
「～～～～ッ！」
　のしかかる加速度に肺を圧迫され、ヘレンは抗議の声さえ上げられない。空の眩まばゆさに目が眩くらみ、高さも方角も、まるで見当がつかなくなる。それでも前席から伝わってくる、カールの声なき昂こう揚ようの念だけは、ひしひしと伝わってくる。
　先行する霞龍ネーベルドラッヘとの距離は既に一マイルを切り、今はもう翼の輪郭や猛振動する尾の動きがはっきりと見て取れる。その姿が、やおら白い靄もやに霞かすみはじめた。エトピリカの風防キャノピー表面でも水蒸気が渦を巻いて流れ過ぎ、瞬く間に視界を覆っていく。先を争う一頭と一機は、ついに分厚い雲の中にまで突入してしまった

のだ。
　白い闇の目隠しで相手の姿を見失っても、カールは慌てず騒がずピッチを維持し、ただスロットルの開放だけに専念した。もはや先頭の挙動を窺うかがうまでもなく、目指すはただ直進方向あるのみと解りきっている。もしも視界が十全ならば、霞龍ネーベルドラッヘは急旋回で後続を振り回し、引き離そうとしたかもしれないが、互いの位置関係が解らない状況となれば、挑戦者とはぐれるような余計な機動はしないはずだ。龍たちがそんな風に勝負を反ほ故ごにすることはない。龍の目的は逃亡ではなく、カールが狩人かりゅうどなわけでもない。これはどこまでも対等な決闘だ。どちらがより速く天を極めるか——それが歴然となるより前に、互いが離別するなど有り得ないのだ。
　ふいになんの前触れもなく、輝くばかりの青に網膜が打ちのめされる。雲層を突破し、エトピリカは見渡す限りの蒼そう穹きゅうの直ただ中なかへと躍り出たのだ。高度六マイルの対流圏。もはや大地の営みが目に映じることはなく、眼下の一面を白い雲海が覆っている。
「ヤツは——」
　一面の青の中に、霞龍ネーベルドラッヘの姿はない。
　その意味をカールが悟った直後、間一髪の遅れで霞龍ネーベルドラッヘが雲を突破し、エトピリカの背後に現れる。勝負は、既に雲の中で決していたのだ。
「いよっしゃぁ！」
　喝かっ采さいして拳を振り上げるカール。敗れた霞龍ネーベルドラッヘは口く惜やしそうに前転して嘶いななくと、再び雲の下へと消えていく。今日のところは、この空域における最速の栄冠はエトピリカへと譲られたようだ。
　興奮冷めやらぬカールは、有頂天のまま操縦桿かんとペダルを弄もてあそび、横滑りと連続横転を繰り返してエトピリカに勝利の舞いを演じさせる。
「いい加減に……しなさい！」
　ようやく怒鳴るだけの気力を取り戻したヘレンに背後からどやしつ

けられるに至って、エトピリカは水平飛行に復帰した。
「いやぁ、悪い悪い。ちょいと手こずりすぎちまったな」
　カールの、まったく悪びれた風もない明るい声に、ヘレンは胸に蟠わだかまった怒りを溜息にして吐き出した。彼とは昨日今日の付き合いではない。こういう場面で何を言っても無駄なのは重々承知している。
「君ね……後ろに他人ヒ　トを乗せてるって自覚はあったわけ？」
「ああ。いやはや、吐かないどころか気絶もしないとは大したもんだ。さすがヴァイニンガー博士の孫娘だな」
「嘗なめないで。飛行機なんて五歳の頃から乗せられてるわ」
　そこを煽おだてられたところで、ヘレンとしては何が嬉しいわけでもない。たしかに彼女の祖父は航空機開発の第一人者ではあるが、だからといって同じ情熱がヘレンの胸にもあるかといえば、別段そんなこともない。祖父と、その周囲に集う技術者たちは、ヘレンに言わせればただの物好きな変人揃いである。そしてその中には、専属テストパイロットであるカールもまた含まれる。
「それにしたって、君の操縦は最ッ低！　乱暴で、無茶苦茶で。なんなの？　自殺願望でもあるわけ？」
「まぁ確かに、テストパイロットってのは命知らずが相場だがな。好きこのんで死にたがる奴じゃ、そもそもテストにならんだろ？」
　カールは呑気にそう応じながら、胸元に下げた龍の牙のペンダントを指で弄いじっている。龍の遺い骸がいはどの部位であれ滅多に手に入らない貴重品だが、わけてもその牙は、飛行機乗りたちを守護する幸運の護符として、昔から定番とされている。
　まさかその御ご利り益やくを本気で信じているわけでもあるまいが、それでもしごく平然たるカールの態度には、たった今ぎりぎりの生死の境目を潜り抜けたという感慨など微み塵じんもない。ヘレンとしては寿命が一〇年縮むほどの目に遭わされたわけだが、どうやらそれもカールにとっては冒険のうちにも入らないらしい。
　確かにカールに課された役目は、そもそも無事に飛ぶかどうかも解

わからない航空機の操縦なのである。エトピリカのように性能に万全の信頼を寄せられる機体を飛ばすのとはわけが違うのだ。
　そんなカールが本領を発揮する『冒険』は、あと数日の後に訪れる。
　今まさに、ヴァイニンガー博士の飛行場で最終調整が行われている筈はずの飛行機に、ヘレンは思いを馳はせた。それは彼女の祖父が数年を費やして追い求めた夢の結晶でもある。
「君の無茶は……仕事の中だけで、充分に足りてるでしょ」
「ん？」
「だからさ、なお好きこのんでよけいな無茶までしないでよ。お願いだから」
「ああ、心配ないさ」
　ヘレンの沈んだ声に、カールは静かに、苦笑じみた鼻息を返す。それはヘレンの弱気を嘲あざけるのでなく、彼自身の揺るがぬ自信を示すものだった。
　そう、カールは信じている。自身の力量と強運、そして彼を支える仲間達への絶大な信頼も含めて、自らの運命になんの暗雲もないものと確信している。
　そんなカールの含み笑いは、誰であろうとも励まし、勇気づけるだけの不思議な力強さがあった。思えばヘレンが彼に惹ひきつけられた最初の契機は、その逞たくましさだったかもしれない。彼とともに空を飛ぶのは、往々にして心躍る幸福な体験だ。――しばしば今回のような例外もあるのだが。
「……あ～あ、なんかもう今日は、ウンザリ。そろそろ地面に降りたいわ」
「え？　もういいのか？」
　ヴァイニンガー飛行場を離陸したのが昼過ぎだったから、まだ一時間と経っていない。だが霞龍ネーベルドラッヘたちとのレースに付き合わされたヘレンには、丸一日を空で過ごしたかのような疲ひ弊へい感があった。

「帰ろうよ。続きはまた今度でいいわ。――今度は絶対に龍なんか出てこないところに連れてって」
「へいへい」
溜息混じりに頷うなずいて、カールはエトピリカの機首を緩やかに巡らし、反転させる。
最短航路を飛べば帰路はあっという間だが、カールは敢ぁえて龍の生息地を避けるルートを選んだ。これで帰り道にまで喧けん嘩かを売られたら――そしてうっかり買ってしまったら――今度こそヘレンに絶縁されかねない。

2

グスタフ・ヴァイニンガー博士の私設飛行場は、周囲を山に囲われた高原にある。半径一〇マイル圏内では、間違いなく人口よりも山ゃ羊ぎの生息数が数倍するであろう辺へん鄙ぴな土地だ。
肥ひ沃ょくな平野部が国土の大半を占めるシルヴァーナ共和国において、山岳地帯は未だ開発の及ばぬ僻へき地ちである。古くから近隣の群島諸国と親密な交易を続けてきたシルヴァーナは、鉱物資源については輸入に頼るだけで充分な供給があり、今さら自国領内の採掘を計画してもむしろコスト面で見合わないため、高地では現代に至っても昔ながらの放牧ぐらいしか行われていない。
非公共施設ということもあり、その飛行場はよほど詳細で新しい地図でもなければ記載すらされていない。滑走路は長さこそ無駄にあるものの大型機の離着陸には幅が足りず、そもそも陸路の便が最悪なので商用の運用など成り立たない。まさしく完全に研究目的での用しか果たさない設備である。
むしろ併設されている工房の方こそが施設の本体と言えよう。所員の宿舎も含めて三棟からなり、本格的な風洞実験室を始めとする最新の機材を取り揃えたそこは、完全に外部と遮断された状況下で、航空機の設計から製作までを一貫して執り行えるものだった。エトピリカ

もまたこの飛行場で製作されたワンオフの試作機である。
　靴を脱ぐより慣れた手順でエトピリカを滑走路にアプローチさせたカールは、まだ風防キャノピーも開けないうちから、格納庫の前に佇たたずむ少年の姿を見み咎とがめた。ヘレンと同じくヴァイニンガー博士の孫であり、スタッフでないにも拘かかわらずこの研究所に寝泊まりしている最年少者である。
「エリック……どうしたのかしら？」
　後席のヘレンが弟の名前を口にした途端、カールが「あ」と気まずげな呻うめきを漏らす。
「何よ、カール」
「いや……そうだった。エリックにも一緒に飛んでやるって約束してたんだが、考えてみりゃ、あれ……今日だ」
「あ～あ、もう」
　ヘレンは呆あきれて歎たん息そくした。日付や予定に関するカールの認識のいい加減さは、彼女も過去に幾度となく思い知らされている。そもそもカール・シュニッツという男は、こと飛行機の操縦においてこそ超がつく敏腕だが、その他の日常の諸事については万事において杜ず撰さんで迂う闊かつなのである。カールは空を飛ばすより、街の歩道を歩かせる方が遙はるかに危なっかしいと、研究所の皆から冗談のネタにされる程だ。
　タキシングを終えて静止したエトピリカの風防キャノピーが開くと、エリックは憤然たる面おも持もちで足早に寄ってきた。その両腕には、やや大きめな猫ほどもある生物が抱えられている。この研究所で養われている龍の幼生体で、名前をジークフリードという。ずんぐりした体たい躯くに短い手足、唯一、成体の面影を窺うかがわせるのは大きな一対の翼だが、うち片方には痛々しい添え木があてられている。
　半年前、翼に怪我をして滑走路に落ちてきたジークフリードを、最初に見つけたのはエリックだった。以来、少年が世話役を買って出ることで、幼生龍は飛行場の一員として半ばマスコット同然の扱いを受けている。

「ずるいぞカール！　今日は僕を乗せてくれるって言ったじゃないか!?」
　カールがタラップを伝って地面に降りるより先に、エリックはさっそく詰問の口調である。
「いや、その、うん。そうだったよな……」
「忘れてたのかよ！　男同士の約束だろ!?」
「いやいや、もちろん忘れてないぞ。今飛ばしてきたのはアレだ。エンジンの慣らしでな……」
　続いてコックピットを降りたヘレンは、カールの言い訳に眉まゆを顰ひそめた。
「ちょっとカール……まさか君、またすぐに飛ぶ気なの？」
「ん？　ああ。まぁ今からでも平気だろ。夕方までは天候も安定してるって話だし」
　そう聞いた途端、エリックは不満面を一転させて満面を喜色に輝かせた。
「今すぐ出発かい!?」
「まぁ待て。まずはお前のぶんの飛行服を取ってこないとな。あとそれから、腹ごしらえだ」
「オッケー！　姉さん、ジークを頼むよ」
　さっそくエリックは、抱えていた幼生龍をヘレンの腕に押し付けた。唐突な放置にギャアギャアと吼ほえて不平を訴えるジークフリードだが、慌ててヘレンが手でいなすことで、ひとまず落ち着きを取り戻す。
「君たちねぇ……」
　ヘレンが一言いわんとしたところに、格納庫の中から出てきた老人が、カール達に声をかける。
「いったいなんの騒ぎじゃね？　カール」
「ああ、博士。すみませんがエトピリカに給油しといてもらえますか？　すぐまた飛ぶんで」
　荒れ放題の白髪頭に、油染みだらけの繋つなぎ服という格好は、さ

ながら仕事一徹に年季を重ねた偏屈な整備工、といった趣である。その冴えない風ふう貌ぼうから、近代航空史の立役者という素性を見破るのは相当に難しい。数々の特許を取得し、今やシルヴァーナ共和国が世界に誇るまでに至った航空機メーカーの旗手、ハフナー・インダストリィの立ち上げにも携たずさわった人物でありながら、役員を辞して隠いん遁とんした以後の日常はほとんど世間に知られていない。

　こうして人里離れた山奥に自らのささやかな拠点を構え、若かりし頃そのままに図面や工具と格闘している姿というのは、往年の肩書きだけを知る人からすれば意外なものと目に映るかもしれないが、グスタフ・ヴァイニンガーの人柄を知る者ならば、さもありなんと頷うなずけるところだろう。老いてなお研究一筋で現場に臨む姿勢を崩さない博士の生き様には、なるほど大企業の重役の椅い子すなど窮屈なばかりの枷かせでしかなかろう。

「儂わしの可愛い孫たちに、あまり無茶な真似をさせんでくれよ」

「ええ、もちろん」

　きっぱりと笑顔で頷くカールを横目に、思わずヘレンは小声で「よく言うわ……」と毒づいてしまう。

「さて、と。じゃあエリック、一五分後に待機所で落ち合おうな。俺は軽く腹ごしらえしてくるから。……なあ、さっき北の方角にものすげぇ積乱雲があったんだ。見に行くか？」

「うん！」

　エリックもカールも、さっそく離陸後の計画だけしか眼中になくなっている。一回りも年の離れた二人だというのに、連れ立って宿舎へと去っていく後ろ姿は、揃って遊びに繰り出そうとする、気もそぞろな悪童二人、といった趣だ。

「信じられない……たった今、サーカスみたいなアクロバットやって帰ってきたばっかりなのに」

　見送りながら、ほとほと呆あきれて呟つぶやくヘレン。

「まったく、飛ぶために生まれてきたような男じゃのぅ」

　片やヴァイニンガー老人の方はといえば、給油管をエトピリカのタ

ンクに繋ぎ、ついでにプロペラや方向舵だのがたつきを手早くチェックしながらも、どことなく楽しげな苦笑いを浮かべている。

　確かに年齢の上で子供なのはエリック一人かもしれないが、ヴァイニンガーに従ってこの飛行場に寝泊まりしている連中は、多かれ少なかれ一人残らず子供のようなものだった。わけても一番の腕白はカールであり、そして最も我わが儘ままなガキ大将は、研究主任としてプロジェクトを取り仕切るヴァイニンガー博士その人であろう。

　とうに還暦を超えた身のヴァイニンガーに、『年の功』と自慢できるものがあるとするならば、せいぜいそうやって自らを客観視し、自省できるという程度のことだけだった。

　カールが目星をつけていた積乱雲は、雲頂が成層圏にまで達するほどの特大の代物だった。

　高さ七マイルに及ぶ垂直の壁ともなれば、人造の高層建築はおろか、どんな牙が峰ほうであろうとも及ばない雄大な景観である。むろんその実体は水蒸気なのだから硬さなどないのだが、それでもごつごつと節くれ立った表面の、くっきりと輪郭を成す陰影は、まるで質量を備えた巌いわおのようで、間近に見るほどに圧倒される。

　カールは雲の外縁に沿って悠々とエトピリカを巡航させながら、後席のエリックとともに、その対流性上昇気流が創出した大自然の驚異を観賞していた。

「この下の海は、きっとひどい嵐になってるな……」

「そうなの？」

「ああ。船がいたらそれこそ災難だろうさ。でも空にいりゃ静かなもんだろ？　まぁ、あんまり近づきすぎると雷をくらうから要注意なんだが」

　得意げに解説するカールの声は、地上にいるときより明らかに陽気だ。その機嫌につられて、エリックは前々から抱いていた疑問を口にする。

「カールはさ……空を飛ぶのって、怖くないの？」

「いいや、むしろ安心するね」
　白く輝く雲を見つめながら、カールは吐息まじりに返答する。
「ここにいれば何ど処こにだって行ける。誰も俺を縛ったりしない。最高にいい気分だ」
「いつか落ちるかもとか、思わない？」
「陸にいたって車に轢ひかれるかもしれないぜ？」
「そりゃ、そうだけどさ……」
　エリックとて祖父の仕事が仕事だけに、飛行機の搭乗回数は人より桁けた外れて豊富である。とうに慣れ親しんだ経験ではあるのだが、それでも、やはり地に足がついていないという感覚には一抹の不安が伴う。陸で生まれ育った者なら当然の生理的恐怖のはずだ。
　だがカールは――おそらく虚勢でもなんでもなく、本当に地上よりも空に安息を覚えているのだろう。しみじみと語る声音からも、確かにその気持ちが窺うかがえる。
「地面に這はいつくばってると、なんかそれだけで気が滅入ってなぁ。……俺はこうやって空を飛んでるときにだけ、本当に生きてるって気分がするね」
「ふぅん……カールって、もしかしたら龍にでも生まれた方が良かったんじゃないの？」
「ハハハ、まったくだ。次に生まれ変わるときには、そう願いたいね」
　カールが朗らかに笑ったそのとき、無線機にコールサインが入った。
『ヤーデ基地よりエトピリカ。聞こえてるかカール？　耳寄りなニュースだぜ』
　航空無線におけるヤーデ基地の識別名は、即ちヤーデ高原で唯一の無線施設であるヴァイニンガー飛行場を指す。専任通信士を務めるクルツからの着信だ。
「エトピリカ、感度良好。何事だ、クルツ？」
『たった今、ケルナーのレーダー基地から通達があった。虹龍グレンツ

ドラッヘらしい反応を二つセットで捉とらえたんだとさ。今お前さん方がいる空域から、ざっと北西に一五マイル。一直線に南に向かってるんだと』
「そいつは……聞き捨てならないな」
　興奮のあまり、カールの声のトーンが一段落ちる。
『エリック坊やも乗せてるんだろ？　くれぐれも無茶すんじゃねぇぞ』
「心得てるさ。見物だけだ。博士にも心配するなと伝えといてくれ。通信終わりオーバー」
　無線機に向けてそう告げながらも、カールはエトピリカの機体をバンクさせ、進路を北西へと転進させる。
「龍が二頭って、まさか、決闘？」
　無線の遣り取りを聞いていたエリックも、これには期待を隠せない。
「ああ、それも虹龍グレンツドラッヘとなりゃ、こいつは見逃す手はないぜ……」
「凄いよカール！　空から龍の決闘を見るなんて、僕、初めてだ！」
　エリックのあまりのはしゃぎように、ついついカールは、数時間たらず前にヘレンを乗せて霞龍ネーベルドラッヘ三頭に勝利したことを自慢したくなり、慌てて自分を戒いましめた。——そんな冒険談を聞かされれば、エリックは姉だけ依え怙こ贔屓ひいきだと憤慨し、今度は彼同伴で霞龍ネーベルドラッヘに挑戦しろと言い出すに決まってる。そして要求に応じれば、もちろんヘレンに叱しっ責せきされるのはカールの方だ。
　じわじわとスロットルを開いて機体を加速させつつ、カールは無線で指示された空域を目指す。周囲をせわしなく見回していたエリックは、ほどなく別の飛行物体を目に留めて歓声を上げた。
「龍だ……あ、あっちにも！　霞龍ネーベルドラッヘだけじゃない、雲龍ヴォルケドラッヘもいる！　すごい大きい！」
　続々と姿を見せる龍たちは、すべてエトピリカと同じ方向を目指していた。

「俺たちと同じ野次馬だな。虹龍グレンツドラッヘ同士の大一番とあっちゃあ、どいつもこいつも黙ってられないだろうさ」
　レーダーも無線も持たない龍たちが、一体どうやって遙はるか彼かな方たでの決闘を察知したのか、その秘密は想像すら及ばない。一説によれば龍たちはテレパシーのような超感覚を備えているとさえ言われている。そんな無根拠な推測さえ学説の如くに扱われているのだから、いかに龍の生態が人類にとって未知の領域にあるか知れようというものだ。
「……見えたぞ！　エリック、一時方向！」
　カールが思わず大声で促す。エリックもすぐさま視認できた。遙か前方を、途方もないスピードで横切っていく二つの光点がある。
「ひ、光ってる……」
「ああ、虹龍グレンツドラッヘは霞龍ネーベルドラッヘなんぞとはわけが違う。あいつらにかかっちゃあ、何ど処この学者先生だってお手上げさ」
　数多あまたある龍科龍属の分類においても、ひときわ生物学者たちを困惑させているのが虹龍グレンツドラッヘ属だ。平均体長が四五フィートにも及ぶ大型龍でありながら、飛行速度は群を抜いて高速を誇る。そしてその飛行原理は、霞龍ネーベルドラッヘ属のように物理的な解明すら及んでいない。
　エトピリカを最大速度で疾駆させながら、カールとエリックは彼かな方たの虹龍グレンツドラッヘの雄姿に目を凝らす。眩まばゆいほどに輝く一対の翼から、鱗りん粉ぷんのように撒まき散らされる光の礫つぶてが、かろうじて見て取れた。
　未だ虹龍グレンツドラッヘは死し骸がいすら回収されたことがなく、数少ない観測報告から、その翼が繊せん毛もう状だという点までは確認されているのだが、それがなぜ光輝を放ち、ああも常識外れな高速飛行を可能とさせているのかは、まったくの謎である。ヴァイニンガー博士の談によれば、もっとも有力視されている仮説は『プラズマ放電』なる現象らしいのだが、それがなんなのかは説明を受けたカールにも理

解しきれなかった。
　ただ一つ確実に言えるのは——現時点において、虹龍グレンツドラッヘは人類が未だ到達できない領域の存在だということだ。
　過去に確認された計測データにおいて、虹龍グレンツドラッヘの最大速度は四八〇ノットに至っている。現行の航空機で、この飛行速度を発揮した機体は存在しない。それどころか航空機の速度記録が四二〇ノット辺りで頭打ちになりつつある現状、もはやレシプロ式の推進装置で虹龍グレンツドラッヘの飛行能力を凌りょう駕がすることは原理的に不可能とさえ言われている。
　霞龍ネーベルドラッヘたちを降くだしたエトピリカであっても、こればかりは及ぶべくもない。徐々に遠ざかり小さくなっていく二つの輝影を、カールたちはただ為なす術すべもなく見送ることしかできなかった。
「凄い……虹龍グレンツドラッヘなんて、写真でしか見たことなかった」
「いや、事によっちゃあ、もっとド凄ぇものを見られるかもしれないぞ」
「え？」
　カールは既に、虹龍グレンツドラッヘの光に見とれてなどいない。さらなる期待に浮き立った目で、周囲をくまなく見渡している。
「虹龍グレンツドラッヘ同士の勝負なら、あいつが見届けに来たとしても不思議はない……エリック、全方位警戒だ。何かが光ったらすぐに教えろ」
「う、うん」
　わけも解らず、左右と頭上に目を配るエリック。果たして、それを視認したのはカールよりエリックが先だった。
「カール、えっと、八時方向！　なんか光ってる！」
　その光こう芒ぼうは、一見、新たな虹龍グレンツドラッヘが駆けつけてきたのかと思わせるものだったが、よく見れば前の二頭のそれとは比較にならないほど、鮮烈で眩まばゆい。
「……来た。あいつは……！」

カールの感嘆の声よりも速く、その光は信じがたいほどの速度で一瞬のうちにエトピリカに肉薄する。
「うわぁッ！」
目を覆うほどの輝きが視界を真っ白に覆い尽くし、はじめエリックは、その光体に激突されたのかと錯覚した。実際にはそれは彗星の如く尾を引いて、エトピリカの風防キャノピーのすぐ直上を掠かすめるようにして通過していったにすぎない。——が、閃光に目が眩くらむその直前、カールははっきりと見届けていた。光を放つ一対の翼、そのあまりに荘厳で巨大な龍のシルエットを。
「あ、あれは……」
恐る恐るエリックが目を開けたときにはもう、輝く飛影はエトピリカより遙はるかに前方、先に飛び去っていった虹龍グレンツドラッヘの後を追う軌道を猛然と飛び去っていく。
「帝凰龍カイザードラッヘ……」
茫ぼう洋ようと、憧しょう憬けいに魂さえ抜かれたかのような声で呟つぶやくカール。エリックもまた言葉を失った。たったいま目にしたそれが、研究者の間においてさえ実在すら疑問視されているという、御お伽とぎ噺ばなしにのみ語られる『龍の中の龍』だとするならば……
視界を覆うほどに巨大だったその影は、今や蒼そう穹きゅうにきらめく光点でしかない。その点を中心にして、ふいにリング状の霞かすみがふわりと生じ、周囲の空へと拡大する。
それを見た途端、前席のカールの肩が緊張に強こわ張ばるのを、エリックは背後から見て取った。
「揺れるぞ、構えろ！」
「え——」
鋭い叱しっ咤たの意味をエリックが理解するより先に、耳を聾ろうする雷鳴のような轟ごう音おんが轟き、エトピリカはいきなり乱気流に呑まれたかの如き凄まじい振動に見舞われた。驚きのあまりエリックが絶句しているうちに、機体は錐きり揉もみをしながら一気に高度を落とす。

とはいえ、操縦桿かんを握るカールはさすがに百戦錬磨の強つわ者ものだ。慌てず騒がずエルロンを操って揚力を取り戻し、あっさりと機体を水平に立て直した。事が収まってからようやく、エリックは自分が悲鳴を上げることさえ忘れていたのに気がついた。

「今の、あれ、本当に……」

「ああ、そうさ。本物の帝凰龍カイザードラッヘだ」

覇を競っていた二頭の虹龍グレンツドラッヘも、その後を追っていった巨大な光も、既に肉眼で捉えられる範囲にはなかった。決着はこの空域でなく、どこか遠い空の彼かな方たにまで持ち越されたのだろう。群れ集っていた龍たちも追うのを諦あきらめたのか、散り散りに四方へと去っていく。ほどなく空は、それまでの喧けん噪そうが嘘だったかのような静寂を取り戻し、エトピリカのエンジン音だけが、それを乱す唯一の騒音として残された。

「奴ばかりは、まだ撮影も録画もされたことがない。レーダーで捕まえたときも、大抵は隕いん石せきと勘違いされちまうんだが……いるんだよ。ただ一頭限りだが、虹龍グレンツドラッヘよりさらに速いヤツが」

低く抑えたカールの声は、だが興奮のあまり震えていた。何かに取り憑っかれ、我を忘れるほどに魅入られた者にだけ特有の、どこか譫うわ言ごとめいたその声に、エリックはわけもなく慄りっ然ぜんとなった。

「さっき、あいつが後ろに残していった輪、見たか？」

「う、うん……」

「あれはな、言ってみりゃ『空気の波』だ。船の舳へ先さきが海に波を立てるだろ？　あまりに速く飛び過ぎると、空気抵抗が水圧同然になって、ああいう現象が起こるのさ。『ソニックブーム』って言ってな。ヤツは、空気に津波を起こしちまうんだよ。俺たちはその波に攫さらわれたんだ」

「音のソニック、轟きブーム……？」

「想像つくか？　あいつが飛ぶのは、音が空気を伝わるよりも速いんだぜ」

『音』などという実体のないものに、速度の概念を当てはめて考えるということ自体、エリックにとっては気の遠くなるような話である。

　遠くの山並みに向けて叫んだ後に、谺こだまが聞こえるまでのタイムラグ。それがつまり、山肌までの距離を『声』が往復するのに要した時間ということだ。ほんの一瞬のうちに山から山までを飛翔するのが『音』なのだ。それよりなお速く、形と重さを備えた物体が移動するなど、想像を絶する話だが——その実例をたった今、エリックは間近に見届けたのである。畏い敬けいの念に、あらためて少年は身震いした。

「……そりゃあ確かに、神様も同然だよね」

「そうだ。まだ今のところはな」

　少年の声が畏おそれに萎しぼむ一方で、カールの声は、不敵なまでの闘争心に満ちている。

「びびるなよ、エリック。お前の爺じいさんは、あの帝凰龍カイザードラッヘにケンカを売る算段をしてるんだぜ」

「そんな……どうやって⁉」

「今までにない、まったく新しい飛行機を飛ばすのさ。人間どころか龍たちでさえ、度肝を抜かれるような代物を、な……」

「まさかそれが、いま爺ちゃんたちが作ってる、あの……」

「そう、俺たちの『ブリッツフォーゲル』だ」

　そしてカールは、輝く翼が飛び去った南の空へと、挑みかかるような眼差しを向けて嘯うそぶいた。

「次に会うときは……こうもあっさり袖にできると思うなよ。空のチャンピオンさんよ」

3

　山やま間あいにまだ朝あさ靄もやの立ち込める早朝、険しい斜面を九十九つづら折りに這い登る道を、駄馬のようにのんびりと辿たどる自動車がある。

　見るからに街乗り用の小型車にとって、ろくに舗装もされていない急勾こう配ばいの道のりは、明らかに過酷すぎる行程だった。おまけに大の男が三人と、かさばる撮影機材を満載しているとあっては、エンジンとサスペンションが共に悲鳴を上げるのも当然である。

「あ～あ。朝っぱらからご苦労なこったぜ、俺たちも」

「ぼやくな。これも仕事だ。仕事」

　車体の揺れを緩和するには程遠い固さのシートに辟へき易えきしつつ、やるせない愚痴を交わすのは、『デイリー・シルヴァーナ』誌が擁する専属記者とカメラマン、及びその助手である。

「……なぁ、ガセだったらどうするよ」

「あん？」

「世捨て人の変人科学者が、こんな山奥で新発明のプレゼンだなんて、胡ぅ散さん臭いにも程があらぁな」

　車に乗り合わす誰もがそれを考えないではなかったが、ここに至るまで敢えて一人も口にしなかったのは、この退屈な朝のドライブをこれ以上陰いん鬱うっにしないための配慮だった。なのに結局、最も睡眠時間の足りていないカメラマンが、ついに我慢の限界に達したらしい。

「万が一、ってこともあるでしょう？　グスタフ・ヴァイニンガーっていやぁ、昔は相当に鳴り響いた名前だし……」

　運転を押し付けられて、不承不承ステアリングを握っていた撮影助手が、露骨に気乗りしていない口調ながらも諫いさめにかかる。が、その先を続ける前に、けたたましいクラクションが彼らの車を背後から猛烈にどやしつけた。

「ん？　……わぁ！」

　バックミラーで騒動の主を確かめようとした直後、黒塗りの大型セダンが、あわや接触事故という際どいハンドリングで強引に追い越し、排煙のみを残して去っていく。

「な、あっぶねぇ……なんスか今の？　他紙の車かな」

「まさか。あんな慌てて行くほどの特ダネだなんて、誰も思っちゃい

ねぇって」
　驚き呆ぁきれたカメラマンと撮影助手がぼやく。が、ただ一人、セダンのナンバープレートをはっきりと見み咎とがめた記者だけは、訝いぶかしげに目を細めていた。
「今の奴、黒ナンバー……国防省の車じゃねえか？」

　事実、記者達の車を尻目に道を急ぐセダンは、国防省の公用車であることを示す黒色のナンバープレートを提げていた。
　後部座席に腕組みをして身を預けている将校は、そのダークグレイの制服と襟章から空軍中佐と知れる。風ふう貌ぼうこそ若々しいが、厳いかめしい表情と鋭い眼光は、なるほど階級に相応ふさわしい貫禄を醸かもしていた。未だ隣国ヴィルドバッハと交わした熾し烈れつな戦火の記憶も生々しいシルヴァーナにおいては、武勲で昇進を果たした若年の将校も珍しくはない。
「……いま追い越した車も、プレスの連中でしょうか？　ゲプハルト中佐」
　ハンドルを握る副官にそう問われて、青年将校は忌いま々いましげに頷うなずいた。
「だろうな。ハイエナどもめ、続々と……」
　普段は牧童の荷馬車ぐらいしか通うことのない山道だというのに、今朝に限っては、遠路はるばる都市部から訪れたナンバーの自動車が次々と現れる。ゲプハルトたちが追い抜いた車はさっきので四台目。いずれも同じ目的地を目指しているに違いなく、この道が通ずる先といえば、ヴァイニンガー飛行場があるのみだ。
「やはり先行している憲兵隊に、飛行場を閉鎖させるべきでは」
　副官の提案に、ゲプハルトはかぶりを振る。
「もう遅い！　騒ぎをよけいに大きくするだけだ。……くそ、狸たぬき爺じじいめ。とんだ番狂わせを……」
　グスタフ・ヴァイニンガー博士が、ひとまず物笑いの種にされずに済むだけの研究成果をまとめられるに至るまで、あと三週間は要する

だろうというのがゲプハルトの見立てだった。故ゆえに、今朝になって届いた公開実験の告知は、まさに寝耳に水だった。
　あわよくばプロジェクトの主導権を奪えないものかと機を窺うかがっていたゲプハルトとしては、まさに機先を制された形である。油断ならない連中だと重々承知していた筈はずなのに、多忙のあまり視察を疎おろそかにしていたことが、今になって悔やまれた。
　取り敢あえず、いの一番に急行させた憲兵隊には、現地での臨検と格納庫の保全を厳命してある。口頭での取材ぐらいなら看過するにしても、こちらの監視下にない状況で撮影までさせるわけにはいかない。
　招待された記者たちも、今はまだ半信半疑なのだろう。悪路に構わず先を急ごうとする車は一台もない。今日、明らかにされる研究成果の重大さについて正しく認識している者は、まだ一人もいないということだ。
「問題は、今後か……」
　今日、あれが衆目にさらされてしまえば、このヤーデ高原での秘め事は市し井せいのみならず諸外国からも、一気に注目の的となることだろう。今後は開発の進しん捗ちょくだけでなく、マスコミの検閲と機密保持にまで注意を向けねばならない。考えるだに苛いら立だちが募り、はたして飛行場に到着する前に冷静な自分を取り戻せるかどうか、ゲプハルトは自らの自制心に不安を感じつつあった。

　薄雲のわずかにたなびく晴天を見上げながら、カールはひとつ身震いしてフライトジャケットの襟えりを寄せた。高原の陽射しは既に眩まばゆいほどだが、まだ朝の冷気を温めるまでには至っていない。
　待ちに待った朝、待ちに待った空だった。
　天候は事前の予報通り安定している。滑走路の真ん中に立ち、遮る物の何もない視野一杯の蒼そう穹きゅうを見渡すと、心だけはもう大地を離れていきそうになる。
「……いよいよ、今日なんだね」

　ジークフリードを抱いて隣に立っているエリックにも、カールの内心の興奮は見て取れるのだろう。
　他のスタッフが機体の最終点検に追われている間、カールとエリックは手持ち無沙汰を紛らわそうと滑走路のコンディションを点検していたが、それもあらかた終わってしまった。後はもう定刻まで、空でも眺めているしかない。
「博士と会ってからずっと、今日この日を待っていた。いよいよだ」
　離陸の時間が一分一秒すら待ち遠しく、カールは落ち着きなくペンダントの龍の牙を弄いじっている。
　エリックも今では、今日カールが乗ることになる機体がどういうものなのか理解している。雑用係という名目で工房に入り浸り、その組み立ての工程を目まの当たりにしてきたのだ。ヴァイニンガー博士とそのスタッフによる成果物に、なんの間違いもあろうはずがないとは重々承知している——が、それでも一抹の不安を拭ぬぐいきれないのは、それがエリックの知る『航空機』の形態をあまりにも逸脱しすぎていたからだ。
「ちゃんと飛ぶかな、あれ」
　少年の不安をよそに、カールは晴れやかな笑みで応じる。
「もちろんだ。ブッチギリに凄い飛び方をしてみせてやる」
「……龍みたいに？」
「そう、龍みたいにだ」
　エリックの脳裏には、今もカールとともに見た虹龍グレンツドラッヘや帝凰龍カイザードラッヘの雄姿が焼き付いて離れない。
　だがそこでふと、腕の中に抱えたジークフリードに目をやれば、痛ましさに胸が重くなる。
「結局、治るの間に合わなかったな。お前の怪我」
「……まだダメか、ジークは」
　幼生龍の翼からは、添え木こそ外れたものの、今は代わりに湿布薬と包帯が巻かれている。
「骨は繋つながったんだけど、筋肉が弱ったままなんだって。時間を

かけてリハビリさせないと。焦らせちゃ駄目だって姉さんが言ってた」
　カールも手を伸ばして、ジークフリードの喉を撫なでてやる。初めのうちこそエリックにしか懐かなかった幼生龍だが、今では大分人間に心を許すようになったのか、飛行場のスタッフであれば誰に触れても抗あらがう素そ振ぶりは見せない。
「お前も本当は、アレと一緒に飛びたかったんだよな。ジーク……」
　エリックとて、やがて来るジークフリードとの別れは寂しいが、それでもここにあまり長居させるわけにはいかないことも理解している。
　龍の生態は、学術的にも未だ多くの謎に包まれており、生きたまま捕獲された幼生体となれば格好の研究材料となるのだろうが、だからこそヴァイニンガー飛行場では、ジークフリードをこっそり人目に付かぬよう保護する方針で全員が同意した。最後まで飼い殺されてから解剖の憂うき目に遭わせるよりも、怪我が治り次第、野生に還らせるための処置である。およそ航空事業に携たずさわる者、わけても技術者やパイロットであれば、誰でも龍については侵しがたい畏い敬けいの念を抱いているものだ。
「――置き去りにされたのは、何もその龍だけじゃないぞ」
　そう背後から声をかけられて、エリックとカールは、足早にやってくる空軍将校の姿に気付いた。
「ゲプハルトか。そろそろ来る頃だとは思ったよ」
　カールの声に、ほんのわずかな険が混じったことに、エリックは気付かない。栄はえある士官服を一いち分ぶの隙すきもなく身につけたゲプハルトの長身は、少年にとって羨せん望ぼうの対象でもある。
「ヴァイニンガー博士は、今どこにおられるかな？」
　カールではなく自分が声をかけられたことで、エリックはますます誇らしさに背筋を伸ばしてしまう。
「たぶん格納庫です。捜してきます」
　ジークフリードを抱いたまま、意気揚々とその場を駆け去っていく

エリック。まだ大人の賢さかしい話術に疎うとい少年は、体てい良よく座を外させせられたという真実に気付かない。

「しばらくご無沙汰だったな。公務の方が忙しかったか？」

「ここ最近、足が遠のいて済まなかった。エンジンの完成は来月になるって聞いていたんでな」

　ゲプハルトの皮肉に、カールは悪びれた風もなく平然と応じる。

「ああ、完成品はまだ先だ。今日飛ばすのはテスト用の試作型だよ」

「だとしても、史上初のジェットエンジンが飛ぶことに違いはない。今日という日は歴史に残る」

「かもな」

　事の重大さを弁わきまえているとは到底思えない、カールの飄ひょう々ひょうたる態度に、いよいよゲプハルトは眉を顰ひそめる。

「……事前に知らされていれば、もっと然しかるべき形でテスト飛行の段取りもできたんだ」

「どこぞの砂漠の真ん中でこっそりと、か？　冗談じゃない。俺たちは軍の秘密兵器なんぞ造るってるわけじゃない」

「まさか空軍の資金援助を忘れたわけじゃなかろうな？」

「約束通り、一通りの飛行テストが終わった後は、機体は軍のものになる。今日の発表会だって、設計図を見せびらかすわけじゃない」

　まるで聞き分けのない子供を相手にしているかのように、中佐は深い溜息をつく。

「この研究が軍にとってどれほどの意味を持つか、お前だって解らんわけじゃないだろう？」

「今からやるのは航空力学上の実験だ。戦争の手伝いじゃない」

　頑として言い張りつつ、カールはゲプハルトを正面から見据え、さらに断固と言い放つ。

「空は誰のものでもないし、アレを飛ばすのは誰のためでもない。だから誰にも隠したりはしない。すべての人に公平に見せる」

「そんな呑気な理屈が通じる情勢じゃないのは知ってるはずだ」

「……戦争なら余よ所そでやってくれ。俺たちを巻き込むな」

「そういう台詞せりふは味方じゃなく、敵国の奴らに言うんだな」

　この先いくら言い争ったところで不毛なばかりだというのは、カールもゲプハルトも解っていた。腐れ縁とはいえ付き合いの長い二人である。今の両者の立ち位置がどれだけ食い違っているのかは、お互いに了解していた。

「今日からこの施設には憲兵隊を警備に当たらせる。スパイや破壊工作の危険もあるからな」

　そう言い残して、ゲプハルトは背を向け、格納庫の方へと去っていった。一人残されたカールは無言のまま、再び、高く澄んだ空を見上げる。

　だがその横顔は、エリックと語らっていたときよりも、どこか乾いた虚うつろなものだった。

4

　午前一〇時――予告された公開実験開始の時刻。

　あからさまに急きゅう拵ごしらえと見て分かるぞんざいな演台の前に集まった報道関係者は、おおよそ一〇人余り。急な告知にも拘かかわらず山奥にまで駆けつけた人数と思えば多いとも言えるし、グスタフ・ヴァイニンガー博士の往年の名声に鑑かんがみれば少なすぎるとも言える。

　爽さわやかに吹き渡る高原の風が運んでくるのは、放牧される羊たちの長閑のどかな嘶いななきばかり。告知に謳うたわれていた「世紀の大発明」という文もん言ごんを真に受けるには、あまりにも牧歌的すぎるロケーションだが、半面、格納庫の近辺で歩ほ哨しょうに立っている憲兵隊の存在に、記者達はさっそく持ち前の嗅きゅう覚かくをくすぐられていた。

　どのような形であれ軍部が関与しているならば、この飛行場での研究課題が、まるきり世捨て人の道楽とも考えがたい。また演壇横の椅い子すに腰掛けて参列しているゲプハルト・ミュラー中佐は、前さきの

戦役における数々の武勲で紙面を賑にぎわせた英雄の一人だ。
　ともすれば或あるいは、このネタ、思わぬ拾い物になるかも――早朝の山道のドライブに辟へき易えきしていた記者たちも、今は固唾かたずを呑んで、主催者ヴァイニンガー博士の動向に注目していた。
　演壇に立った博士の服装は、永らく着古して色落ちした繋つなぎ服のままだが、まるでそれが技術屋の正装だとでも言わんばかりに誇らしげに胸を張っている。軽く咳せき払ばらいをしてマイクの調子を確かめると、老博士は朗々たる声で前口上を切り出した。
「本日は遠路はるばるお越しいただき、ありがとうございます。只今よりご紹介する新型航空機は、従来にない、まったく新たな推進装置による実験機であり、私の長年の夢の結晶であります」
　演壇の隣に用意されていたボードから布の覆いが取り払われ、何やら複雑な機械装置の概要図が露あらわになった。円筒形の断面図で、前と後ろの開口部には、空気の流れを示すらしい矢印が描き添えられている。
　推進装置、とはいうものの、それは記者達が知る航空機のエンジンとは似ても似つかない代物だった。――まず第一にプロペラが見当たらない。強しいて探せばそれらしい風車状の部品があるにはあるが、それは断面図として示されるエンジンの内部に位置している。
　一人の記者が面白半分に挙手して、さっそく質問をぶつけた。
「拝見したところ、プロペラを外部に露出させない構造、ということでしょうか？」
　それなりに図面を解釈できるだけの専門知識がある記者がいると知って、ヴァイニンガー博士は小気味良さげに頬ほおを緩めた。
「残念ながら、このタービンは従来のプロペラのような、直接的な推進力を生み出す装置ではありません。これはあくまで、吸気した外気を圧縮するコンプレッサーにすぎません」
「外気を……圧縮？」
　幾人かの記者たちが、ゴム風船が空気を吹き出して宙に舞う様子を思い浮かべてしまい、思わず失笑しかかった。航空機を離陸させるに

はあまりに心こころ許もとないイメージである。
「ええと、つまり、新型エンジンは圧あっ搾さく空気を吹いて飛ぶ、と？」
「いいえ。圧縮空気は次に燃焼室へと送り込まれ、気化燃料と混合された上で、点火されます。こうして発生した高温高圧のガスは次のタービンセクションへと流れ込み――」
　パネルの図解を指差しながら、ヴァイニンガー博士の解説は滔とう々とうと続く。
「――ここでタービンホイールを回転させます。この回転はコンプレッサーの回転軸へと伝達され、最初の空気の圧縮率をより一層高める仕組みです。タービンを抜けた燃焼ガスは後端のノズルから噴出し、この気流によって機体は推進します」
　次第に複雑怪奇な呪文じみた難解さを増していく説明に、大方の記者たちはついて行けなくなった。躍起になって手帳にメモを取る者も、早々に概要の把握を諦あきらめた者も、ともあれ今から発表される推進装置が、途方もなく複雑で高度な構造だという点だけは理解した。
　博士の説明が一段落したところで、一人の記者がおずおずと挙手し、何はともあれ一番肝要ともいえる質問をぶつける。
「……その、新型推進装置ですが。名称はどのように？」
「ふむ――」
　ヴァイニンガー博士は勿もっ体たいぶるかのようにパネルの図解を見つめてから、
「ごく端的に特徴を表わす呼称として、とりあえず我々は、このシステムを『軸流式ターボジェット・エンジン』と呼んでおります」
　そう厳おごそかに宣言した。記者達が一斉にその命名を書き留める。これで彼らもひとまずは、記事に「わけの分からない推進器」などと記述する羽目にならずに済んだ。
　博士が格納庫の方に手を挙げて合図すると、待ち構えていた助手たちが、両開きの滑り戸を引き開ける。

まずディーゼルエンジンの唸うなりとともに牽けん引いん車両が姿を現し、その先導に従って、一機の航空機が、まるでヴァージンロードを辿たどる花嫁のように厳おごそかに、陽光の下へと進み出た。未塗装のまま剥むき出しの地金が白銀に輝き、見守る全員の目を眩くらませる。

「それでは、改めて、皆さんにご紹介しましょう。——人類が誇る新しい翼、『ブリッツフォーゲル』です」

機械工学の専門家でもない記者たちは、結局のところ、言葉だけでは新型飛行機の革新性と意義について納得するまでには至らなかった。が、ついに目の当たりにした『実物』を前にして、彼らは一斉にその驚異を理解した。

それまで記者たちが、実験機という言葉から連想していたのは、既存の機体に眼目となる装置を追加して、目新しい機能の効果を披露するためだけに用意された、その場凌しのぎの急造品だった。

だが今、目の前に現れた機体は違う。従来の航空機とは似ても似つかぬその機体は、ジェットエンジンなる新造機関を搭載するためだけに一から設計されたに違いない。或あるいは、この機体を飛ばすためにこそジェットエンジンが必要とされたのか。

前もって説明された通り、プロペラがない。だがプロペラを廃しただけで、飛行機の容姿というものはここまで激変するのだろうか。一対の主翼と一枚の垂直尾翼という、ごく基本的な構造こそ共通だが、鋭く錐きりのように尖とがった機首から始まって、小さく扁へん平ぺいな風防キャノピーから、鏃やじりのように後退角度のついた主翼、そして機体終端でなく垂直尾翼の突端にＴ字型に配置された水平尾翼に至るまで、すべてが流線型に連続した曲線で構成されている。

ただ一か所だけ輪郭の連続性を崩しているのが、左右の主翼の付け根に穿うがたれた鰓えらのような開口部だ。また尾翼の下、機体の最終端にあたる部位も、細く窄すぼまったノズル状の部品で締めくくられている。概念図に描かれたジェットエンジンの吸気口および排気口の、それが実際の姿なのだろう。

　あらゆる無駄な鈍重さを排はい斥せきしたそのシルエットは、もはや洗練、という言葉ですら言い表わすには生温い。まさにそれは鋭利に研ぎ上げられた『刃やいば』にも似ていた。——そう、これは這ほう々ほうのていで風に乗り、宙へと浮き上がるための機械ではない。文字通り風を切り裂き、空へと突き刺さっていくための『剣』だ。
　息を呑んで見とれていたカメラマン達も、すぐさま職業意識を取り戻し、先を争うようにして撮影機材の準備に取りかかった。一度は誰もがガセかと疑ったネタだったが、これがもし本当に空を飛ぶのなら——記事は一躍、紙面トップの扱いで間違いない。
　特ダネの予感に興奮を隠せない記者たちが、次々と挙手して質問をぶつけにかかる。
「えぇ、博士。率直なところ、このジェットエンジンというのは、従来の飛行機のプロペラよりも優位に立つものなのでしょうか？」
　目新しさに見合うだけの機能性があるのかという、なるほど尤もっともな疑問であったが、対するヴァイニンガー博士は自信満々に応じた。
「レシプロエンジンの最高速度は理論上、四三〇ノット前後が限界値とされています。かたやブリッツフォーゲルの最高速度は、理論値では五五〇ノット以上に到達する見込みです」
「ご、五五〇……」

　口頭で聞かされただけならば与ょ太た話と笑い飛ばしたくなる数字だが、記者たちの眼前に晒さらされた機体には、そうさせないだけの説得力があった。

　さらに、質問の矛ほこ先さきは、演壇の傍かたわらに控えていたゲプハルトにも向けられた。

「そちらに空軍の方もいらっしゃるようですが、今回の新型機開発に軍は関かかわっているのでしょうか？」

　問い質ただされるのを覚悟の上で参列していたゲプハルトは、予あらかじめ胸の内に用意してあった返答を、諳そらんじるようにして口にする。

「本日の飛行実験はあくまで予備的なものであり、新型機はまだ軍が採用を検討する段階にはありません。ただひとつ言えることは、今回のヴァイニンガー博士の偉業が航空技術史に残る功績であり、これによって我がシルヴァーナの技術力は近隣諸国に比類なきものであることが証明されたということです」

　ゲプハルトのコメントは、よく吟味すればなんの内容も伴わないものだったが、そのレトリックは、あくまでヴァイニンガー個人の業績でしかないジェットエンジンの発明が、まるで国益と直結したものであるかのような印象を与える巧みなものだった。わずかに眉を顰ひそめた博士に、中佐が皮肉を込めた目配せを送る。だがそんな両者の無言の鞘さや当てに、記者たちは気付くことなく、さらなる質問を続ける。

「それはつまり、我が国の航空戦力がヴィルドバッハ公国の軍事力を圧倒できるということでしょうか？」

　時勢を鑑かんがみれば当然の質問である。これも予期していたゲプハルトは、取り澄ました笑顔で応じた。

「我がシルヴァーナ空軍の誇る精鋭は、いつの時代も圧倒的ですよ」

　まるでその一言がすべての結論だとでも言わんばかりに、ゲプハルトは以降の質問を黙殺し、さっさと着席してしまった。そこでヴァイニンガー博士が咳払いで記者たちの注意を演壇上の自分へと引き戻

す。博士としても、これ以上、記者たちの質問が政治的な方向へと傾いていくのは望ましくなかった。
「それでは、そろそろ起動実験に入りたいと思います。万が一の危険に備えて、取材の皆さんは待避壕ごうにお移りください」

　ブリッツフォーゲルを目まの当たりにした記者たちのどよめきは、格納庫裏のロッカールームに待機するカールの耳にも聞こえてきた。
　これより彼が乗る愛機のお披ひ露ろ目めが、喝かっ采さいで迎えられたなら、少しは誇らしい気持ちが胸に湧き起こりそうなものだったが、生あい憎にくとカールの胸中は静かに冷めきっていた。
　待ちに待った初飛行を前にして、たしかに血は滾たぎっている。
　だがそれが心躍る興奮へと直結しないのは、先刻のゲプハルトとの会話を、今も脳裏に引きずっているからだ。
　自分は過去を捨てた男だと、少なくともカール自身はそう思っていた。だがそんな彼にとって、今なお唯一、過日の記憶への接点となるのが、ゲプハルト・ミュラーという人物なのだ。
　そう——今この控え室で離陸のときを待つ心境は、葬り去ったはずの過去の自分と、あまりにも近い。
　今日に至るまでも腕を錆さびつかせないようにと、幾度となくここの滑走路から空を舞い、様々な飛行機を乗りこなしてきた。だが過去に乗り慣れた数多あまたの機体と比べても、今度の実験機の初飛行は、危険度に於おいて段違いだ。
　勿もち論ろん、開発から設計、整備に至るまで関わってきたヴァイニンガー博士とその助手たちには、全幅の信頼をおいている。そしてどんな不慮の事態が起ころうと対処できる自信があればこそ、カールはテストパイロットの役を買って出て、ここにいる。
　だがそれでも、危険は厳然として存在する。とりわけ地表を数千ヤード離れた世界では、万に一つの不運やミスでも、もたらされるのは大惨事だ。いざそうなればカールが命拾いする可能性はゼロに等しい。これからカールが挑むのは、死と隣り合わせの、いつになく危険

な空なのだ。
　いつになく——その言葉の欺ぎ瞞まんに、思わずカールは自じ嘲ちょうの失笑を漏らす。
　そう、大嘘だ。死を覚悟して飛ぶのは初めてではない。むしろ懐かしんでさえいいほどに馴染みの感覚だ。三年前、まだ空軍にいた頃は毎日がそうだった。いつだって空を飛ぶカールの背中には、死神の冷たい腕かいなが貼り付いていた。
　ゲプハルトとあんな会話をしなければ、思い出さずに済んだかもしれない。今いる仲間たちの声援だけを胸に、意気揚々とコックピットに乗り込めたかもしれない。
〝——そんな呑気な理屈が通じる情勢じゃないのは知ってるはずだ——〟
　道を違たがえたかつての友の言葉が、頭に焼きついて離れない。
　そう、分かりきっている。今この状況でブリッツフォーゲルを見た人々が、何を思い、どういう期待を託すのか……それは歴然だ。
「知るかよ。そんなこと……」
　カールは自らに言い聞かせるために、敢あえて口に出して呟つぶやいた。
　誰のためでもなく、ただ自分のためだけに飛ぶ。そう心に誓ったからこそ、カールは再び空に戻ることができたのだ。それを忘れず肝に銘じておく限り、過去に囚とらわれることはない。カールは飛行服の胸元で、龍の牙のペンダントを握り締め、念じた。
「俺は、今度こそ……」
　ロッカールームのドアが外からノックされ、専任通信士のクルツが顔を出した。
「そろそろ出番だぞ、カール。準備は？」
「ああ、ＯＫだ」
　毅き然ぜんとそう答えて、カールは腰掛けから立ち上がる。胸の内の憂いは、それ以上、省かえりみたりしなかった。
　空が待っている。なんの疑問も葛かっ藤とうもない、自由な空が。

すべての重荷を地上に捨てて、舞い上がるときが来たのだ。

5

ブリッツフォーゲルは滑走路の中央にまで運び出されて、パイロットの搭乗を待っていた。

その周囲で機体の最終点検に勤いそしんでいるのは、ヴァイニンガー博士の直じき弟子であり、開発のメインスタッフでもあったアルベルトとオットーの二人である。オットーはエンジンの組み立て、アルベルトは機体外装の設計において、それぞれ博士の図面を実現にまで持っていった功労者だ。

二人とも表情には緊張の固さより、期待と興奮の色が濃い。自らの仕事の成果を露ほどにも疑っていないのだろう。それがただの思い込みでないことを、カールもまた知っている。ここヴァイニンガー研究所に集っているのは、天才に率いられた天才の群れだ。そして、ブリッツフォーゲルが完成に至るまでに費やされた彼らの情熱と執念を、カールはつぶさに見届けてきた。

「眠り姫はいつでも起こせるぜ。あとは王子様のキスを待つだけだ」

オットーがそう軽口を叩いて、機体の側で待機する発電車を顎あごで差した。ジェットエンジンを始動させるためには、まず外部電源の力を借りてコンプレッサータービンを充分な回転数にまで持って行かなくてはならない。そんな些さ細さいな点からしても従来のレシプロエンジンとは悉ことごとく勝手が違う。エンジン点火の瞬間に報道陣が立ち会わないのも当然の配慮であった。皆、ホスト役の博士やゲプハルト共々、滑走路脇に設しつらえられたコンクリート製の待避壕ごうへと移動して、遠巻きに離陸の準備を見守っている。まるで爆発物実験でも見守るかのような構えだが、まるきり未知の推進装置ともなれば、無事に機能してその信頼性を証明しない限り、爆弾と同様の用心をされたとしても仕方ない。

むしろ機体への搭乗を前にして体てい良く人払いができたという点

で、カールにとっては喜ばしかった。ヴァイニンガー博士が、実験前に行って然しかるべきテストパイロットの紹介を省略したのには理由がある。とかくカールはメディアへの露出を嫌っていた。配布された説明資料でも、パイロットの氏名は秘されている。

「くれぐれも言っておくが――」

　やや心配性の気のあるアルベルトが、カールの性格を見越して釘くぎを刺す。

「今日のところは、離陸、巡航、着陸。それだけのパフォーマンスで充分だ。後の課題は追々、調整を入れてからだ。くれぐれも妙な欲を出すなよ。特に翼面積については危なっかしい綱渡りをしてるんだ」

「はいはい」

　苦笑いで聞き流しながら、カールは分厚い中綿の入った飛行帽を被かぶった。この機体に限っては、搭乗の前に帽子から手袋まですべての装備品を装着しておく必要がある。いざ乗り込んでしまったら、その程度の着脱にさえ不自由するほどにコックピット内は狭い。

　あくまで実験機であるブリッツフォーゲルは、実用上の利便性など完全に度外視されている。その最たる部分がコックピットレイアウトだ。ほとんど身動きできない蛸たこ壺つぼのような空間に、パイロットは半ば身体をねじ込むようにして乗り込まねばならない。風防キャノピーの開閉も機内からは行えない、というよりそもそも『開閉』のための構造すら省略されている。パイロットは、いったん風防を取り外した穴から機内に乗り込み、その後から整備員が風防を被せてボルト留めする、というお粗末さである。

　アルベルトの手を借りて操縦席にハーネスで身体を固定されると、まるで飛行機に乗り込んだというよりも、自らが部品の一つとして機体に組み込まれたかのような感覚に陥る。だが、不快ではない。むしろ安あん堵どにも似た一体感がある。

　改めて、自分とブリッツフォーゲルは一いち蓮れん托たく生しょうなのだとカールは痛感した。操縦桿かんとペダルを操作し、その手応えを確かめる。機外のアルベルトは、カールの操作に応じてエルロンとラ

ダーが機敏に稼働するのを見届け、親指を立てる。

　操そう舵だ系に異状なし。油圧計、燃料系、電気系統のコンディションも計器で確認――異状なし。離陸を前にして機体は最善の状態にある。

「良し……頼む」

　カールに促されたアルベルトが、神妙な面おも持もちでコックピットに風防キャノピーを被せ、ボルトを締める。これでもう搭乗者が自力で機外に出る手段はなくなった。もとより不時着した機体から脱出する、などという局面は想定されていない。この実験機の安全性はただ一人のテストパイロットにのみ責任を負うものであり、カールが自ら不要と判断した装置は、一ポンドでも機体を軽くするために排除されている。離陸し、着陸できること。突き詰めればカールが要求するところはそれだけだ。

　主電源オン。コンプレッサー始動。外部電源の助けを借りたモーターが圧縮セクションのタービンを回転させ、吸気口から吸い込んだ外気をチャンバー内に押し込める。

　点火プラグ、オン。圧あっ搾さくされた空気の中に高圧電流の火花がひっそりと花開く。あとは燃料弁を開くだけで、ブリッツフォーゲルは第一の岐路に立たされることになる。――世界初のジェット機として産うぶ声ごえを張り上げるか、或あるいは爆発して霞かすみと消えるか、だ。

　燃料バルブの開放スイッチに触れながら、カールは自らを省かえりみた。胸の内は静かに澄んで、だが冷えてもいなければ乾いてもいない。

　空軍時代の、出撃前に感じた死神の気配はここにはない。そのことがカールに、試験機の初飛行というプレッシャーを忘れさせるほどの安あん堵どをもたらした。

　そう、今日は殺し殺されるために飛ぶのではない。座席に相乗りする死神はいない。ただ運命を胴元に、己自身の生命を賭とすだけのこと。

「さあ……征ゆこうか、相棒」

独言の囁ささやきに晴れやかなものさえ込めながら、カールは燃料バルブを開放する。

チャンバー内に解き放たれた燃料は瞬時に圧搾空気と混交されつつ発火し、一〇〇〇度の陽かげ炎ろうとなって後部ノズルから迸ほとばしる。プロペラ機の始動とは比較にならないその轟ごう音おんに、待避壕ごうの記者たちはさぞや肝を潰しただろう。だが驚くのはまだこれからだ。

着陸脚のブレーキを解除し、タキシングで機首を滑走路へと向ける。一直線に伸びる滑走路は、空の彼かな方たへと突きつけられた剣のようだ。その切っ先を見据えて、カールはスロットルレバーを握った左手を、ゆっくりと前に倒し込む。

出力全開。吸気口から排気口までの入り組んだ金属の隘あい路ろを強引に押し通る、推力一〇〇〇フィートポンドの烈風は、金切り声のような高音で聞く者すべてを慄りっ然ぜんとさせた。龍の咆ほう吼こう——誰もがそう連想した。

轟然と、だが地を蹴ける猛もう禽きんの滑らかさで、ブリッツフォーゲルは滑走路を馳はせる。翼に切り裂かれた大気が逆巻く気流となって、重量七トン余りの鉄塊を大地の引力から引き剥はがしにかかる。

ヘレンとエリックは、人目を忍んで格納庫の裏手からブリッツフォーゲルの始動を見守っていた。エリックの連れていたジークを外来の記者たちの目に触れさせないための配慮だったが、その幼龍が、いまジェットエンジンの轟音に触発されて吼ほえ猛たけっていた。機械装置の駆動音でありながら、それはジークを、まるで同族の雄お叫たけびを聞いたかのように興奮させていた。

だがヘレンもエリックも、暴れるジークを諫いさめたりはしなかった。どのみち記者たちはブリッツフォーゲルの姿に目を奪われてジークの吼え声など気にも留めていない。そして何より姉弟もまた、離陸に挑むカールの機体を全霊で凝視していた。

ヘレンは祈りを。ヴァイニンガー博士は確信を。ゲプハルト中佐は

期待を。各々がそれぞれの想いを込めて、滑走路を駆け抜けるブリッツフォーゲルの尾翼を見送る。
　ただ一人、コックピットに座るカールだけが無心であった。轟くエンジンの振動に身を任せたまま、静かな心で、操縦桿かんに最初の手応えが来るのを待ち受ける。翼が揚力を掴つかみ、自らの重みのすべてが昇しょう降こう舵だに託される、馴な染じみ深い開放の瞬間を。
　まず機体の前輪が浮き上がり、機首が緩やかな仰角を得た。次いで後輪が、そっと大地を押しのけるようにして滑走路から決別する。後はただ離れていくのみだった。いっさいの支点を捨てて、ブリッツフォーゲルは空にいた。ただ一インチの浮上であろうと空は空だ。次の瞬間には一フィート、さらにその次には数ヤード、ブリッツフォーゲルは新たなる世界へと斬り込んでいった。その翼が挑むべき場所、その存在理由が還るべき場所へと。
　歓声が上がった。開発者たちも、記者たちも、ただ衝動のままに喝かっ采さいを放った。みなその瞬間だけは自らの立場を忘れ、内なる魂が挑戦者を讃たたえる声に身を委ゆだねた。
「……凄ぇよ。カール。本当に龍みたいだよ」
　呟つぶやくエリックの眼まな差ざしは、感動のあまり濡ぬれていた。一方でヘレンは、安あん堵どの気持ちに目を潤ませていた。彼ならば、大丈夫——そう固く信じる気持ちが心を支えていた。飛べたなら、もう大丈夫だと。あの男は空に在る限り、誰よりも万能であり自在なのだと。
　その思いは、ゲプハルトもまた同じであった。彼は今ここにいる誰よりもカール・シュニッツの天分について心得ている男だった。隣に控える副官が、遠ざかる白銀の機体を呆ほうけたように見送る間にも、ゲプハルトの面おも持もちは、既に怜れい悧りな軍人のそれへと戻っていた。
「……あの飛行機で、我々は戦争に勝つんでしょうか？」
　ぼんやりと問いかける部下に対し、応じる口元には不敵な笑みさえあった。

「どうだかな。だが脅しとしては充分だ」

　高度計は順調に目盛りを上げていく。その一方で作動油圧計、燃料流量計、排気ガス温度計が安定しているのを確認し、ようやくカールは風防キャノピーの外へと注意を向けた。
　いつの日も変わらぬ青空が、今日もまた我が家のようにカールを迎え入れ、包み込んでいた。空を飛ぶ昂こう揚ようには、なぜかそれと相反するはずの安あん堵どが伴った。生まれ故郷である大地と切り離された孤独感に、彼はいつでも清すが々すがしい心地良ささえ覚えるのだ。
　否、独りではない——カールは万感の想いを込めて、まだ真新しい操縦桿かんに指を這わせる。
〝こうやって、俺をどこへ連れて行ってくれるんだ？　お前は〟
　コンソールに居並ぶ無数の計器は、ただ淡々と、機体の状況と周囲の環境について詳細に表示している。そのすべてがブリッツフォーゲルの表情であり、無言の声だった。それらを読み取り、操作で応える。そうやって彼は機体と語らいつつ、未だ誰も至らぬ領域へと挑むのだ。
〝どこまで行くんだろうな、俺たちは……〟

　普段ならばヴァイニンガー博士は、飛行場の通信室から機上のカールに諸もろ々もろの指示を与えているところだが、今日に限っては記者たちへの接待も同時に務めなければならなかった。そのため普段は通信室に詰めているクルツが、コンソール一式を待避壕ごうへと運び込み、仮設の司令所を拵こしらえていた。
「……ケルナー基地より入電。ブリッツフォーゲルの機影をレーダーに確認したそうです。祝電が届いています」
「うむ」
　静かに頷うなずくヴァイニンガー博士ではあったが、それでも満足の表情は充分に窺うかがえる。
　ブリッツフォーゲルの離陸より一五分。同様の観測報告は、官民問

わず各地のレーダー施設から送られてきている。てっきり基地上空でのデモンストレーション飛行があるものとばかり思っていた記者たちは、飛び去ったきり一向に戻ってこないブリッツフォーゲルにやや落胆気味であったが、続々と送られてくる通信は、機体が墜落することなく順調に各地を巡回していることを物語っていた。

　初飛行においては異例の長距離フライトだったが、その真意を正しく理解し、内心で臍ほぞを噛かんでいたのは、ただ独りゲプハルトのみだった。ヴァイニンガー博士と申し合わせたカールは、あくまで機体を可能な限り衆目に晒さらそうとしているのだ。ブリッツフォーゲルの存在のみならず、ここヤーデ山麓における博士の研究そのものを公然のものとすることで、軍部の介入を牽けん制せいしようというのだろう。

　既にブリッツフォーゲルが巡った距離は一〇〇マイルに届こうとしている。さすがに実験機としての分ぶを弁わきまえ、民家の上を飛ぶような真似はしなかったが、それでも人口密集地の外縁を掠かすめる経路を飛ぶときは、可能な限り速度を落として低空を飛んでいた。聞いたこともない怪音を発するプロペラのない飛行機の姿は、空を見上げた幾人もの目にはっきりと焼き付いたことだろう。

　カメラマンたちは既に待避壕ごうを出て、いずれ帰還するであろうブリッツフォーゲルの着陸の瞬間をフィルムに収めようと待ち構えている。が、一向に明かされないフライトスケジュールのせいで、記者たちの間では、離陸時の興奮と熱気も次第に萎しぼみつつあった。

　だがそのとき、無線機に貼り付いていたクルツが、やおら緊迫した声を張り上げた。

「ちょ……博士、ケルナーより続報！　ブリッツフォーゲルに接近する飛行物体を確認、北西の方角だそうです」

「なんだと？」

　クルツの声にただならぬ気配を察して、祝待避壕の中が不穏なざわめきに包まれる。

「機体の識別は⁉」

博士の問いに、クルツは肩を戦慄わななかせつつかぶりを振る。
「いや、このスピードは……こいつは航空機じゃありません」

6

五〇マイル程も飛んだ頃には、カールはブリッツフォーゲルの飛行特性をほぼ完璧に把握していた。

設計段階で予測されていたものと、概おおむね差異はない。速度を追求する対価としてぎりぎりまで翼を縮小したために、乗りこなすのは相当厄介なじゃじゃ馬になっている。

有人航空機としての限界速度を追求することを目的としたブリッツフォーゲル開発計画において、機体設計上の最大の障壁となったのはもちろん空気抵抗なわけだが、飛行機には空気抵抗を糧かてとして機能する装置もある。それが主翼だ。翼の上面と下面に気圧差を発生させることで機体は浮き上がる。つまり理屈の上では、主翼前縁で切り裂かれる空気の量が多ければ多いほど、機体が得る揚力は増し、そして速度には枷かせがかかる。

極論を言うならば、翼など取り外してエンジンだけを飛ばしてしまえば一番速い――が、それは単なる砲弾と一緒で飛行機ではない。操そう舵だが利き、離着陸が可能となってこそ初めて航空機と呼ぶに値する。そして操縦のために支払われる通貨とも言うべきものが揚力だ。パイロットに操縦桿かんを握らせる意味を持たせるならば、どうにかして揚力を稼ぐしかなく、結果、主翼と空気抵抗のジレンマに向き合うしかなくなる。

ブリッツフォーゲルには、小さな翼で最大限の揚力を獲得できるよう、技術の粋すいが集められている。空気抵抗を緩和する後退翼を採用し、さらには円筒形の胴体という既成概念を捨てて、主翼と胴体の境界面を三次曲線で融合させ、翼だけでなく機体全体で揚力を発生させるという発想も、きわめて革新的なものだ。だがそれでもなおブリッツフォーゲルの翼面荷重は１００lbs／ft^2を上回る――というの

が、図面を引いたアルベルトの見立てであった。これは翼が一平方フィートにつき支えなければならない機体重量の値で、大きければ大きいほど鈍重で運動性に欠ける操作感となる。レーサーレシプロ機のエトピリカですらこの値は41lbs / ft^{2}程度だったのだから、ブリッツフォーゲルの扱いづらさは自ずと知れようというものだ。

実際に飛ばしてみた感覚としては、速度一七〇ノットを切った辺りから、失速の前兆である微振動バフェットを感じはじめた。失速速度の見当は一六〇ノット程度と見積もっておくべきだろう。うんざりさせられる速さだが、それを下回れば機体の揚力は重量に負け、コントロールを失って墜落する羽目になる。着陸時の手強さを予想しただけで、今からカールは苦笑いを浮かべてしまう。

そのとき、コックピット内に無線のコール音が響き渡った。

「どうした、クルツ？」

『カール……たった今ケルナーから警告が届いた。そっちに高速で向かっているレーダー反応を確認したそうだ』

来たか……期待通りの展開に、思わずカールはほくそ笑む。ブリッツフォーゲルのエンジン音は龍たちにとっても未知のものだろう。注目されるのは当然だ。

「方角と速度は？」

『北東から、およそ四〇〇ノット弱……サイズからして虹龍グレンツドラッヘだろうって話だが……なぁ、カール？』

「解ってるよ。今日のところは喧けん嘩かは見送れ、っていうんだろ？」

不信感を隠そうともしないクルツの声音に、思わずカールは苦笑した。離陸前からさんざん言い含められてきたことだが、どうやらヴァイニンガー飛行場の面々は、誰一人としてカールの自制心を信用していないらしい。――日頃の素行に鑑かんがみれば当然のことである。

「そろそろノルマだった飛行距離も消化する。帰投したいんだが、構わないかな？」

『了解した。帰りの経路は？』

「一直線だ。到着予定は……一〇五一時」
　計器板の時計を確認した上で、カールはさらりとそう宣言する。現時刻の五分後だ。
『了解。一〇五一……って。おいちょっと待て、カール！』
　その意味するところを察したクルツが食ってかかるより先に、カールは無線を切り、ブリッツフォーゲルの機首をヴァイニンガー基地の方角――西へと旋転させつつ、スロットルを開いて急上昇に移る。
　現在地から基地までの直線距離は約五〇マイル。これを五分で跳び越えるとなれば、虹龍グレンツドラッヘの速度記録である四八〇ノットを凌りょう駕がする必要がある。
　カールとて、本気で雌し雄ゆうを決する勝負は先送りにするつもりでいた。まだブリッツフォーゲルは本調子ではないのだし、燃料の残量も充分ではない。今日のところは仲間の忠告に従い、大人しく帰還する。ただしどう帰るかはパイロットに一任してもらう。
　もとよりこのブリッツフォーゲルと共に飛ぶ以上、空において龍に道を譲る気は毛頭ない。たかだか五〇マイルで虹龍グレンツドラッヘがギブアップするとは思えないし、ヴァイニンガー飛行場に着陸すれば、龍はそれを試合放棄とみなして勝ち誇ったまま飛び去るだろう。それはいい。ただしその五〇マイルだけは意地を貫かせてもらう。虹龍グレンツドラッヘがどれだけ全力で追って来ようと、断じて追い抜かせはしない。
　雲海を突き抜け、さらに上昇。一気に高度三六〇〇〇フィートの高みを目指す。トロポポーズと呼ばれるそこは、対流圏と成層圏の境界面だ。ジェットエンジンを機能させるのに充分な濃度の酸素が得られる範囲で、気圧が最低に――つまり空気抵抗がもっとも軽減される高度である。ブリッツフォーゲルにとって、最善の条件で勝負を運べる高度がそこだった。
「……間に合ったか」
　上昇しながらも油断なく四時半方向を見張っていたカールは、ついに迫り来る黒点を視認した。まだ燐りん光こうこそ発していないが、間

違いなく報告にあった虹龍グレンツドラッヘだ。ブリッツフォーゲルを追跡して同じ高度を目指している。レース開始を前にして相手を自分の土俵に上がらせることができた。まずは幸先のいいスタートだ。

「さあ、見せてやろうぜ……今日の『ニンゲン』は一味違うってな！」

　興奮のままに愛機に向けて語りかけながら、カールはスロットルを限界まで倒し込む。離陸時にのみ使ったきりの最大出力を、今ついに天空にて解き放つ。

　タービンの金切り声とともに、猛烈なＧが全身を圧あっ搾さくする。その重さに呻うめきながらも、後方監視鏡で背後を確認すれば、龍の影はじわじわと縮み、霞かすんでいく。まさか引き離されるとは予想していなかったであろう龍の狼ろう狽ばいぶりを想像し、カールは口元を笑みに歪ゆがめる。

　だが背後の龍影は消えるより先に、ゆらめく光点へと姿を変えた。原理不明の超速飛行を可能とする光の翼だ。どうやら相手もニンゲンの機械仕掛けを侮ることなく、本気を出す気になったらしい。

「そうこなくっちゃな……」

　速度計を確認。針は四〇〇ノットの表示をとうに超え、なおも澱よどみなくじりじりと上昇していく。エトピリカですら有り得なかった驚異の加速性能だ。生まれたばかりのジェットエンジンの真価を、今ついにカールは目まの当たりにしていた。

　追ってくる虹龍グレンツドラッヘの光は、ある程度まで大きく迫ったものの、途中から明らかに追い上げのペースを落としている。向こうも限界速度は近いのだろう。

　いける――あの虹龍グレンツドラッヘと競り合える。

　獰どう猛もうな歓喜がカールの胸に湧き上がる。速度計は四六〇を超えて、依然上昇。回転計と燃料流量計にも異状なし。

　遭遇より既に二分が経過した。往路とは比較にならないペースで燃料が減少していくが、あと三〇マイル先の飛行場までなら、ぎりぎり足りる残量がある。むしろ警戒すべきは機体のコンディションだ。今

初めてブリッツフォーゲルは極冷温の対流と、エンジン最大出力の連続稼働に挑んでいる。まだ開発チームが太鼓判を押す前の領域にカールは踏み込んでいるのだ。どんな些さ細さいな異状であろうと、見落とせば次の瞬間には致命的状況を招きかねない。

　速度、四八〇ノット。ついに虹龍グレンツドラッヘの接近が止まった。どうやら過去の計測記録に間違いはなかったらしい。ここが虹龍グレンツドラッヘの限界速度なのだ。

　ブリッツはブリッツで、機体が妙な揺れを起こし始めていた。どちらかというと機内から生じた振動というより、機外から揺すられている感覚である。有り得ないことではあるが、失速直前に翼上面の気流が乱れるバフェットに近い印象だった。おそらくは未だ実例のない高速飛行で、空気抵抗になんらかの問題が生じているのではないか。

　カールは首を巡らせて、風防キャノピーの外の主翼、尾翼の状態を観察し、今すぐ機体が損壊する、という状態ではないことを確認した。謎の振動はまだ操縦に支障をきたす程でもなく、現状のままなら無視しても良さそうだ。それさえ除けば、速度計の針は緩慢になりつつも、さらにまだその先を目指して震えている。ブリッツの潜在力なら、まだ行けるのだ。虹龍グレンツドラッヘの速度を超えたその先に。

　これで俊足の証あかしは立てた。あとは持久力の問題だ。虹龍グレンツドラッヘのスタミナなど確かめた人間は一人もいない。その限界を超えてなお保つだけの強度を、ブリッツのエンジンと機体は備えているのか。そもそも燃料の積載量は足りるのか。今日のところは、そこまで確かめることは叶かなわないが——

　不意に、速度計の針がぐらりと揺れて逆走を始める。

　どん、と小さく背中を押される感触。機体の加速が落ち込んでいる。もちろんカールがスロットルを緩めたわけではない。

　異常事態——そう察した時点で、カールは即座に反応した。操縦桿かんを振ってエルロンを繰り、一気に機体を一八〇度までバンクさせ天地を逆転させる。

　回転計を確認。速度計よりも明らかな異常数値。タービンの回転数

が見る見るうちに落ちていく。再度スロットルを操作するが、変化なし。もはやエンジンの故障は明白だった。

　ためらうことなくスロットルを手前に引き戻し、燃料を遮断。何事であれ問題を抱えたエンジンを稼働させるわけにはいかない。推力停止に伴ってブリッツフォーゲルの速度は危険なほど一気に低下する。が、それを覚悟して既にカールは機体を背面降下させる態勢に入っていた。操縦桿を引いて機首を頭上方向――即ち大地へと向ける。突き刺さるような急降下でブリッツフォーゲルは対流圏へと舞い降りていく。

　遠ざかる上空を、勝ち誇ったかのように悠々と飛び去っていく虹龍グレンツドラッヘの姿に、カールは二重の意味で舌打ちした。追い抜かせないという意地を通せなかった無念がひとつ。もうひとつは、ブリッツフォーゲルを傷物にしてしまった自分の不ふ甲が斐いなさだ。

　往々にして推力の喪失は失速と同義であり、即ちそれは墜落を意味する。だがカールのしたたかさは、機体がまだ速度を保っているうちから急降下へと機動を切り替え、揚力を生み出せるだけの速度を堅持したところにあった。

　位置エネルギーは運動エネルギーに変換できる。即ち、航空機はエンジンに頼るだけでなく、降下することでもスピードを上げられる。あらかじめ充分な高度さえ確保しておけば、それを小出しに消費することで推力を得ることができるのだ。つまりはグライダーの要領である。

　カールは速度計を慎重に見計らい、ブリッツフォーゲルの失速速度と見積もった一六〇ノットのぎりぎり上を維持しつつ、そっと機首を水平に近づけていった。エンジンを止めた機体は凧たこも同然、物理法則の奴隷である。だが慌てふためいたところでどうなるものでもない。幸い、ヴァイニンガー飛行場はもう目と鼻の先だった。現状の高度なら、降下のペースを守って慎重に滑空していけば、帰還には問題ない。ただの一つもミスが許されないというプレッシャーさえ度外視すれば、悲観するような状況ではなかった。

　おそらくはレーダー基地からの中継で、ブリッツフォーゲルの急減速、急降下はヴァイニンガー飛行場にも伝わっていたのだろう。無線機のコールサインがけたたましく鳴り響いていた。応答できるだけの余裕を得たところで、ようやくカールはスイッチを入れる。

『カール！　おいカール！　無事だったら返事を……』

「……ああ、問題ない。虹龍グレンツドラッヘには抜かれちまったがな……」

『馬鹿野郎！　無茶するなとあれほど――』

「すまん。謝りついでに報告しとくが、エンジンにトラブル発生だ。現在は推力ゼロで滑空飛行中」

『おい……』

　通信機の前でクルツが色を失うのが声音だけで解った。が、カールは相手をいなそうと努めて気楽な声を出す。

「大丈夫。着陸は任せとけ。もう滑走路も視認できてる。フワリと上品に決めてやるさ」

『……了解した。こっちも準備を整えておく。どうか幸運を』

「あー、消火器とか救護班とか、そういう仰々しいのはやめとけよ。ゲストもいるんだろ？　できればエンジンの故障はバレないように誤魔化したい。博士の面メン子ツもあるからな」

『あのな……本当に大丈夫なのか？』

「外装に異状はないし、どっかが火ィ吹いてるわけでもないんだ。問題ないさ。あとは拍手で出迎えてくれりゃいい」

『お前という奴は……解った。念のため博士とエンジニアチームの連中にだけ伝えておく。くれぐれも慎重にな』

「了解」

　通信を終え、カールは吐息とともに狭いコックピットを見渡した。勇ましいエンジンの振動が消えたそこは、まるで眠りに就いたかのように静かな場所だった。

「……どうだった？　初めての空は」

　忠実に役目を果たした計器の一つ一つに目をやりながら、カールは

静かに語りかけた。
　今日のお前は、よく頑張った。さぞ怖こわかっただろう。不安だっただろう。でも、ここは居心地のいい場所だと思わないか？　お前はこの空を飛ぶために生まれてきたんだ……
　語りかけるカールに対し、ゼロを指したまま微動だにしない回転計と燃料流量計は、無言の抗議で操縦者を責めているかのようだった。
「……無茶させて、済まなかったな。次はもう少し上ぅ手まくやるよ」
　だからお前も、強くなれ。もっと速く逞たくましくなれ。下に降りたら、お前の生みの親たちが、きっと新しい力を与えてくれる。お前の弱さを補ってくれる。
　だから最後の一手間は、どうか大人しく俺に従ってくれ。駄々をこねたりしないでくれ。着陸なんて、龍に比べればなんてことない。こちとら慣れたものだ。お前は安心して、ただ俺の操縦桿かんの通りにラダーを動かしてくれればいい。
　カールは、泣き疲れて微睡まどろむ子供をあやすように優しく操縦桿かんを握りながら、眼下の滑走路へゆっくりと舞い降りていった。

7

　東の空から颯さっ爽そうと舞い戻り、優雅に滑走路へと降り立ったブリッツフォーゲルを、記者たちは歓声で出迎えた。カメラマン以外の全員が停止した機体の側へと詰めかけ、テストパイロットへのインタビューを切望したが、開発スタッフたちは風防キャノピーを開ける暇いとますら惜しんで機体を牽けん引いん車に繋つなぎ、さっさと格納庫へと運び込んでしまった。
　興奮の余り勢いに乗って格納庫内にまで踏み込もうとした数人の記者と、憲兵隊との押し問答が始まり、格納庫付近はやや騒乱の様相を呈し始める。その一方で、ゲスト全員が出払った待避壕ごうには、ヴァイニンガー博士とゲプハルト中佐だけが取り残されていた。この

二人が余人を交えず顔を突き合わせるのは、今日これが初めてだった。
「いかがですか？　一夜にして時の人になった感想は？」
「拍手とシャンパンが欲しければ歌手にでもなっとったわい」
　さっそく棘とげを含んだ皮肉を投げるゲプハルトに、博士もまたしれっと肩を竦すくめて応じる。
「それも良かったでしょうな。貴方あなたには興行師の才能もあったようですし」
「本当は名声なんぞ鬱うっ陶とうしいばかりだが、お前さん方から勲章なんぞ貰もらうよりは余程マシだと思ってのう」
　面つら当あての応酬で先に収まりがつかなくなったのは、結局のところ「してやられた」側のゲプハルトであった。
「……いったい誰の援助が今日まで貴方の研究を支えてきたか、考えたことはおありでしょうな」
「取り決め通りのギブ＆テイクは必ず守る。――ほれ、今日の時点での性能諸元と設計図をまとめておいた。持っていくがいい」
　博士は分厚いファイルに綴つづられた書類の束を、ぞんざいにゲプハルトに手渡した。
「君らが提案したテスト項目も、一通りは実施する。だがそれ以上の要求はお断りだ」
　手渡された書類の内容に、ゲプハルトはざっと目を通す。一目で判る記述の詳細さは、なるほどその道の職人の手並みであった。
　博士が軍部との契約において負った守秘義務は、厳密にはその開発報告書に記載された内容のみであり、ブリッツフォーゲルの開発そのものは、あくまで民間研究機関のものであって、軍の監督下にあるわけではない。
　だからといってなんの断りもなく公開実験などされたのでは、軍部としてもいい面の皮である。
「……結構です。ルールはルールだ。だがそれとは別に、お互いの誠意というものがあるでしょう」

「君の立場は心得とるが、我々にも信念というものがある。それが許せんのならすぐにも儂わしらをしょっぴいて、他の奴らを後あと釜がまに据えるといい」

　たしかに、たったいま提出された設計図を空軍の技研に託せば、少なくとも飛べることだけは実証されたジェット航空機の複製品を仕上げることはできるだろう。ゲプハルトの上官である将軍たちならそれで嬉き々きとして満足するはずだ。軍部の意向をことごとく無視するヴァイニンガー博士の態度に、上層部はとっくに業を煮やしている。反逆罪に問うて拘束しろとせっつかれたことも一度や二度ではない。

　だが、ゲプハルト個人の見解は違う。

「さっき、カールが言っていました。今日飛ばす機体が積んでいるエンジンは、あくまで『試作品』でしかない、と。――まだこの先があるのですね？」

「腰を据えて見守る気があるなら、遠からず見せてやれるじゃろうな」

　虚勢ではない揺るがぬ自信を込めて、ヴァイニンガー博士はそう請け合った。

　そう、この『展望』こそが、これまでゲプハルトがヴァイニンガー博士に対して譲歩を余儀なくされてきた要因のすべてであった。

　博士と彼が率いる開発陣が、まぎれもない天才の集団であることを、現場の人間であるゲプハルトは正しく理解していた。彼らほど斬新な着想と技術力を備えたチームは、おそらく向こう半世紀に渡って再び現れることはあるまい。

　現行のブリッツフォーゲルをさらに改良することは、おそらく軍の技術者には絶望的だ。それでも秘密兵器として秘匿したまま実用化できるなら、それもまたやむなしという思惑が、昨日までのゲプハルトにはあった。だが今日こうしてジェットエンジンの存在が公然のものとなってしまった以上は御破算だ。感情論を廃して冷静に判断すれば、現時点でヴァイニンガー博士をプロジェクトから排除するのは、メリットよりデメリットの方が大きい。

　返す返すも業ごう腹はらなのは、そういったゲプハルトの判断をすべて見越した上で、今日の公開実験が仕組まれたのであろうという点だ。
　この狸たぬき爺じじいめが――改めて胸の内でそう毒づきながらも、ゲプハルトは研究成果一式のファイルをブリーフケースの中に収める。
「私の権限の及ぶ限りで、軍上層部からの横よこ槍やりは食い止めておきます。成果は可能な限り急いでください。それと、もう二度と今回のような不意打ちはなしにしていただきたい」
「……あんたには心から感謝しとるんだが、そう言っても真に受けてはくれんだろうな」
　無頼で知られた老技術者は、茶目っ気と物寂しさの相あい反はんする複雑な表情で、しみじみと嘯うそぶいた。
「だからせめてもの返礼として、儂わしらは必ずやあんたの期待に応えてみせる。――いずれ最高の飛行機を、あんたの手元に届けるよ。中佐」
「その言葉さえ本当ならば、私はそれで充分です」
　ゲプハルトは苦笑しつつも、略式の敬礼で暇いとま乞ごいをし、待避壕ごうを出て行った。

　機体を降りてロッカールームへと戻ったカールは、ただ抜け殻がらのように脱力したきり、ベンチに座り込んでいた。どれほどの間そうしていたのか、もう彼自身にも解らなかった。
　身に着けた飛行服が、ひどく重い。脱ぐのすら億おっ劫くうなほどに。飛んでいる間はそんな感覚など懐いだきもしなかった。ブリッツフォーゲルの操縦席と、このロッカールームのベンチでは、まるで重力の働き方が違うかのようだ。
　誰かがドアを開け、室内に入ってきた。気配だけでそれがヘレンだと察しはついたが、カールは振り向いて確かめる気になれなかった。
　そんなカールの態度に気を悪くした風もなく、ヘレンは和やかな声を彼の背中にかける。

「なーに？　まだ着替えてなかったの？」
「……ああ」
「蒸れるんでしょ？　その服。汗くさくなる一方だよ」
「放っといてくれ」
　始末に負えない、と言わんばかりにヘレンが歎たん息そくし、それきり気まずい沈黙の間まが空く。だが言うべき言葉があることは、カールとて重々承知していた。
「……ごめんな。約束、破っちまった」
　重い身体を強引に膝ひざに乗せて、立ち上がる。振り向いて確かめたヘレンの眼まな差ざしは、カールを責めるものではなかった。だが詫わびる言葉は必要だった。
「よけいな無茶はしないって、お前にも言ってあったのに……俺、ブリッツを壊しちまったよ」
「……みんな、君のこと誉ほめてるよ。よく頑張ったって」
「……」
「アルベルトさんなんて、驚くの通り越して呆あきれてたよ。ただでさえ失速しやすい構造の翼でも、カールの手にかかればグライダーも同然なのかって。……みんな言ってる。カールがパイロットで良かったって。そうじゃなければブリッツは堕おちてただろうって」
　確かに、初飛行でエンジントラブルに見舞われながらも機体を墜落させず無事に着陸させたことは、傍はた目めには賞賛に値する離れ業わざであろう。
　だがそもそもエンジンを故障させたのはカール自身の責任だった。エンジニアたちの保証外の条件で、危険を省かえりみずに無理な駆動を強しいたのだ。
　帰還後、まず真っ先に機体から下ろされ分解されたエンジンは、タービンブレードの一部に亀裂が生じていた。それがもとで軸流ターボが機能不全に陥り、コンプレッサーの内圧が維持できなくなったのだ。カールが虹龍グレンツドラッヘとのレースに没頭するうちに、ブリッツフォーゲルのエンジン内部は耐久テストで確認されていた以上の高

温に達していたのだ。

「……俺が馬鹿をやらなけりゃ、エンジンだって無傷のまま持って帰れたんだ。みんな何の気兼ねもなく祝杯を挙げられた」

「そういうことじゃ、ないんだってば」

　呆あきれ半分の苦笑いを浮かべつつ、ヘレンはカールに歩み寄る。

「君が今日やったことの中で、一番のお手柄はなんだと思う？」

　カールは返答に窮きゅうした。だが答えを思いつくよりも先に、その頬ほおにヘレンの指が触れる。

「……？」

「それはね、生きて帰ってきたこと」

　不意打ちの口づけは、それでも充分に甘く、柔らかかった。

　ゆっくりと唇を離してから、ヘレンはカールの瞳を覗のぞき込む。そこに映る自分の姿を確かめるように。

「……これが、ご褒ほう美び」

「……」
　カールが呆あっ気けに取られている間に、ヘレンはひょいと身を離し、いつもの明るい笑顔に戻っていた。
「さっさとシャワー浴びて出てらっしゃい。クルツたちはもうシャンパン並べてるわよ」
　そう言い残し、彼女は何事もなかったかのように軽い足取りでロッカールームを出て行った。
　後に残されたカールは、唇の感触の余韻に暫しばし戸惑ってから、やがてようやくながら理解する。
　そういえば、そうだった——今日もまた生き存ながらえて、自分は大地に戻ってきたのだ。

　長い一日を終え、滑走路に夜の帳とばりが降りてもなお、ヴァイニンガー飛行場の格納庫には煌こう々こうと明かりが灯っていた。
　とはいえ、今夜に限って庫内に立ち込めるのは機械油の臭気ではなく、酒と料理の芳香である。
　無事に初飛行を終えたブリッツフォーゲルを祝っての宴会は、食堂ではなく、実機を囲って格納庫で開催する運びとなったのだ。ことこの飛行場で働く男たちに限って言えば、どんな豪勢な会場よりも盛り上がること間違いなしの粋いきな計らいと言えた。
　実際、酔漢たちの活気は街の酒場よりも盛んであったのは間違いない。——が、揃そろいも揃って生きっ粋すいの仕事馬鹿が、長きに渡る作業の成果を前にして語らう内容といえば、もう決まりきったも同然だ。酒と料理で華やいでこそいるものの、彼らの討論は実のところ普段と同じ、機体の改良点と課題の打開策を巡る喧けん々けん囂ごう々ごうであった。
　中でもエンジン担当のオットーは、相当にきこしめした赤ら顔で、なおも破損したタービンブレードを両手に抱え、まるで想い人の写真でも眺めるかのように矯ためつ眇すがめつしている。昼間の試験飛行の結果、最大の課題を与えられたのは彼だと言ってもいい。

　隣に腰掛けたヴァイニンガー博士も、ジョッキを片手に思案顔である。
「やはり、そいつの耐熱強度がネックかのう……」
「コンプレッサーからの空気をバイパスさせて冷却に使っても、結局はこのザマですからね……後は素材そのものの耐熱性を高めるしかないですわ。そうなるともう、冶ゃ金きん学の領域ですからねぇ……」
「そうさな……ちとギュンター工科大のツテを辿たどってみるかのう。あそこの学部長には貸しもあるしな」
「お願いします。工具の算段はこっちでつけますんで」
　どこもかしこも専門用語の応酬で、ついていけないエリックは疎外感に苛さいなまれているかといえばそんなこともなく、むしろ無礼講の空気にあやかって、普段なら絶対に乗せてもらえないブリッツフォーゲルのコックピットに入り込み、座席と操縦桿かんの感触に嬉き々きとしていた。クルツが付き添って各々の計器の説明や、離着陸のプロセスについてレクチャーするものの、当然ながらエリックには到底理解できる内容ではない。その難解さと煩はん雑ざつさ、操作に要求される集中力と熟練の程を思い知らされるほどに、少年がテストパイロットに対して抱く畏い敬けいの念は募っていく。
　また一方、機体担当のアルベルトは、カールを捕まえて黒板の前に陣取り、どうやら主翼の空力特性について再検討しているらしい。明らかにそうと断言できないのは、酔漢がチョークで描き殴っている概念図が、描いた当人以外にはまるで判読不能な代物だからだ。
「圏音速域ってのはな～、空気抵抗がとんでもなく増大してくんだ……四八〇ノットからの振動ってのは、多分それだ……」
　カールがアルベルトに絡まれているのは、虹龍グレンツドラッヘとのレースの大詰めで感じた不可解な振動について報告したのが原因だった。やはりカールの直感通り、あれは翼の空気抵抗に起因するものらしい。
「翼の上面の空気がな～、こ～、剥はがれて乱流になっちまうんだなぁ……そいつが尾翼に当たって、だな、グラグラと……くそ～、水

平尾翼の取り付け位置、あれでも甘いってかぁ……」
「なんとかならないもんか？」
「ん～、試してみたいアイディアはあるんだが……」
　アルベルトは危なっかしい手つきで、黒板の奇怪な図版にさらなる混こん沌とんを描き加えていく。
「翼の上にだな、垂直の仕切り板を、等間隔に二枚ぐらい——こう、立てるとだな……でもコレやると、前縁スラットを取っ払うことになっちまうからなぁ。まずいだろ、それ」
　翼の小さいブリッツフォーゲルにとって、危険極まりない低速時の安定性を、少しでも補うための工夫が、主翼前縁に取り付けられたスライド式のスラットだった。速度が一七〇ノット以下の状態では、自重で前方に展開して翼面積を拡張するが、一九〇ノットを超えると風圧に押されて後退し、高速飛行に適した位置に戻る仕組みになっている。
　しばし考えた末、カールはかぶりを振って断言した。
「構わない。低速飛行は俺が上ぅ手まいことこなせば済むことだ。それより肝心なときに機体を揺さぶられる方が厄介だ。——スラットは外しちまってくれ」
「……まぁ、確かに、お前なら乗りこなせちまうのかもしれないが……」
　酒臭い息を深々と吐いて、アルベルトは額を押さえる。
「なんだかもう、試作機のテストっていうより、パイロットの度胸試しみたいになってきたなぁ……なんなんだお前？　死ぬのが怖こわいとか思ったりしないのか？」
「慣れちまったよ。もう」
　さらりと応じるカールに対し、アルベルトはますます目を据わらせて絡みにかかる。
「お前さんは平気だとしてもなぁ、待たされてるヘレンは気が気じゃないんだぞ？　その辺、解ってんのか、ああ？」
　カールとヘレンの間柄は、べつだん秘密でもなんでもない。ひやか

し程度は毎度のことでもうなんとも思わないが、こういう形で揶ゃ揄ゅされるのは、カールとしても耳が痛かった。
「あいつだって……博士の孫なんだし……」
　テストパイロットが命懸けなのは承知の上だろう、と言いかけたものの、それではなんの回答にもなっていないと気付き、カールは途中で口を噤っぐむ。
「そ～だ。ヘレンはなぁ、博士の孫なんだよ。爺じぃさんが造った飛行機のせいで恋人が死んだとなったら、ヘレンは博士をどう思う？　博士はヘレンになんて言えばいいんだ？」
　酔った勢いの説教とはいえ、アルベルトの言葉はカールの肩に重くのしかかった。
「お前はなぁ、カール、絶対に、生きて帰ってこい。そう約束するんなら、明日の朝一番で前縁スラットは取っ払ってやる」
「……ああ、解った。約束するよ」
　そう請け合いつつ、カールが恋人の姿を求めて辺りを見渡すと、折しもヘレンは揚げたての仔牛カツシュニッツエルを山盛りにした大皿を抱えて格納庫に入ってくるところだった。メインディッシュの登場に皆が快かい哉さいを上げ、諸しょ処しょの話題がひとまず中断となったところで、ヴァイニンガー博士が咳せき払ばらいをして皆に傾聴を促す。
「なぁ諸君、今日までの道のりの長さに比べて、儂わしらのブリッツフォーゲルに残された時間はあまりに短い。テスト飛行の期間は三か月。それを過ぎたら機体は分解されるか博物館送りになるか、ともかく儂らの手を離れて軍のものになる」
　祝いの席ではあったものの、博士は敢ぁえて目を逸そらしようもない現実へと皆を立ち戻らせた。
　隣国ヴィルドバッハとの緊張関係に伴い、とめどない物価の高騰、さらに一部では物資の配給制すら噂ぅわさされているこの時期に、新型航空機の開発などという大事業が、ただの酔狂だけで行えるわけがない。ブリッツフォーゲルの開発は、軍部との提携がなければ立ち行かないのだ。

「だが、テスト飛行とその結果をフィードバックした改修作業は、すべて儂ら開発チームの管轄で行われる。この飛行場で過ごす三か月、ブリッツの翼は自由じゃ。どこを飛ぼうと、何に挑もうと構わない」

　そうだ、と皆が威勢良く相あい槌づちを打つ。或あるいはそれは捨て鉢とも言える覚悟であったかもしれない。最初から終わりを約束された期限付きの夢であったとしても、彼らはそこに技術者としての意地と、そして希望を託していた。

「……儂は小難しい演説は苦手じゃし、儂らのやろうとしていることにどういう意味があるのか、気の利いた言い回しで説明してやることもできん。それでもここにいる皆は、儂らのブリッツフォーゲルに、この世の何よりも速く……それこそ空の龍よりも速くあって欲しいと思ってくれとることだろう」

　博士は一旦言葉を切って、皆を見渡し、その眼まな差ざしの熱さを確かめた。

「その気持ちがある間だけでいいんじゃ……みんな。もうしばらくこの老人に手を貸してやってくれんだろうか？」

「「おおッ！」」

　返答の喚声は一丸であった。あらためてここに集う全員が、ひとつの目的、ひとつの想いを共有していることを再確認した瞬間だった。

「さあ、それでは乾杯じゃ。今日のブリッツフォーゲルの雄姿と、それを支えたカールの勇気、そして皆の研けん鑽さんに――」

　乾杯！　皆がジョッキを打ち鳴らし、そして一斉に中身を干す。

　一夜明ければ、今日までよりもなお切迫した日々が待っている。彼らの最終目標である「速度記録への挑戦」は、軍部から求められた実験成果をすべて提出するまでの間に達成しなければならない。

　彼らの挑戦が価値あるものと、はたして誰が思うだろうか。今の時代の飛行機に要求されるのは、燃費と機動性、そして爆弾積載量。そういった戦略的な『駒』としての性能だけだ。

　誰よりも速く空を飛ぶ――その意味を理解しうるのは、或あるいは同胞の人間たちではなく、大空に住まう龍たちだけかもしれない。

［第二章］

挑戦の翼

［第二章］　挑戦の翼

1

　二週間ぶりに高原を降りて市街地に繰り出したヘレンは、世情の変化を肌身で思い知らされた。
　道行く車の数が激減している。見かけるのはバスや流通業者のトラックばかりで、自家用車の姿はほぼない。有事に備えた備蓄を確保しておくために、政府が燃料の流通統制を始めたからだ。ここでいう「有事」とは、もはや誰に教わるまでもない。
　それでなくても安価なヴィルドバッハ産の小麦と砂糖が市場に出回るかどうかで、シルヴァーナ市民の食卓は激変する。隣国との関係が緊迫しはじめれば、真っ先にそうと感付くのは台所に立つ主婦だ。
　現に今ヘレンたちが休憩しているカフェテラスでも、ケーキや焼き菓子の値段は先々週の倍近くに跳ね上がっている。
　往来の人々の表情も、みな一様に硬かった。誰もが日々苛さいなまれる先行きの不安に疲れている。釣られて憂ゆう鬱うつになりそうな気分を、ヘレンは努めて押し留とどめた。今日は久々の「休暇」なのだ。せめてこんな日は笑顔でいたい。
　とりあえず愉快な見せ物で心を和ませようと思えば、すぐ目の前、テーブルの向かいに腰掛けたカールを眺めているだけで充分だったりする。
　実に、一か月ぶりの逢あい引きである。カールが普段のいかついフライトジャケットではなく、細身のツイード製ハンティングジャケットを箪たん笥すから引っ張り出したのも、これまた一か月ぶりのことだ。ただ一着しかない洒しゃ落れ着も相変わらず背中に馴な染じまぬらしく、しょっちゅう袖を引っ張ったり肩の位置を直したりと落ち着きがない。
　加えて、彼は錫すず製のコッフェルでなければ三度に一度は落として割るか溢こぼすかするというジンクスがあり、今も、手にしたコー

ヒーカップを口に運ぶのに、まるで爆弾の解体でもしているかのような切迫した真剣さで臨んでいる。
「落ち着かない？」
「ん？　ああ……」
　一口啜すすったコーヒーを用心しいしいテーブルに戻してから、カールは深く溜息をついた。
「なんだか…………街も変わったな」
　時折、食料や雑貨品の買い付けに人里へ降りるヘレンと違って、カールは余程のことがない限りヴァイニンガー飛行場を離れることはない。飛行機に乗れば何百マイルと飛び回るくせに、陸路となると途端に出不精になるのだ。
「誰もが日がな毎日、山奥にこもりっぱなしで暮らしてるわけじゃないのよ。君たちが飛行機のことばっかり工夫してる間に、町の人はその日その日の暮らし方を工夫してるんだから」
「ふぅん……」
　数件の買い物に付き合わせ、最新流行のシネマを観て、あとは市場をひやかしながら漫そぞろ歩いた程度の行程なのに、既にカールは見るからに憔しょう悴すいしきっている。身体の鍛え方においては常人など及びもつかないテストパイロットなのだから、疲労は肉体的なものでなく、むしろストレスによる気疲れであろう。
　とはいえ、それで機嫌を損ねるヘレンではない。カールの偏屈な気性など、誰よりも弁わきまえている彼女である。
「こういうのって、やっぱり億おっ劫くう？」
「う～ん……どうにも人が大勢いるところは、苦手でな……」
　ちなみにカールの感覚における『人が大勢の場所』とは、他人と擦れ違う頻ひん度どが五分に一度より多い状況を言う。
「駄目よ。少しは慣れないと。お爺じいちゃんもそうだけど、君たちは当たり前の暮らしってものを忘れすぎ」
　日がな一日、機械油にまみれてスパナと格闘するばかりの飛行場暮らしでは、ともすれば曜日や日付の感覚さえあやふやになる。テスト

フライト以降、憲兵隊の一部隊が警備のために駐留したり、しばしば報道関係者の取材班が訪れたりと、それなりに賑にぎやかになったヴァイニンガー飛行場だが、それでも浮世離れした閉鎖空間であることに違いはない。

「エリックだって、今から心配だわ。学校も行かずに、あんな変人ばっかりに囲まれて暮らして。悪い影響が出なきゃいいけど」

「そういうお前は、どうなんだ？」

「私は……」

　ふいにカールにそう問われ、ヘレンは返答の前に暫しばし思案した。

「……やっぱり、見てて楽しいし。好きだからね。何かを目指してる人たちって。あそこで手伝いをするのは楽しいよ」

　別に取り繕つくろった返事でもなく、本音である。四の五の言っても彼女はヴァイニンガーの血を引く孫娘であった。ごく普通の若い娘なら、あんな辺へん鄙ぴな陸の孤島で炊事洗濯に翻ほん弄ろうされる毎日など、三日と持たず逃げ出すであろう。

「でも、そればっかりでいいとは思わないわよ。ちゃんとたまには息抜きして、美お味いしいもの食べて、人心地つけなくちゃ」

「そんなもんか……」

　苦笑いで返事を濁すカールの面おも持もちには、どこか乾いた空々しさがあった。まるで普通の人の営みの中に幸福を見み出いだすことを、既に諦あきらめてしまっているかのような――

　そんな不穏な想いを、ヘレンは胸の内で否定した。そのような捉とらえ方は、彼女自身とカールの関係性すら否定するものだ。

　たしかに出会ったばかりの頃のカールは、まるで野良猫のように人間不信を抱えた厭えん世せい家かだった。だがそれも今では、少なくともヘレンやエリック、ヴァイニンガー博士とその仲間たちに対しては心を開いてくれるようになっている。

　テストパイロットになる以前の彼は世捨て人も同然の暮らしをしていたと聞く。そんなカールも、ブリッツフォーゲル計画を通じて、少

しずつ他者との絆きずなを取り戻せるようになってきた。焦ることではない。少しずつでいいから慣らしていけばいいのだ。そうすればいずれ彼も、身の回りの者たちだけでなく、この世界全体を受け入れてくれるようになるはずだ。
　もしその手伝いが自分に出来るならと思うと、ヘレンの胸は温かい感慨に満たされる。たしかにデートの相手としては粗そ忽こつで面白味のない男かもしれない。だがそんな彼だからこそ、ヘレンは隣にいてやりたいと思うのだった。
　コーヒーを飲み終え、席を立つ。ヘレンの中で、次のデートコースが決まった。
「そろそろ行こ。見せたいものがあるの」
「あ、ああ」
　カールは飲み残したコーヒーを干そうとして、結局、最後の一口を膝ひざに零こぼしてしまった。

　カールが連れて行かれたのは、庭園公園の一角にある自然博物館だった。
「ここは……」
「騒がしいところ、嫌なんでしょ？　ここなら充分に静かよ」
　予想外のチョイスに、狐につままれたような面おも持もちのカールの背を押して、ヘレンは二人ぶんのチケットを購入し、入場する。
　順路は無視して大方の展示物の前を素通りし、ヘレンはとある特設展示場へとカールを案内する。
　二階建ての吹き抜けホールを目一杯に使って聳そびえ立つ骨格標本。それがなんなのか見て取ったカールは息を呑んだ。
　直立体高四〇フィート弱、尻尾まで含めた全長は六五フィートに及ぶ嵐龍シュトゥルムドラッヘ。温厚ながらもその巨体をもって知られる弩ど級きゅう龍りゅうである。
「どう？　少しは興味あるでしょ？」
　満更でもないカールの反応に、ヘレンもまた上機嫌である。

「完全な状態で回収できた龍の遺い骸がいとしては、現存するのはこの一頭だけ――まぁここに飾ってあるのはレプリカで、本物は科学アカデミーに収蔵されてるんだけど」
　ホール中央の骨格標本をぐるりと巡り歩きながら、ヘレンはその他の壁際の展示物を見回す。
「ここの博物館、龍の展示については世界でもトップクラスなんだって」
　ガラスケースに収められているのは、牙や角、鱗うろこといった剥はく落らく物のサンプルや、化石化した糞ふん、撮影に成功した貴重な写真……数こそ多いが、中央の全身骨格に勝るインパクトがあるものは一つもない。
「でも言い換えるなら――ここにある展示品でトップクラスになれちゃうぐらい、龍の資料って乏しいのよね。こんな小さなホールで事足りる程度にしか、私たち、龍のこと解ってないんだわ」
「ああ、そうなるな……」
　カールにとっても、生きた嵐龍シュトゥルムドラッヘを遠目に眺めた体験はあっても、その骸むくろをこれほどの至近距離で見て、大きさを実感させられたのは初めての経験だった。
「彼らには知性があるんじゃないかって、本気で考えてる学者もいるんだって」
「知性？」
「龍と話したことがあるっていう人、けっこういるんだよ。神話でも、龍から知恵を授けられた英雄のエピソードって、たくさんあるじゃない」
　たしかにそういった伝承の類いなら、幼い頃の寝物語によく聞かされたものである。カールに限らず、誰しも記憶にあるだろう。
「お伽とぎ噺ばなしだろ、あくまで」
「民俗学って言うのよ最近は。ともかく、テレパシーだかなんだか知らないけど、龍が人間に何かのヴィジョンを見せることがあるっていうの。啓示ってやつ？」

「ふぅん……」
　カールの歎たん息そくには、驚きや呆あきれというよりも、さもありなん、という納得の気配が強かった。
「人間よりもでかくて、人間よりも知恵があるなら、いっそこいつらは本当に神様か何かなのかもしれないな」
「そう思う？」
「だとしても、おかしくない奴らだよ」
　カールはしみじみと頷うなずいた。
「つまり今の俺たちは、神様に喧けん嘩かを売ってる罰当たりってわけだな……」
　自じ嘲ちょうとふてぶてしさが相あい半なかばするカールの笑みに、なぜか自暴自棄な含みを感じ取り、ヘレンはわけもなく不安になった。
　もしその行いが天罰に値するものだとしても、きっとこの男は品行を改めるようなことはないのだろう。むしろその罰を求め欲して突き進むのではないか。窮きゅう屈くつなツイードのジャケットを着て人混みに紛れるよりも、いっそ望ましい末路だと思っているのではないか……
「……どうした？　ヘレン」
　気がつけば、視線でカールに問いかけていたらしい。怪け訝げんな顔で訊いてくるカールに、ヘレンはかぶりを振って「なんでもない」と答えた。
　彼は自殺志願者ではない。万が一そんな願望を抱いたとしても、そのときは決してヘレンが許さない。
　ヘレンは心に誓った。――この男が空の彼かな方たで孤高に果てようなどと思うなら、そのときは是が非でも、私が大地に繋つなぎ止めて見せる、と。

　博物館を出ると、外はとっぷりと日が暮れていた。
　既にヤーデ高原まで戻れる汽車はない。今夜はホテルに一泊し、明日の朝一番で帰路につく予定である。

　ディナーの予約時間にはまだ間があったので、二人は散策がてら夜の街を歩くことにした。
「あぁ、久々に文明人に戻れた気がするわ……」
　にこやかに言うヘレンに、カールは辟へき易えき顔である。
「あのな、お前は毎日、機械工学と航空力学の最先端の現場で寝起きしてるんだぞ？」
「あそこはね、飛行機っていう精霊を崇あがめる祭壇か何かよ。君たちはそこで毛皮被かぶって踊ってる原始人と同じ。解る？」
「……」
　おそらく彼女にしてみれば、シェフの料理とファッションのモード、そして最新のシネマが満喫できて初めて、文明人の条件が揃うのだろう。成る程、女の理屈だな……と言い返そうとして、カールは口を噤つぐんだ。そんな返答をすれば、さらに辛しん辣らつな理屈で言い負かされるのは目に見えていたからだ。
「――あれ？　何かしら」
　行く手の街路で、交通が滞とどこおっていた。何やら騒がしい剣けん呑のんな空気が漂っている。
　やがて、やや調子の狂ったアコーディオンが奏でるシルヴァーナ国歌の演奏が聞こえてくるに至って、騒ぎの元凶は明らかになった。
　賛戦派のデモ行進である。
『打倒、ヴィルドバッハ』『今こそミルヒ河で雌し雄ゆうを決すべし』『悪の公国に今度こそ鉄てっ槌ついを』……行列の参加者が手に手に掲げるプラカードには、怒りを込めたスローガンが窮きゅう屈くつに書き連ねられている。胸に勲章を並べた軍服を羽織り、手足や片かた眼めを失った痛々しい姿を晒さらす傷しょう痍い軍人の姿も散見された。誰もが三年前に戦火を交えた隣国への憎しみを衰えさせず、いやむしろ輪をかけて鬱うっ積せきさせ、見守る市民たちに訴えかけている。
　軍人嫌いのカールにとって、それが不快な光景であることは、ヘレンとて察するまでもなく解った。二人は申し合わせたように手近な路地を選んで大通りを外れ、ビラを配りながら近づいてくるデモの行列

をやり過ごした。
　だが裏路地は裏路地で、既に扇動家たちに蹂じゅう躙りんされた後らしく、壁という壁にびっしりとポスターが貼られている。愛国心を賛美し、日々の不都合を怒りに転化し、現状維持を屈辱と誹そしる、思いつく限りのレトリック。それらすべてから目を逸そらし、努めて早足で歩くカールの後ろに、ヘレンもまた気まずい思いでついていく。
　そんなカールが、ふと足を止めた。見るまいとしていながら、それでも視野に飛び込んできた一枚のポスターが、彼の身体を硬直させていた。その図版に、ヘレンもまた息を呑む。
　刷られていたのは、新旧の二枚の写真の組み合わせだった。どちらも濃淡の潰れた不鮮明な画質から、新聞記事の転載だと一目で判る。
　一方は目新しく、そして見慣れたものだった。ヴァイニンガー飛行場で公開されたブリッツフォーゲルの報道写真。つい先週に新聞の一面を賑にぎわせたばかりのものである。
　そしてもう一枚は、三年前の記事からの転載——戦火が続く日々の中、前線で戦う兵士たちの英雄的行動を讃たたえる翼賛報道のうち、とりわけ再三に渡って取り上げられた空軍の若きエースパイロットの肖像だ。
　撃墜数三五二機。その悪魔的な戦果ゆえに軍神と崇あがめられ、敵国からは死神と恐れられた一人の男。彼の背景に映る乗機の尾翼には、機体番号を表わす「六」のマーキングに、王冠を象かたどったエンブレムが添えられている。
　二枚の写真を並べた下には、勇ましいレタリングでこう綴つづられていた。

　——我らが希望の翼、その名はブリッツフォーゲル！　救国の英雄『王冠六号クローネゼクス』カール・シュニッツは再び空へ!!——

　本当の怒りとは、言葉も表情も奪うものなのだとヘレンは知った。現在の愛機に並べられた過去の自分の肖像を見据えるカールの面おも

持もちは、ただ底なしに虚うつろで冷淡だった。

　ブリッツフォーゲルの操縦者の素性については、厳重に秘ひ匿とくされているはずだった。少なくともヴァイニンガー飛行場のスタッフは、誰に訊かれようとも絶対に答えるなと全員が厳命されていた。一体どこから情報が漏れたのかと腹を立てる一方で、所しょ詮せん、隠し果おおせる事柄ではなかったのだという諦てい観かんもヘレンの中にはあった。

　噂うわさは憲兵隊の隊員から流れたのかもしれないし、誰かがゲプハルトの報告書を盗み見たのかもしれない。あるいは全く無関係な第三者が、たまたま戦中のエースの顔を覚えていて、それと同じ顔をした男がヴァイニンガー飛行場に出入りする様子を偶然見かけたというだけかもしれない。

　結局、秘密の保持のために払われた配慮など、知りたがる側の好奇心には到底及ばなかった——というだけのことなのだ。

　カールはまるで蚊か柱ばしらでも振り払うかのように無造作に手を伸ばし、ポスターを剥はぎ取ると、小さく丸めて足下へと投げ捨てた。

「……行こう」

「うん……」

　どんな言葉をかければいいのか解らないまま、ヘレンは足早に去るカールの後を追った。

2

　天空まで聳そびえ立つ積乱雲の絶壁——その外縁をなぞるようにして、ブリッツフォーゲルの白銀の翼が飛ぶ。

　実に一二日ぶりになる、二度目の試験飛行。初回のテストがことのほか充実していただけに、すべての検討課題をクリアするまでには相応の日数を要した。

　外見上の最大の差異は、主翼前縁スラットの廃止と、それに代わる境界層板の追加である。これによりブリッツフォーゲルは更に高速域

での飛行に特化した機体となり、そのぶん低速域での安定性が輪を掛けて危うくなった。失速速度が更に増した結果、離着陸に要する距離も長くなり、安全性を考慮に入れた推算の結果、急きゅう遽きょヴァイニンガー飛行場は滑走路の延長工事を強しいられる羽目になった程である。

一方でエンジンは、ほぼ完全なオーバーホールが施ほどこされた。最大の懸案だったタービンブレードは、結局、コバルト基合金からニッケル基合金へと材質が見直されている。耐熱温度の改善には繫つながらないものの、より粘性の高い金属を選んだことで耐久性そのものは向上したことになる。

また新たに、コンプレッサー内に水とエタノールの混合液を噴射するシステムも追加された。当初は冷却の補助が目的だったのだが、これが空気密度の増幅に繫がって結果的に推力の向上を手伝い、約３％もの性能改善をもたらしたのである。

一週間以上待ちわびた操縦席の感触に、カールは半ば有頂天だった。ただ一度、二〇分あまり乗っただけにも拘かかわらず、一旦味わってしまったジェットエンジンの手応えは、パイロットとしての彼を完全に虜とりこにしてしまっていたのだ。

再調整のために待たされた日々は、まさに生殺しであった。カールとて並の飛行機ならば整備点検ぐらいはこなせるが、ボルト一本の締め具合にすら専門知識が要求されるブリッツフォーゲルの改修作業には手伝える余地などある筈はずもなく、手持ち無ぶ沙さ汰たを紛らわすには滑走路の拡張工事に参加して汗を流す程度がせいぜいだった。

またこの一二日間には、プロジェクトの政略面でも大きな動きがあった。

軍部を出し抜いたヴァイニンガー博士とその一党が、今後さらなる酔狂を重ねるに当たって、いかにして上層部を納得させるか——苦慮に苦慮したゲプハルト中佐は、開発チームが本命としている龍との競争行為について、シルヴァーナ空軍の技術力を誇示するデモンストレーションとしての意味があるものと強引にねじ込んだのである。この説得が功を奏し、ブリッツフォーゲルは各方面のレーダー基地から、龍追跡のバックアップを受けられることになった。

今回も、さっそく虹龍グレンツドラッヘらしき反応を捉とらえたケルナー基地の管制官が、無線でカールを誘導してくれている。運任せの遭遇戦を待つロスタイムがなくなったぶん、ブリッツは積載燃料を充

分に残して龍との対決に臨むことができるのだ。
『あんたの意中のお相手は、いま東南東二〇マイルの辺りを通過中だ。サイズとスピードからして虹龍グレンツドラッヘなのは間違いないだろう』
　管制官のマイヤー中尉は、実験機で龍に喧けん嘩かを売るという稚気丸出しの行いに、さっそく乗り気になっていた。晴れて大義名分を得た上で乱痴気騒ぎに参加できることを、カール達より歓迎している節があった。
「なぁ中尉、この間のヤツと同じだと思うか？」
　カールとしては願わくば、前回に敗北を喫したのと同じ個体を相手に、リターンマッチを望みたいところである。誰しも負けっぱなしというのは精神衛生上よろしくない。
『可能性としては――かなり高いな。前回のコースとほぼ同じルートを巡回してる。こいつら、縄張りにはうるさい連中なんだろう？』
「ああ、そういうことなら、間違いない。――中尉、しっかり追跡してくれ。今日という今日は逃がさない」
『任せておきな』
　レーダーの誘導があるとはいえ、直線距離で向かおうと思えば、乱気流が吹き荒れる積乱雲の中を突っ切る羽目になる。やむをえずカールは雲を迂う回かいしながら目標に接近するルートを探すしかなかった。入り組んだ雲の隙すき間まを飛ぶのは、さながら峨が々がたる大渓谷の中を通過するかのようで、慎重な操そう舵だが要求された。

　カールとマイヤー中尉の遣り取りは、同周波数でヴァイニンガー飛行場の通信室にも届けられていた。
　通信担当のクルツの背後には、ヴァイニンガー博士と全開発スタッフのみならず、ヘレンとエリック、さらには視察に訪れていたゲプハルトまでが詰めかけている。
「前回の龍りゅうとの対決で、カールがエンジンを故障させていたというのは本当ですか？」

どうやら今日になってようやく事情を聞き及んだらしいゲプハルトが、有無を言わさぬ剣幕で博士に詰め寄る。先週の段階でそうと知っていれば、もちろん彼はカールたちの『遊戯』について庇かばい立だてをするような算段など講じなかっただろう。諸もろ々もろの折衝に骨を折ったことを早速後悔しているのが、ありありと表情から窺うかがえた。
「あれについては龍云うん々ぬんは関係ないわい。カールが未完成なエンジンで馬鹿をやらかした、というだけのことじゃ」
「では今度は大丈夫だと？」
「勿もち論ろん」
ゲプハルトの懐疑に、博士は自信満々で返答する。
「カール自身も、あれでジェットエンジンを取り扱う勘かん所どころを掴つかんだ筈はずじゃよ。まぁ任せておけばいい」

やがてついに、カールは隆々たる雲の畝うねの隙間に、目指す翼影を見み出いだした。
「……つかまえた」
呟つぶやきに闘志がこもり、武者震いが両肩に走る。
すると、まるでその思念を感知したかのように、黒点のようだった相手は輝きを帯び、彗すい星せいのように疾駆しはじめた。
『目標は加速を開始！　やっこさん気付いたぞ！』
レーダーの光点でのみ状況を見守るマイヤー中尉にも、その挙動の変化は歴然だったのだろう。
「いいぞ、そうこなくっちゃなぁ！」
カールもまたスロットルを全開放。ブリッツフォーゲルは高音域の咆ほう吼こうを轟かせて加速を開始する。
水噴射システムの効能か、パワーの落差は前回よりも明らかにブリッツフォーゲルに分があった。速度計の上昇と同じぐらいに歴然と、先行する虹龍グレンツドラッへの背中が視界に肉薄してくる。
速度四八〇ノットに到達。だが機体に以前のような振動は生じな

い。アルベルトの判断に内心で賛辞を送る。対する虹龍グレンツドラッヘはまだ最高速に至っていない。
　いける――勝利の予感に、操縦桿かんを握る手が強こわ張ばる。
　既にカールは、相手が前回の虹龍グレンツドラッヘと同一個体であることを殆ほとんど疑わずにいた。だが、それを確信に変えたのは、続く虹龍グレンツドラッヘの挙動であった。
　いきなり信じがたいほどの急角度で方向転換し、ほぼ真横へと軌道を変えたのだ。たまらずオーバーシュートしたブリッツフォーゲルは、虹龍グレンツドラッヘから距離を引き離される。後続は先行者と同じルートで追尾するのがルールなのだから、実質、ブリッツは相手に置き去りにされたも同然だった。
　驚きょう愕がくとともに、興奮がカールの総そう身みに滾たぎる。
　間違いなくこの虹龍グレンツドラッヘは、ブリッツフォーゲルを知っている。そしてただ一度競い合っただけで、こちらの特性を見抜き、有効戦略を講じていたのだ。――所しょ詮せんは加速だけが取り柄の力馬鹿、機動力で翻ほん弄ろうすれば手も足も出るまい、と。
　事実である。カールが慌てて急旋回し、再び機首を虹龍グレンツドラッヘへと向けるまでの間に、虹龍グレンツドラッヘはさらにリードを稼いでいる。しかも旋回による速度のロスで、勝負はほどんど振り出しに戻されたも同然だった。
　学者連中のご高説などすべて度外視した実感で、カールは今こそ確信した。――こいつらには知性がある。互いの得手不得手を見抜いて勝負に駆け引きを持ち込むだけの狡こう猾かっさを持ち合わせているのだ。
「……ははは ッ」
　してやられた悔しささえ忘れるほどの喜悦とともに、カールは再度、虹龍グレンツドラッヘの背中めがけて加速する。
　龍との速さ比べなど、要はキツネ狩りとどう違うわけでもない。野生動物を相手に挑む酔狂なゲームでしかない――誰もがそう思ってきただろう。だが違う。相手は意地と誇りの何たるかを心得ている、こ

ちらと対等の存在だったのだ。そして互いのすべてを賭としして、勝利の行方を競い合うべき好敵手なのだ。

　今までにも予感はあった。空を舞う龍の姿に、何か通じ合うものを感じてはいた。有り得なかろうと囁ささやく良識の声が、その直感を曇らせていた。

　だがもはや懐疑はない。カールは今こそ心に誓った。

　理由もいらない。成果もいらない。ただ龍の如く飛び、龍の如く競おう。

　ブリッツフォーゲル——ヒトの英知の粋すいたるこの翼は、あの龍を前にしても誇るに足るはずなのだから。

　カールの意気込みに応じるように、新生したタービンブレードは猛然とターボファンを疾駆させ、再び虹龍グレンツドラッヘを追い上げていく。だが猪ちょ突とつ猛進は禁物だ。先攻がフットワークで勝負を仕掛けてくるならば、こちらも即座に機動で応じる構えで臨まなければならない。

　案の定、虹龍グレンツドラッヘはブリッツを充分に背後まで惹ひきつけてから、再びあの急旋回を敢行した。その有り得ない機動性は、謎めいた推進原理に輪を掛けての驚異といえた。四五〇ノット以上という超高速にありながら、もはや物理法則の縛りすら無視しているかの如き挙動である。

　だがカールとて今度は不意打ちをくらったわけではない。即座にスロットルを絞り、最初よりはずっと小さい旋回半径で、新たな進行方向へと向き直る。今度も引き離されはしたが、仕切り直しというほどの落差は開いていない。

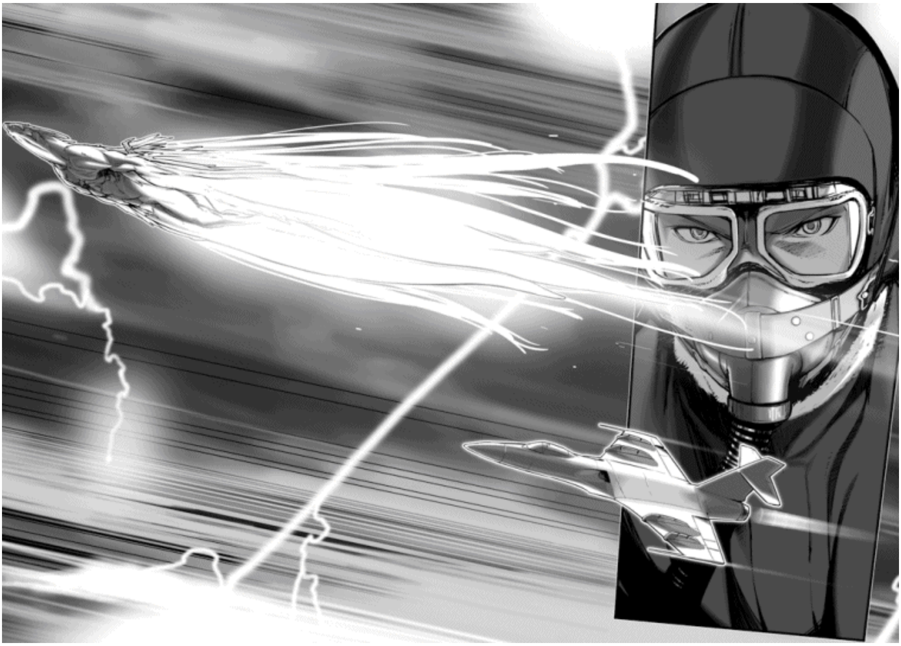
　遠く離れたケルナー基地では、レーダースクリーンの中で繰り広げられる驚きょう愕がくの光景を前にして、マイヤー中尉が言葉を失っていた。虹龍グレンツドラッヘの鋭角機動も驚異なら、蛇行しながら執しっ拗ように追い縋すがるブリッツフォーゲルの加速も驚きだった。二つの光点が演じる曲芸じみた舞踏に見入るうち、ふと気付けば、周囲にはさらに無数の反応が出現している。

『龍だ……他の龍が集まってきてる……』
　ヴァイニンガー飛行場の通信室では、マイヤー中尉の呟つぶやきを聞いたエリックが、かつてカールと共に観戦した虹龍グレンツドラッヘ二頭のデッドヒートを思い出していた。あのときと同じ光景が、今度はカールとブリッツフォーゲルを囲んで展開されているのだ。記憶の中の興奮に今この瞬間を重ねて、少年は汗ばんだ掌てのひらを握りしめる。
　一方でカールは、マイヤー中尉の声を聞き届けていたものの、周囲に注意を払う余裕など皆無だった。今はただ虹龍グレンツドラッヘの行く手を目で追い、追跡するだけに手一杯である。
　何度ぎりぎりまで追い上げても、その都度に旋回で引き離される。埒らちのあかない繰り返しのように思える展開だったが、カールの見立ては違った。虹龍グレンツドラッヘの急旋回は、あまりにも無理がありすぎる。もし仮にブリッツフォーゲルに同等の旋回が可能だとしても、そのときは急激な慣性の変動に耐えきれず、機内のカールは圧死してしまうだろう。
　いかに龍の体構造が頑強であろうとも、機械ではなく生体である以上、あんな無茶な機動を重ねていれば、間違いなく相当の消耗を強しいられるはずだ。勝負は既に持久戦――そうカールは見越していた。いずれ虹龍グレンツドラッヘは疲ひ弊へいして、旋回の頻ひん度どを維持できなくなるだろう。そのインターバルが付け入る隙すきになる。的確に機を見定めて最大加速で勝負をかければ……
　鍵かぎとなるのは燃料の残量だ。虹龍グレンツドラッヘの体力に限度があるように、ブリッツの燃料もまた刻々と減っていく。つまりはお互いにどれだけ消耗を抑えつつ、相手を翻ほん弄ろうできるかが争点になってくる。
「さあ……どうする？」
　もはやカールには、相手をただの獣と侮あなどる心はない。故ゆえに風防キャノピーの彼かな方たの輝く翼を見据える眼まな差ざしには、競きょう々きょうたる期待の色さえあった。

この程度の展開はお前もまた見抜いているはずだ。ならばどういう手を打ってくる？　次はどんな策で俺を驚かせてくれる？
果たして――次の瞬間に龍が選んだ行動は、完全にカールの想像を絶していた。
なんと進路を聳そびえ立つ積乱雲へと向け、怖おじることもなくその直ただ中なかへと突入していったのである。成層圏の果てまで巻き上がる対流性上昇気流と雷雲の坩る堝つぼへ、だ。
「やってくれるぜ……ッ」
その無謀、頑として敗北を拒む矜きょう恃じの在り方に、カールは心震わせた。誇りのためにこそ命をも賭とす――あの龍は獣ならざる知性のみならず、獣ならざる愚かしさまで持ち合わせているのだ。
そこまでの覚悟を見せつけられては、カールもまた賢さかしく臆おく病びょうなままではいられない。
『……おい？　なんのつもりだッ、やめろ馬鹿！』
レーダースクリーン上のブリッツの挙動――虹龍グレンツドラッヘの後を追い、まっしぐらに積乱雲へと突き進む進路を見て取ったマイヤー中尉が、無線機越しに怒声を上げる。雲の中の有様を思えば自殺行為に等しい暴挙なのだから当然だ。だがカールは怯ひるまなかった。その暴挙の果てにしか掴つかめない勝利があるのなら、ただ進むのみだ。
マイヤー中尉の怒鳴り声に肝を潰したのは、むしろ通信を聴いていたヴァイニンガー飛行場の面々だった。カールが何か途方もないことをしでかしていると即座に悟ったゲプハルト中尉が、クルツから奪い取ったマイクに向けて糾ただす。
「マイヤー中尉、何が起こっている!?　報告を！」
『奴は――ブリッツフォーゲルは積乱雲の中を突っ切っています！　ヴァイニンガー博士、どうにかしてください！』
これには流石さすがのヴァイニンガー博士も、しばし言葉を失った。
「カール……おいカール！　無茶も大概にせい！　死ぬ気か貴様！」
ブリッツフォーゲルの操縦席に、無線機からもたらされる皆の喧け

ん々けん囂ごう々ごうは、しかしカールの耳には届いていなかった。耳を傾けている場合ですらなかった。彼は大粒の雹ひょうが機体全体をガツガツと叩きのめす騒音に耐えながら、猛烈な乱気流に翻ほん弄ろうされる操縦桿かんを掴つかんでいるだけで必死だった。

　虹龍グレンツドラッヘが放つ翼の光は、水蒸気の層を隔てていても茫ぼう洋ようと見て取れる。だがその後を追い縋すがろうにも、雷鳴の閃光が閃ひらめくたびに目が眩くらみ、その都度改めて相手の位置を探し直さなければばならない。この期ごに及んで性しょう懲こりもなく虹龍グレンツドラッヘは旋回機動を繰り返し、ブリッツを引き離しにかかっている。いつ落雷に打たれるかという恐怖に耐えながら、ひたすら揺れる機体を制御し続けるために、カールは限界ぎりぎりの集中力を発揮しなければばならなかった。



　だがそれでも、相手もまた同じ条件だという認識が、闘志を萎なえさせることなく支えていた。むしろ虹龍グレンツドラッヘのほうこそ、こんな極限状況下に身を投じてまで勝機を探さねばならない程に追い詰められているのだ。
〝攻めているのは……俺の方だ！〟
　そう心に言い聞かせるだけで、カールは口元に獰どう猛もうな笑みすら刻むことができた。
　風防キャノピーの外を乱舞する稲光りは、ますます頻ひん度どを増していく。このままでは追いつき追い越すより先に、どちらか一方が落雷を喰くらって決着しかねない。もはやレースでもなんでもない運試しも同然の展開だが、それを厭いとって先に積乱雲から脱出すれば、それは度胸比べにおける敗北だ。
　ブリッツフォーゲルは金属の塊かたまりだから、コックピット内のカールは静電遮しゃ蔽へいに守られ、落雷で感電死することはない。だが外板は熱によるダメージを被こうむるし、それでエルロンでも吹き飛ばされれば一巻の終わりだ。或あるいは燃料が引火してしまえば、より速すみやかな末路を迎える羽目になる。
　はたして虹龍グレンツドラッヘの方はどうなのか。高速機動のＧにすら耐える超生物にとって、数百万ボルトの電撃は如い何かほどのダメージとなるのだろうか。願わくば致命傷であってくれるなと、カールは立場も弁わきまえずに祈願した。勝ちたいとは切実に思うが、そのために相手を死に追いやるのは本意ではない。自らを死の危険に晒さらしておきながら、それはなんとも矛盾した感慨だった。
　だが次の瞬間――雲の中から虹龍グレンツドラッヘの翼がもたらす燐りん光こうが、毒々しいほどに艶あでやかな炎の色に包まれた。
　図らずして、ついに運試しの賽さいは両者の運命を決した。先に鳴なる神かみの咎とがを受けたのは、先行する虹龍グレンツドラッヘの方だったのだ。
　虹龍グレンツドラッヘは墜落こそしなかったが、苦く悶もんも露あらわに身を捩よじり、飛行のフォームを乱れさせた。痛ましいとはいえ、情

けで見過ごすべき場面でもない。ここぞとばかりカールはスロットルを全開にし、容赦なくその背後へと詰め寄る。
　確実に『詰みチエックメイト』の距離まで肉薄されても、虹龍グレンツドラッヘは先刻までのような急旋回でブリッツを振り払おうとはしなかった。やはり雷の直撃をもろに喰らったことによって、もはや高Ｇ機動を繰り返すだけの余力は残されていないのだろう。だがそれでも、龍は速度を落とそうともしなかった。直線での加速に勝機はないと充分に承知していた筈はずなのに、大空の勇者は最後まで勝負を捨てることなく、虚むなしくも毅き然ぜんたる抵抗の姿勢で敗北の瞬間を迎え入れようとしていた。
　ありがとう——併走する虹龍グレンツドラッヘの姿を風防キャノピー越しに見つめながら、そうカールは胸の内で念じた。
　そんな手傷を負ってまで、あんたはこの戦いを尊んでくれたんだな。あんたのような龍に勝てたことを、俺は最高の誇りにするよ……
　まずブリッツフォーゲルが、その後から僅わずかに遅れて虹龍グレンツドラッヘが、積乱雲の中を突破して蒼そう穹きゅうの下へとまろび出た。眩まばゆいほどに明るく穏やかな空にカールは目を眇すがめ——そして、周囲の光景に呆ぼう然ぜんとなる。
　積乱雲の外には、おびただしい数の大小様々な龍たちが、群れを成してひしめき合っていた。いずれも方々の空から馳はせ参じ、危険な雲の中で展開された熾し烈れつな戦いが決するときを、ずっと待ち構えていたのだろう。
　後方監視鏡の中で、虹龍グレンツドラッヘが身にまとっていた光を消し、大きく翼を拡げて減速する。そのまま傷ついた龍は頭こうべを垂れてぐるりと前転し、自らの敗退を表明した。
　それを合図にしたかのように、周囲の龍たちが一斉に咆ほう吼こうを放つ。
　与圧されたブリッツの操縦席にさえ、振動となって伝わるほどに——まるで空そのものが感嘆にどよめいたかのような、それは壮烈に轟く大斉唱だった。ただ疾はやく馳はせることのみを讃たたえるモノ達

が、新たなる勝者を迎え入れ、新たなる栄光を歓喜する鬨ときの声。彼らにとっては、その翼が鋼はがねであれ、その心臓が機械仕掛けであれ、頓とん着ちゃくする理由ではないのだろう。それが空を舞う誇りに証あかしを立てるなら、彼らは等しく同じ同胞であった。
『……ブリッツフォーゲル、応答を。……なぁおい、無事なのか？』
　肝を潰したかのように呆ほうけた声で、無線機からマイヤー中尉が呼びかける。
「こちらブリッツフォーゲル。感度良好。――心配かけて悪かったな」
『ああ、いや……ともかく、おめでとう。物凄い勝負だった。……こちらが計測した最大速度は五〇〇ノットだ。他の基地のレーダーでも確認してる。正真正銘の公式記録だ』
　ヴァイニンガー飛行場でも、カールの無事と、ブリッツの速度記録を耳にした全員が、驚きと喝かっ采さいに沸き返った。その声に加わり損ねたのは、安あん堵どのあまり脱力の吐息を漏らしたヘレンとゲプハルトの二人だけだった。
　集まった龍たちに見送られながら、カールは仰角のままの機首を戻すことすら忘れて放心し、ゆるゆると高度を上げていく。目だけは習慣で計器類の表示を追い、異状がないことを確かめているものの、その行為に意識が追いついていかない。
　満足感とも、達成感とも違う、どこか空虚な感覚で、心は痺しびれきっていた。ついさっきまでの緊張感と昂こう揚ようが途切れてしまった途端、まるで自分自身の存在までもが意味をなくしたかのような、奇妙な喪失感があった。
　もっと飛びたい。いつまでも飛び続けていたい――痛切に、そう思った。ヒトとして生まれた自分も、機械として創られたブリッツも、空に居続けられるのは、地上で休息する時間に比べればほんの僅わずかの合間でしかない。それがどうしようもなく切なく、悔しかった。なぜこの瞬間が永遠ではないのかと、誰彼構わずそう問い糾ただしたかった。

『……ブリッツフォーゲル、南の空に注目していろ』

　無線機から促すマイヤー中尉の声に、カールは我に返り、視線を巡らす。

『最後の最後に、スペシャルゲストのご登場だ。あと一〇秒で、あんたの進路と交差する。そいつは……』

「——ああ、解ってる」

　眩まばゆい光を放ちながら迫り来るその偉容は、見違えるはずもない。かの天空の覇者もまた、今日のブリッツの健闘を、一いち瞥べつの謁えっ見けんに値すると認めてくれたらしい。

　帝凰龍カイザードラッヘ——その雄大なる飛翔を目にした途端、カールの心から虚無が掻かき消える。

　そうだ。今日はひとたび地に還るとしても、彼とブリッツフォーゲルは再び空に挑む。幾度なりとも挑まなければならないのだ。まだ目指すべき頂点が、至らない高峰がそこにあるのだから。

　巨きょ鯨げいもかくやという光の翼が、刹せっ那なの幻のように眼前を過よぎって、去る。

　その後に遅れて続く、穴を穿うがたれた大気の絶叫。砕かれた音の壁の断末魔。

　後に残された乱気流に揉もまれ、機体を揺さぶられながら、カールは再び胸を満たす闘志に膚はだを粟あわ立だたせていた。鋼はがねの翼を打ち据えるショックウェーブの振動は、まさしく王座の主から挑戦者へと贈られる、激励と挑発であった。

　超音速——高度三六〇〇〇フィートのトロポポーズにおいて、その値は五七三ノット以上。それこそがブリッツフォーゲル計画の最終目標であり、カール・シュニッツの挑戦と、ヴァイニンガー博士の悲願の在処ありかなのだ。

　いつかは、其そ処こに辿たどり着く。それが神の御ご座ざを踏み荒らすに等しい不ふ遜そんだというのなら、カールは、そしてブリッツフォーゲルは、神を脅おびやかすべくして現在いまという時間を生きているのだ。

「……いずれまた会おうぜ、神様」
　視野の果てに消え去る帝凰龍カイザードラッヘの光を見送ってから、カールはブリッツの機首を巡らせ、ヴァイニンガー飛行場への帰投ルートに乗った。

3

　統合作戦本部の廊下から望む中庭では、激しい風雨が植木の梢こずえを容赦なく弄もてあそんでいた。
　そんな空の荒れ模様を、ゲプハルト中佐は不吉な前兆のように受け取りながら、リノリウムの床を踏み鳴らしつつ先を急ぐ。
　なんの前触れもないままに提督直じき々じきの出頭命令を受けたとあっては、たとえ空が青く澄み渡っていようとも不穏な予感を感じずにはいられまい。
　提督の執務室をノックして来訪を告げると、取り次ぎに現れた秘書官が、言葉数少なくゲプハルトを室内に通した。仮面のように無機質な秘書官の表情からは、提督の用件について窺うかがわせるような兆きざしなど何一つ見み出いだせない。
　提督は年季の入った厳いかめしい黒こく檀たんのデスクに着き、何やら書き物を綴つづっている途中だった。
「ああ……そこに掛けてくれたまえ、中佐」
　制帽を脱いで敬礼するゲプハルトに一いち瞥べつすら与えることなく、デスクの向かいの椅い子すへと着席を促す提督。ゲプハルトを待たせたまま、なおしばらく彼の執務は継続された。無論それがただ多忙であるが故ゆえではないことぐらい、ゲプハルトは承知している。今この場に呼び出されたゲプハルトの立場を理解させるための、いわば無言の告知であった。つまりは部屋の外で待たせるほど軽い扱いではないものの、提督が筆を止めて対処するほどには重要視されていない、ということだ。人もなげな対応だが、それに気分を害するゲプハルトでもない。こういう官僚的な慣習についてもなんら感情を交えず

にいられる程、ゲプハルトという男は骨の髄から軍人であった。

　やがて提督は書面の末尾をサインで結んでからペンを置くと、ようやく老眼鏡を外してゲプハルトに視線を向けた。

「その後、どうかね？　例の実験機の方は」

「順調です。いま現在も飛行試験を重ね、着実に満足いく成績を残しています」

「ふむ……」

　あくまで穏やかに、だが眼まな差ざしにだけは容赦なく値踏みする厳格さを顕あらわしながら、提督はゲプハルトの表情を凝じっと見据える。

「使えそうかね？　あれは」

「あれと同等の航空機がヴィルドバッハに現れるのは、おそらく五年先でしょう」

　得意げな口調を安く受け取られないよう充分に自重しつつ、それでもゲプハルトは自信を込めて断言した。

「五年分の優位か……」

　ゲプハルトの返答とその真意を吟味するかのように、提督はゆっくりと椅子の背もたれに身を委ゆだね、頬ほお髭ひげを撫なでる。

「……そう、いま我々に必要なのは優位だ。ヴィルドバッハ公国に対する、揺るがしようのない優位」

　そこで一いっ旦たん言葉を切ってから、提督は眼差しに刃やいばの鋭さを覗のぞかせる。

「たとえそれが五年でなく五か月の優位でも、確実なものでありさえすればいい」

「……」

　その言葉の含みについて聞き返すようなことはせず、ゲプハルトは提督の説明を待った。提督もまた、さらに部下を弄いらうような真似はせず、デスクの上の報告書を手にとって本題に入る。

「今朝方、マイセル高原上空で動きがあった。またも領空侵犯だ。しかも今度は中隊規模で、な」

決して意外な報しらせではない。ここ統合作成本部においては、門衛から清掃夫に至るまでもが薄々予感していたことである。だがそれでも、ゲプハルトは背筋に力を込めずにはいられなかった。
「挑発もここまでくると、最後通つう牒ちょうと変わらんな。あとは一発の対空放火で戦争の火ひ蓋ぶたが切って落とされる。新聞はもう見出しまで用意しとるそうじゃないか。第二次ヴァルハラ戦役、と」
「……いよいよでしょうか」
「今回の一件で、臨時法案が可決されるのは間違いない。議会も腹をくくるだろう。……中佐、君が稼いだ五年の優位も、事に及んで間に合わんのではなんの意味も持たないぞ」
「はっ」
ゲプハルトの恭うやうやしい首しゅ肯こうに、提督はようやく信任の念を抱いた様子だった。
「目下、新兵器開発は火急の任だ。緒戦での配備が間に合わなくとも、大詰めの段階で切り札になる可能性は充分にある。依然、君のプロジェクトは期待の星だ。くれぐれも頼んだぞ、中佐」
「了解しました。最善を尽くします」
起立して敬礼し、退出を許されるまでの間も、ゲプハルトは内心の感情をいっさい面に出さなかった。
そんな彼が足を止め、深い溜息をついたのは、再び嵐の中庭を見下ろす廊下の一角まで戻ってからだった。

技術者という手合いは、趣味と実益の区別なく、手元に工作機械さえあればただそれだけで、何かしら作り出していなければ収まらないような連中である。
ヴァイニンガー飛行場においても、なまじ最先端の機材が揃っているだけに、ブリッツフォーゲル改良作業の合間に手の空いた時間が生じると、しばしば本業とはなんの関係もない珍奇な発明品が生み出されることがあった。
その日も、カールはアルベルトから自慢気に紹介された新発明を手

に取りつつ、その正体を見抜けずに首を捻ひねっていた。
　円筒形の缶詰を縦に細長く引き伸ばし、その天てっ辺ぺんに押し込み式のボタンらしきものを設しつらえた品である。何か使い捨て容器の類たぐいのもの、という辺りまでは勘が働いたが、そこから先は降参だった。
「こいつは元々エアロゾルって言ってな。近頃、陸軍が殺虫剤として支給するようになったんだ。液状の薬剤とガスを一緒に封入して、霧吹きみたいに吹き付ける、って代物さ」
「ふぅん……」
　確かにボタンの辺りをよく見れば、霧吹きに似た小さな穴が開いている。
「……で？　あんたの新発明は、その殺虫剤と何処どこがどう違うってんだ？」
「中身は液状ならなんでもいいわけだから、験ためしに塗料を入れてみたんだが、これがまた結構面白い」
「ほう？」
　アルベルトは手本とばかりに、缶を資材用の木箱に向けてからボタンを押す。シュー……と吐息のような音とともに赤い霧が吹き付けられて、あっという間に木箱の表面を斑むらなく染め上げた。
「な？　近付ければ細い線も引けるから、絵や文字を書いたりもできるぞ」
「へぇ……便利そうだな」
「昨日もエリックに渡したら、さっそく大喜びであっちこっち落書きしまくってたぜ。カール、あんたにも一本やるよ。ブリッツにエンブレムでも描かいてみたらどうだ？」
「ふむ、そうだなぁ……」
「塗料は可燃性だから、火の気がある場所じゃ使うなよ。あと吸い込んだりしないよう気をつけろ」
　エンブレムと言われても、ブリッツフォーゲルは世界に只ただ一機の試作機なのだから、わざわざ装飾で差別化する必要など感じない。

むしろ白銀の地金を剥むき出しにした飾り気のない姿こそ、新雪のような清らかさを思わせて、カールはそれなりに気に入っていた。

　とはいえ、この手軽に落書きを楽しめる玩がん具ぐにも捨てがたい魅力はある。験しにオットーの溶接マスクに顔でも描いてやろうかと思い立ったとき、件くだんのオットーが工作室に入ってきた。

「おお、いたいた……何やってんだお前ら？　もうみんな食堂に集まってるぞ」

「ん？　会議は昼からじゃなかったか？」

「博士が出掛けるんで前倒しになったんだよ。聞いてなかったのか？」

　食堂での会議というのは外ほかでもない、ブリッツフォーゲルの改修プランについての打ち合わせである。カールもしばしばテストパイロットとしての意見を求められるため、これには参加しなくてはならない。エアロゾル缶による悪いた戯ずら描きは、ひとまずお預けであった。

　目下のところ議題はただ一つであり、同時にそれは最難関の懸案でもあった。

　音速の突破――いかにしてブリッツフォーゲルに、その関門を潜らせるか、である。

　既にブリッツフォーゲルの打ち立てた速度記録は、音速の87％にまで達している。だが残りの13％にこそ、旅の困難のすべてが詰まっていると言っても過言ではなかった。ここに至るまでの道程をなだらかな斜面とするならば、これより先にあるのは断だん崖がい絶壁の岩肌も同然なのだ。

　まずその難点を再確認するため、黒板の前で解説に立ったのはアルベルトだった。

「亜音速での空気抵抗は、速度の二乗に比例して増えていく。ここまでは単純なんだ。空気流は機体から滑らかに離れて、きちんとした波紋を描くからな。この波はちょうど音速に等しい速さで進行する」

　アルベルトはブリッツフォーゲルの輪郭を模して切り抜いたボール紙を黒板に貼り、その周囲に空気の流れを示す波線をチョークで書き加えながら説明する。
「たとえばブリッツがトロポポーズ高度を五〇〇ノットで飛んでいる場合、空気の攪かく乱らんは、だいたい機体の一二〇フィートほど先から始まるんだが……これがもし仮に五五〇ノットの場合を想定すると、たった四〇フィート先になる。空気の波が、流れるのさえ間に合わずに潰れていくわけだ。これが空気分子の密度を不安定にして、とんでもない空気抵抗を生む。造波抵抗ウェーブドラッグっていうんだがな……」
　圏音速の想定図解シミュレーション……気流はブリッツの機首や翼から鋭く鋭角に引き剥はがされ、波線は細かく積み重なって合板素材の断面のような様相を呈している。これが即すなわち『音の壁』……空気が気体として振る舞うことを辞め、その密度でもって牙を剥むく瞬間だ。
「たしかに空気抵抗が小さくなるように機体の形を工夫する、っていうのは有効だ。だがどう頑張ったって抵抗はゼロにはならない。波を立てずに泳ぐのが不可能なのと同じでな。結局、ブリッツは音速に到達するより先にどうしても造波抵抗ウェーブドラッグにブチ当たる。これを避ける方法はないんだ」
「……結局最後の決め手になるのは、推力でのごり押ししかない、ってことじゃのう」
　そうヴァイニンガー博士が端的なる結論を口にすると、今度はオットーが顰しかめ面つらでかぶりを振った。
「いや、エンジンの出力は……正直なところ、これ以上はどうにも……」
「駄目なのか？」
「もう燃焼室の温度はタービンブレードの融点ギリギリなんです。冷却システムも、これ以上の細工をすれば逆に推力が犠牲になります。ここから先は、もっと耐熱性に優れた新素材でも発明されるのを待つ

しかないですわ」
　勿もち論ろん、そんな呑気な選択肢などブリッツフォーゲルには与えられていない。
　誰もが悩ましげに唸うなりながら頭を抱え、各々アイデアの閃ひらめきを待ち受ける。
「……何か補助の推進装置でも積みますか？　ロケットモーターとか」
　一人のスタッフがそう思いつきを口にしたが、即座にヴァイニンガー博士から「駄目じゃ」と否定された。
「只ただでさえブリッツは揚力に余裕がないんじゃ。これ以上よけいなモンを積み込んだら、離陸さえおぼつかなくなるわい」
　技術者たちが討論する横で、カールは出る幕とてなく、ただ漫然とアルベルトから貰もらったエアロゾル塗料缶を弄もてあそんでいた。ふと何気なく、その取り扱いの注意について言い含められていた事柄を思い起こす。
〝……塗料は可燃性……火気に注意……〟
　引火する液体、という点において、この缶に入っている塗料は燃料と違わない——そう連想が膨ふくらんだ途端、カールの脳裏に、とある破天荒な着想が訪れる。
「……なぁアルベルト、燃料タンクの配管をバイパスして排気ノズルの横まで持っていけないか？」
　いきなり意味不明の質問を振られて、アルベルトは怪け訝げんな顔をした。
「そんなことをして、どうする？」
「ジェットエンジンの排気は一〇〇〇度を超えるわけだから——」
　カールはポケットから出したオイルライターに火を点し、
「——そこからジェット燃料を霧状にスプレーして、ノズルのガスに浴びせてやれば、どうなるか……」
　ライターの火にエアロゾル塗料の噴霧口を近付け、おもむろに噴射する。その途端、引火した塗料は炎の噴流となって食堂の天井目掛け

て吹き上がり、黒々と焦げ目を残した。その場に居合わす全員が仰天して腰を抜かす。いきなり目の前で火炎放射器をぶっ放されたも同然なのだから、当然と言えば当然だ。

「……どうかな？」

　ただ一人、しれっとした顔でいるカールに向かって、オットーが目を剥むいて怒鳴ろうとする。

「ばっ、バ……この……」

　大馬鹿野郎、という言葉が喉のどに閊つかえて出てこない。だがヴァイニンガー博士は驚きから立ち直るや否や、今のカールの暴挙について真剣に検討しはじめる。

「……なるほど。瞬間的ではあるが、たしかに凄まじい加速が得られるな」

「だろ？」

　頷うなずきを交わす二人に向けて、怒るやら呆あきれるやらで顔を紅潮させたオットーが食ってかかった。

「危険すぎる！　タンク内の燃料に引火したら大爆発だぞ！」

「そこはみんなの知恵と工夫でカバーだ。もちろん俺は信用してる」

「……ッ」

　真っ先に危険に身を晒さらすことになるカール自身に、さも平然とそう応じられては、オットーとしても返す言葉がない。

「まぁまぁ。アイデアとしては面白そうじゃないか。験ためしに図面を引いてみるのもいい。そうじゃな、こいつは……仮に『アフターバーナー』とでも名付けておくか」

　成り行きの是非はさておき、兎とにも角かくにも建設的な意見が出たということで、アルベルトは溜息まじりにブリッツフォーゲルの三面図をテーブルの上に拡げ、カールの提案を検討しにかかる。

「まぁ、配管を変えるのは簡単だが……」

　ぶつぶつと工作の段取りについて独言しながら図面に見入るアルベルト。オットーも、もはや何をか言わんやという風情で口を噤つぐみつつ、その様子を見守って……それからふと、思いついたかのように

アルベルトを質ただした。
「なぁ、それはそうと、前から気になってたんだがな……」
　そう断りを入れてオットーが指差したのは、図面に描かれた機首周辺のレイアウト部分だった。
「機首の下にあるこの隙間、こりゃ一体なんなんだ？」
「……」
　アルベルトと、それにヴァイニンガー博士の表情が、まるで苦虫を噛かみつぶしたかのように一変する。だがオットーはそれに気付かず、なお先を続ける。
「最初はただのデッドスペースかと思ってたが、これだけあっちこっち手直しした後も、まだ残してあるってのは……何か意味があるのか？」
　どう説明したものか……そう目線で博士に指示を仰ぐアルベルト。
「……仕方あるまい。いずれは話さなければならんことじゃ」
　それを受けたヴァイニンガー博士は、観念した風にかぶりを振った。
「そこにはな、二〇ミリ機関砲とその弾帯が収まることになる」
　苦りきった溜息とともに呟つぶやかれた発言は、その場にいる全員の顔色をなからしめた。
「……博士、そりゃいったいどういうことですか？」
　皆の思いを代弁して問うオットー。
「……皆も知っての通り、ブリッツフォーゲルの開発は軍からの資金援助を受けとる」
　応じる博士の口調は、いつにも増して重かった。
「今回の契約では、テスト飛行も開発の一環であるとして、我々の管轄下で行うことになっとる。いずれ機体は軍に引き渡す羽目になるが、それまではアレをどう飛ばそうと儂わしらの自由じゃ。もちろん何をするにもテストという名目を立てなきゃならんがな」
　一同は沈黙のうちに、博士の告白に聞き入った。
「――とはいえ、連中もみすみす儂らの道楽を許すつもりはない。テ

ストの項目にはいくつか、軍が要求した課題も含まれている。機銃の試射もそのひとつじゃ」
「なんで今まで黙ってた？」
　押し殺されたカールの声は、いつになく冷ややかだった。
「……忘れていたかったんじゃよ。課題は課題で果たさにゃならんが、予定はどうとでも組める。まずは儂わしらの気が済むまで存分にブリッツを飛ばしてから、最後に片づけるつもりでいた。……だが、いずれ軍はこの機体を量産し、戦闘機として配備する腹じゃろう。この流ればかりは止められん。儂らの勝手が許されているのは今だけじゃ。後々は奴らの勝手を許すしかない」
「じゃぁ、何か？　俺たちは結局のところ、戦闘機を造ってるってことなのか？」
　低く、冷たく、カールが声を押さえ込む程に、その内心の激げっ昂こうは明らかになっていく。
「あくまでブリッツフォーゲルはテスト機じゃ。軍が求めているような実用性は欠片かけらもない」
　そうは言うものの、博士とて詭き弁べんなのは承知の上なのだろう。その視線は終始、床に落とされたままだった。
「おそらくブリッツを参考に造られていく息子や孫たちは、戦闘機として生まれ落ちることになるんじゃろう。だが儂らのこのブリッツだけは、戦いとは無縁の……速く飛ぶ、ただそれだけのための機体じゃよ」
「速く飛ぶのに機銃はいらない」
　斬りつけるようにそう言い返し、カールはブリッツの図面を凝視する。そこに記された機銃搭載スペースの存在は、どう言い繕つくろおうとも否定できない。
　言い返せずに沈黙する博士に、アルベルトが代わった。
「皆に話すタイミングが掴つかめなかったのは謝る。だがなカール、これでも最低限の譲歩ではあるんだ」
　その言い分に、ついにカールが爆発した。

「弾薬込みで機関砲一式となりゃあ、総重量で二〇〇ポンドは余裕で超えるぞ！　機首の輪郭だって本当なら、もっと絞り込めたんだろう？　最低限の譲歩だと？　ふざけるな！　何が速さのためだけの機体だ！」

「そいつを造れただけでも御の字なんだ！　なぜそれが解らん!?」

　身勝手なカールの主張に、アルベルトもまた声を荒らげる。

「あんたが一回飛ぶごとに何ガロンの燃料を食い潰してるのか、知らんわけじゃなかろう？　街じゃガソリンの制限まで始まってるっていうこの時期に！　……軍の後ろ盾がなかったら、ブリッツは離陸さえできないんだよ！」

「……ッ」

　カールが返事に詰まると、アルベルトもまた深呼吸をし、平静を取り戻してから続ける。

「……俺だって、連中の言いなりになるのは悔しいさ。だがそれでも、俺はブリッツフォーゲルを飛ばしたい。あいつを完成させたい」

「……そんなことで、いいのかよ？」

　なおも露骨に不服を示すカールに向けて、アルベルトはきっぱりと言い切った。

「かまわんさ。カール、あんたがどれだけ軍を毛嫌いしてるか知らんがな、綺き麗れい事ごとだけで前に進めるなんて思ったら大間違いだ。俺たちが渡ろうとしてるのは泥の河だよ。泥にまみれるか、やめるのか、二つにひとつしか道はない」

　その言葉の含みを察して、カールの表情が蒼そう白はくになる。

「……俺にブリッツから降りろっていうのか？」

「それもあんたの選択だ。裏切ったなんて誰も思わないさ。むしろ俺たちが騙だましてたようなもんなんだ」

「おい――よせッ」

　さすがに聞き捨てならなくなったオットーが割って入る。だが、カールはそれ以上言い返すこともなく、悄しょう然ぜんと俯うつむいたまま、独り食堂から出て行った。

　そんなカールを、かける言葉もなく見送ってから、オットーは深々と溜息をつく。
「……あいつの代わりが務まるテストパイロットなんて、どこを探しても見つからないぞ」
「じゃあどうしろっていうんだ!?」
　反はん駁ばくするアルベルトも、流石さすがに言い過ぎたという引け目は感じるらしく、その語調は捨て鉢だった。
「……儂わしらは軍に頼っとるのと同じぐらい、カールにも頼っとるんじゃ」
　本来の議題を大幅に逸それ、荒すさみきった口論のまま終わった会議の後に、ヴァイニンガー博士は沈ちん鬱うつな声で誰にともなく呟つぶやいた。
「じゃが、やはり……予あらかじめ話しておくべきだったのう」

4

　ヴァイニンガー飛行場の宿舎の裏手には、角材とトタン板による掘っ立て小屋が増設されている。幼生龍ジークフリードの飼育小屋として、エリック自らが手て鋸のこと金かな槌づちを振るい造ったものだ。
　着実に回復の兆しを見せている幼生龍は、藁わらで設しつらえた寝床に丸くなり、今はうつらうつらと昼寝の最中であった。その傍らでは、行き場をなくしたカールが丸椅い子すに腰掛けて、小さな龍の寝顔にただ漫然と見入っていた。
「……なぁ坊主、生まれつき翼があるってのはどんな気分だ？」
　言葉など通じないとは解っていても、そう問いかけずにはいられなかった。
　胸に提さげたペンダントに手で触れる。地上にあって空を想うときの、それはカールの変わらぬ手癖であった。
　理はアルベルトにある。そのくらいは解りきっている。
　むしろ軍部に反抗するならば、ヴァイニンガー博士の巧みな処世に

こそ賛辞を贈るべきだろう。これだけ切迫した状勢の中、まんまと軍を出し抜いて資金をかすめ取り、好き勝手な研究に費やしているのだ。その痛快さに比べれば、機銃の試射ぐらい如い何か程のことか。ゲプハルトの渋じゅう面めんを横目に、鼻歌交じりにこなしてもいい程だ。

　だが――ブリッツフォーゲルが機銃を積むと知った途端、カールはまるで愛まな娘むすめが陵辱されたかのような激憤に囚とらわれた。打算や理屈の筋道ではどうやっても避けて通れない、それは生理的嫌悪にも等しい感情だった。

　そしてなお輪を掛けて衝撃だったのは、その後――嫌ならブリッツフォーゲルを捨てろというアルベルトの言葉に、この自分が、即座に怒りを抱くことができなかった点だ。

　憤ふん懣まんやるかたない筈はずなのに、頭のどこか醒さめた部分で、淡々と諦てい観かんしている自分に気付いてしまったのだ。――機銃を抱えてまでブリッツと飛ぶ理由はない、と。

　それがあまりにも悔しかった。一心同体に思えたブリッツとの間に楔くさびを打ち込まれた気分だった。あの試験機に抱く己の情熱はその程度のものだったのかと、自分自身を詰なじりたかった。

　なにも戦場に立てと言われているわけではない。所しょ詮せんは試射だ。機械装置の実験だ。その成果がいつか巡り巡って誰かを殺あやめるために活用されるのだとしても、そんな未来にまで責を負う道理などあるわけがない。

　なぜそこまで『戦闘機に乗る自分』を許容できないのか。すべてはもう三年も昔のことだ。今のカールは新しい人生を歩んでいる。そこに価値を見み出いだすなら、その幸を慈いっくしむなら、過ぎ去った日々の悪夢など克服できて当然ではないのか。

「お前らが空を飛ぶのには……なんの面倒もないんだろうな」

　語りかけるカールに、微睡まどろみ半分のジークが億おっ劫くうそうに細い吠ほえ声を返す。

「……どうしたんだよカール？　ジーク相手に愚痴ったりして」

　声をかけられてようやく、彼は飼育小屋へと戻ってきたエリックの存在に気付いた。両手には小屋の修理道具とおぼしい素材やら工具やらを抱えている。今日は朝から、街に降りる憲兵隊のジープに便乗し、留守にしている筈はずだったのだが。
「もう戻ったのか？　早いな……」
「うん。必要なもの買い揃そろえたら、あとは別に用なんてないし」
　至し極ごくあっさりそう言い捨てて、エリックは抱えていた荷物を床に下ろす。その無む頓とん着ちゃくぶりにカールは納得した。なるほど、これならば弟の行く末を変人予備軍として危ぶむ姉の心境にも察しがつく。
「ヘレンが心配してたぞ。たまには街で遊ぶぐらいでなきゃ駄目だって」
「つまんないよ。ここにいたほうが断然楽しいし」
「こんなむさ苦しい親父どもの巣そう窟くってか？　もうそろそろ、ガールフレンドぐらい作ったらどうだ？」
　ひやかしのつもりでそう言うと、エリックはなおいっそう意地の悪い笑みを返してきた。
「いやいや、僕はもうカールと姉さんを見てるだけで腹一杯だから」
「……」
　こうもあっさり切り返されては年長者の面目など丸潰れだが、そもそもカール自身、そんな面目を己が持ち合わせているという自負もない。
「そうだジーク、今日はすげぇお土産があるんだぞ」
　持ち込んだ荷物を選えり分けながら、ふとエリックはそう言って、筒状に丸めてあった大判の紙を手に取った。
「じゃ～ん」
　少年はさも自慢気に、紙筒を拡ひろげて小屋の内壁に貼り付ける。ポスターだ。その絵柄を見た途端、カールの笑みが凍りついた。
　かつてヘレンと一緒にデモ行進に行き合ったとき目にした、賛戦派の翼賛ポスター……それもブリッツフォーゲルとカールの写真を無断

転載して作られた、あの図案だった。
「……なんだ、それは」
「街でもらったんだ。そこいらじゅうに貼ってあったよ」
　カールの声音の温度に気付きもせず、エリックは無邪気なものだった。その行いがなんの悪意もない無知ゆえのものと解りきっていながら、だがそれでもカールは自分を抑えられなかった。
　貼ったばかりのポスターをいきなり荒々しく破り捨てられ、エリックは目を剥むく。
「な、なにすんだよ⁉」
「捨てちまえ！　こんなもの！」
「な……なに怒ってんだよカール？　あんたとブリッツの写真だぞ」
　まったく理解の及ばないカールの癇かん癪しゃくに、エリックは怒るよりむしろ怯おびえていた。カールは大人おとな気げない自分につくづく嫌気がさしつつ、それでも吼ほえずにはいられなかった。
「こいつは俺ともブリッツフォーゲルとも関係ない。馬鹿どもが勝手に勘違いしてるだけだ」
「そ、そんな言い方ないだろ⁉　あんたが英雄なのは本当じゃないか！」
「……ッ」
　エリックは皮肉でも揶ゃ揄ゆでもなく、掛け値なしに無む垢くな憧しょう憬けいで、カールをそのように崇拝しているのだ。それが解るだけに辛つらかった。いたたまれない思いに駆られ、カールはジークの小屋から出て行こうとする。
「なんで逃げるんだよ！」
　その背中をエリックの怒声が串刺しにして、足を地面に縫ぬい止めた。
「なんであんた自慢しないんだよ？　胸張ってくれないんだよ？　本当は空軍で一番のエースだったんだろ？　この国を救ってくれたんだろ⁉」
　エリックは泣いていた。彼は彼なりに、その崇拝の念がカールに届

いていないことを、かねてから薄々察していたのだろう。そんな寂しさと悔しさが溜まりに溜まり、涙となって堰せきを切っていた。
「みんなあんたに感謝して、憧あこがれて……それがなんでいけないんだよ!?　厭いやがるようなことかよ！」
　そう質ただす少年を、ただ黙殺してのけられる程、カールの心胆は鋼はがねではなかった。なのに、相手の涙に釣り合うだけの、意味のある言葉が思い浮かばない。代わりに口を衝ついて出るのは、言い逃れも同然の戯ざれ言ごとばかりだ。
「……俺は、なりたくて英雄になったわけじゃない。何もかも成り行きだった。俺の知ったことじゃない」
「そんなの、勝手すぎるよ……」
　巧みな弁明さえできないカールに対し、エリックの声は真しん摯しであるが故ゆえに残酷だった。
「誰だってもう知ってるよ。きっとまた戦争になるって。でも僕は怖くなかった。だって今度はカールがいて、爺じいちゃんの造ったブリッツフォーゲルがあるんだから。ヴィルドバッハが攻めてきたって、きっとやっつけてやれるんだから」
「……ッ」
「街のみんなが同じこと考えたら駄目なのかよ？　みんな死んじゃうかもしれないんだ。本当は怖くて仕方ないんだ！　そんな風にずっと怯おびえてろっていうのかよ？　カールがいれば大丈夫って、そう思ってるだけでも駄目なのかよ!?」
　そこまでが限界だった。ここで逃げれば壊滅的なほど自分に愛想を尽かすことになると解りきっていながらも、カールはその場に踏みとどまれなかった。
　いつまでも背中に突き刺さる、悔し泣きの嗚お咽えつに苛さいなまれながら、カールは足早にジークの飼育小屋を去った。

　誰もいない格納庫の片隅で、ブリッツフォーゲルは静かに時を待っていた。

ただ眺めているだけで疾走感を錯覚させる流線型のボディは、さながら過日に飛んだ空を、そしてまたいつか飛ぶ空を、夢に見て眠っているかのようだ。

常に沈黙のみを返す冷たい鋼の相棒。その傍らにカールはいた。何ど処こにも居場所のなくなった飛行場をあちこち彷徨さまよい歩いた末に、結局辿たどり着いたのは、ここだった。

そんなカールの後ろ姿を、ヘレンは格納庫の入り口から、言葉もなく見守っていた。食堂での口論は、台所で昼食の準備をしていたヘレンの耳にも聞こえていたのだ。あんな経緯があった後、彼にどういう言葉をかけていいのか、俄にわかには判断がつきかねた。

「……夢でも見てる気でいたのかな、俺」

果たしていつの間にヘレンの気配に気付いたのか、カールが振り向くこともなく、独言のようにそう口にする。

「世界一速い飛行機で、誰も挑んだことのない龍と対決して……本当に、夢みたいな話だと思ってた」

「みんなだって、同じ気持ちよ。誰だって戦争なんか嫌だよ」

今のヘレンに、確信を込めて言い切れる言葉があるとすれば、せいぜいがその程度だ。

流血なき闘争を鉄則とする龍たちの流儀は、この飛行場に集い開発計画に参加したすべての者たちの羨せん望ぼうであり、理想だった。

科学技術の粋すいをもってして空に挑む――そんな夢にいくら想いを馳はせても、飛行機はその高価すぎる運用コスト故ゆえ、未だに旅客や貨物運送の主流とは成り得ていない。いつか鉄の翼が、そのような形で真に人類の文明に寄与するようになるまでには、まだまだ多くの発明と改善を必要としていくのだろう。現時点でその速度と機動性にコストと釣り合うだけの利点が見み出いだされているのは、唯一、軍事利用だけである。

今の時代、技術者として航空力学を志すなら、それは兵器産業に身を投じるのとほぼ同義なのだ。だからこそオットーやアルベルトたちは、ヴァイニンガー博士の挑戦に魅せられた。龍の如く飛び、龍と競

せり合うためだけの飛行機。そんな夢の結晶がブリッツフォーゲルであったのだ。
「……ただ『飛びたい』ってだけじゃ、駄目なのか？」
「……」
　ヘレンは答えられなかった。その問いが彼女だけに向けられたものではないにせよ、答えてやれないのが悔しかった。
「何かを背負ったり、守ったり……そういうご大層な理由がないと、俺たちは空に行っちゃいけないのか？」
「私は……飛んでるカールが好きだよ」
　焦りにも似た感情で、ヘレンはそう口走る。だが一方で、そんな言葉では到底カールを救うことができないことも理解してしまう。
「ブリッツが武器を積むって聞いたとき、俺はこいつが穢けがされたと思った。それがもとで、俺のブリッツが何か違うモノになっちまうような気がして……でも、違ったんだ」
　語りながら、カールの口元が冷酷すぎるほどの自じ嘲ちょうに歪ゆがむ。
「それを言うなら……こいつはとっくに穢されてたんだよな。こいつには最初から兵器が積まれてた。操縦席に座らせるだけで何百人もヒトを殺せる兵器を、な……」
「やめてよ……」
　ヘレンは、カールがジークの飼育小屋でエリックと交わした遣り取りを知らない。故になぜカールがそんな不穏当な言葉で自分自身を詰なじるのか解らず、戸惑うばかりだった。
「逃げられるわけなかったんだ。解ってた。本当ならもう二度と空を飛ぶべきじゃなかった」
「……君、それでいいの？」
　カールがブリッツフォーゲル計画に参加しなければ、ヘレンと出会うこともなかった。彼が再び空に挑む決意を固めたからこそ、現在の二人の関係があるのだ。それすらも否定されたのでは、ヘレンとて黙っていられない。

「楽しいことも、嬉うれしいことも、君はここで見つけたはずでしょ？　それさえも全部なかったことにしちゃうの？　そんなの寂しすぎるって……思わないの？」
「……」
　ヘレンの訴えに、カールは虚うつろな笑いを消して、再び沈ちん鬱うつに黙り込んだ。己を粗末にすることで、誰かを悲しませることもある。この朴ぼく念ねん仁じんな男でも、その程度は弁わきまえているのだろう。
「……俺は、最後までこいつと一緒にいたい」
　祈るように、縋すがるようにそう呟つぶやきながら、カールはブリッツの白銀の機首に触れる。
「何もかも終わって、こいつが軍の技研の連中に解体される瞬間まで、傍そばにいてやりたい。それだけのことなのに……」
　訥とつ々とつと語るうちに、ふとカールの眼まな差ざしが、何か思うところが固まったかのように光を取り戻す。やおら彼は機体に背を向け、ヘレンの横を通り過ぎて格納庫から出て行った。
「……どこに行くの？」
「直じか談だん判ぱんだ。夜には戻るよ」

5

　午後の執務をすべて終え、そろそろ小休止かと一息ついていたゲプハルト中佐の元に、正面ゲートの衛兵から奇妙な問い合わせが届けられた。
　なぜか頑かたくなに身元を明かそうとしない不審人物が、ゲプハルトとの面会を求めて門前に居座っているという。普通なら有無を言わさず追い払うところだが、その男が乗ってきた野戦四駆車のナンバーを照会したところ、憲兵隊がゲプハルト管轄の任務で使用中の車だと判明したため、念のため報告を寄越した、とのことだった。
　事の次第を一発で理解したゲプハルトは、深く歎たん息そくして席を

立ち、副官に声をかけた。
「しばらく外出する。……いつものところだ」
「了解しました。すぐに車を用意します」
「無用だ。今日は連れの車を使う。……いや、帰りの迎えだけは頼もう。後で向こうに車を廻しておいてくれ」
　やや奇妙な指示に小首を傾かしげる副官を後に残して、ゲプハルトは制帽と外がい套とうを身につけ、正面ゲートへと向かった。

　ゲートの門衛と押し問答をしていた男は、案の定、カール・シュニッツだった。
　仮にも軍人の端くれならば、青色特功章を受勲した英雄の顔ぐらい憶えておけと衛兵を叱しっ責せきするつもりでいたゲプハルトだったが、髪は乱れ、無ぶ精しょう髭ひげも当たらぬうらぶれた風体のカールには、往年の英雄を思い当たらせる風采さなど微み塵じんもなく、これではまともに誰すい何かに応じたとしても本当に本人かどうか疑われていたかもしれない。
「お前の方から訪ねてくるとは珍しい」
　ゲートの外に止めてある野戦四駆車は、ヴァイニンガー飛行場に駐ちゅう屯とんする憲兵隊に配備されていた一台だ。日頃からゲプハルトを避けてばかりいたカールが、今日に限っては、わざわざ車を借り出してまで単身出向いてきたのだから、余程の用件があってのことだろう。
「正味の所を問い質ただすとなると、結局、あんたしかない」
　果たして、今日のカールは皮肉も韜とう晦かいもいっさい交えず、思い詰めた表情でゲプハルトと向き合っていた。
　依然、訝いぶかしげに成り行きを見守っている衛兵に対し、ゲプハルトは首しゅ肯こうひとつで、後は出る幕ではないと冷ややかに伝えた。恐縮しつつ敬礼して去る衛兵を後しり目めに、彼はカールが乗ってきた四駆車の運転席に乗り込み、ステアリングを握る。さしものカールもこれには戸惑った。

「……おい？」

「俺のデスクで話したい用件なら、それでもいいが」

　それがゲプハルトなりの気遣いだと遅れて理解したカールは、やや複雑な面おも持もちで車のキーを手渡し、助手席に乗った。

　ゲプハルトの運転で、四駆車は何処いずこへとも知れず走り出す。普段、運転を他人任せにしている男にしては、やや乱雑なほどに手慣れたハンドル捌さばきであった。

　車内という密室の中で、両者はしばし沈黙の静けさを共有する。

　思えば戦後に再会して以来、この二人が余人を交えずに話す機会を持ったのは、これが初めてであった。共に旧交を温める意図など毛頭なく、擦れ違ったまま積み重ねてきた三年間の隔絶を、ただ互いに冷然と受け入れていた男たちだった。

　――程なく、先に口を開いたのはカールの方だった。

「ヴァイニンガー博士が俺をテストパイロットに選んだのは、あんたの差し金か？」

「いいや。だが最高はお前だと教えてやった。最高のパイロットだった、とな」

　ゲプハルトは抑えた声で、そのくせ過去形だけを当てつけがましく強調して答えた。

「まさかお前が引き受けるなんて思わなかった。二度と飛ぶことはないと思っていたからな。驚かされたのは俺の方だ」

　カールはしばし無言で、車外を流れ去る街の景観を眺めていた。ゲプハルトはただ漫然と転がしているわけでもない様子だったが、それでも相変わらず目的地の察しはつかない。とりあえず方角としては港湾方面を目指しているらしい。

「……いずれブリッツは戦闘機になるのか？」

　二つ目の問いにも、ゲプハルトはかぶりを振った。

「あそこまで速度ばかりに特化した機体は、汎はん用よう兵器として失格だ。だが量産型のジェット戦闘機は、ブリッツを雛ひな形がたにして開発する」

　ゲプハルトの言い分は、カールがヴァイニンガー博士から聞いた話の通りであった。
「いわば究極の理想型として提示されるのがブリッツフォーゲルだ。今あの機体の可能性を徹底的に追求しておけば、後に続く新型機の性能を底上げすることに繋つながる。そのためのお前らだよ」
　カールは小さく頷うなずいて、再び沈黙した。
　しばしの間途絶えた会話を、今度はゲプハルトが仕切り直す。
「……俺がお前らをどう思っているのか、それが訊きたくて来たんじゃないのか？」
「違う。俺たちのことじゃない」
　助手席のカールは、ここにきてようやく向き直り、ステアリングを握るゲプハルトを見据えて、問うた。
「あんたにとって、ブリッツフォーゲルは何なんだ？　大佐になるための足がかりか？」
　答える代わりに、ゲプハルトは冷ややかに鼻を鳴らして嗤わらう。
「そうか。まだ行く先の見当もつかないのか」
　まるでドライブの目的地が自明であるかのような言い分に、カールは改めて車外に目を遣る。軍港の敷地が見えたときにはそこが終着かと思ったが、ゲプハルトは車のギアを落とすこともなく、ゲートの前を素通りする。
「……どこに行くつもりだ？」
「お前が逃げ出した場所、さ」

　ゲプハルトは軍港の隣にある丘へと乗り入れ、その頂で車を停めた。
　折しも水平線に沈む夕陽が西の空を染め上げる時刻。斜陽を浴びた丘の斜面では、無数に集った墓標の群れが、哀しいほどに規則正しく影法師の隊たい伍ごを組んでいる。
　そこはヴァルハラ戦役での戦没者たちが眠る軍人墓地だった。
「最後にここに来たのは、いつだ？」

問いかけるゲプハルトに、返答は戻らなかった。答えられないカールに対し、彼はさらに侮ぶ蔑べつと哀れみを込めた冷笑を向ける。

「——だろうな。二度と来ることもないと思っていたか？　俺はな、週に一度はここに通っている」

ゲプハルトは車を降り、カールの方を窺うかがうこともなく、さっさと墓地に入っていった。後に続くのは気が進まないカールだったが、そうしなければ、先に投げた質問に対する回答もまた、決して得られないのだろう。重い足を引きずるようにして、カールはゲプハルトに付き従い、物言わぬ墓石の間を通り抜けていった。

「……この列だ」

とある一画で、ゲプハルトが足を止める。そこに並ぶ墓標たちは、余よ所そのそれらと形や大きさに差異があるわけでもなかったが、唯一、碑面に刻み込まれた共通の意匠だけが他と異なっていた。

図案化された王冠のマーク。それは空軍史上初めて、戦績の突出した者のみを集めて編成されたエース部隊が掲げたものだ。

通称、『王冠中隊クローネシユタツフエル』——敏腕パイロット同士の連携による相乗効果は予想を大きく上回る成果を上げ、司令部を欣きん喜き雀じやく躍やくさせたものの、それが故ゆえに彼らは常に戦況打破を求められる劣勢の戦線へと駆り出され、激戦と記憶される作戦のほぼすべてを潜り抜ける羽目になった。結果、その生存率は過酷の極みとなり、創設時の初期隊員三六名のうち、九か月後の休戦に伴う解散を生きて迎えられたのは、わずか二名に過ぎない。

「……何人、顔を思い出せる？」

そうゲプハルトに問われても、カールは即答できない。御み影かげ石いしに刻み込まれた碑名にはすべて憶えがある。その顔も声も思い出せる。彼らの名前がこんな無味乾燥な文字として石に刻まれているという事実だけが、得心できない。

いつどこで行き違ったのか憶えはなくとも、ただなんとなく、つい疎遠になったきり近況を聞いていない連中——どの顔についても、その程度の感覚しか懐いだけなかった。彼ら全員が、この冷たい土の下

に埋まっているなどとは、到底信じられない。

　だからこそカールは、努めてこの墓地を訪れることを避けていた。

「なぜお前は生き残った？」

　再び重ねてゲプハルトが問う。今度もまたカールは答えられない。答えられる筈はずもない。だがその沈黙こそが不実だとでも言わんばかりに、ゲプハルトは静かな詰問を繰り返す。

「ここに埋まってる連中と、お前と、何がどう違ったっていうんだ？」

「……そういうあんたは、どうなんだ？」

　辛うじてカールに出来たのは、問いに問いを返すことだけだった。彼を問い糾ただすのが外ほかでもないゲプハルト・ミュラー中佐であったからこそ、それが叶かなった。

　ゲプハルトは全く動揺することなく、膝ひざを屈かがめて墓標のひとつに触れながら、答える。

「考えたさ。ここに来るたびに考えた。だが決して答えは出なかった。……ヴァイニンガー博士と会うまではな」

「……」

　この男は、答えられるのだと——その理解が、何よりもカールを揺さぶった。

　永久に眠りつつ無言の問いを投げてくる僚友たちを前にして、この男は既に答えを見み出いだしている。耳を塞ふさぎ、目を逸そらし、ただ夢を見ることにのみ逃避したカールとの落差がそこにある。

「俺たち空軍には、強い戦闘機が必要だ」

　冷ややかな墓石の感触に負けず劣らず、固く揺るぎのない眼まな差ざしで、そうゲプハルトは断言する。

「もう一度、仲間を戦場に送り出すときが来たら、俺は必ず敵よりも優秀な戦闘機に乗せてやる。どんな戦いにも生き抜いて帰ってこられるだけの、圧倒的に強い機体に乗せる。それが俺の務めだ。そのために俺は、あの戦争から生きて帰ったんだと……今なら、胸を張ってこいつらに言える」

「……」
　異を唱えられる筈はずもない。怒りでも衝動でも超えられない。たとえカールにどれほどの弁士の才があったとしても、この墓標の列を前にして自らに問い続け、その末に掴つかみ取ったモノを論破することなど不可能だろう。

遠く離れた墓地の門前に、黒塗りのセダンが現れ、音もなく停車した。本部に戻らねばならないゲプハルトを迎えに来た公用車だ。

ゲプハルトは立ち上がり、いつもながらの冷淡で無関心な眼まな差ざしをカールに向ける。その心中にある落胆と軽けい蔑べつの念を、今ならばカールは得心できる。

「いまさらお前が何を思って飛ぼうが、もう俺の知ったことではない。一度逃げ出した奴には、何を期待するつもりもないからな」

「……」

「だがな、これだけは言っておく。――断じてブリッツフォーゲルはお前独りのものじゃない。肝に銘じておけよ」

そう言い捨てて、あとは返答も待たずに背を向けるかつての友に対し、カールもまた、その背中を呼び止める言葉を持たない。

ゲプハルトが去った後、独り残されたカールは、ただ途方に暮れて夕陽の中に佇たたずむしかなかった。

彼には何もできなかった。目の前に並ぶ墓石の重さを受け止めることも、エリックの想いに応えることも、ゲプハルトと信念を共にすることも――すべてカールには荷が勝ちすぎた。なぜここまで非力で不ふ甲が斐いない自分が、今日まで生き恥を晒さらしてこれたのか、その厚こう顔がんさに我ながら驚き呆あきれる程だった。

まるで地上にあるすべての事物が、彼を縛り、貶おとしめ、恥じ入らせようとしているかのようだ。何ど処こにも居場所のない彼に、用意された役やく所どころといえば、どれもこれも馴な染じむはずもない衣装と仮面ばかり。それでも舞台に立って踊れというのか。そこに喜びと意義を見み出いだせというのか。

我知らず指が胸元に提げた龍の牙に触れる。その硬く鋭い感触だけが、虚むなしくもささやかに、カールの心を慰めた。

［第三章］

再生の翼

1

　幼い頃から、彼は天翔る龍に憧あこがれていた。
　その雄々しくも自由な翼は、幾度、遠目に眺めても飽きることなどなかった。彼らが舞う空の世界は、どんな痛みも悲しみもない場所に違いないと、そう羨せん望ぼうして夢を馳はせた。
　少年期の喜びといえば、ただひたすら模型の龍や飛行機と、あとは飛行士の伝記に胸ときめかせていた記憶しかない。
　もしも人生に意味や価値があるのなら、憧しょう憬けいを、ただ憧憬のままに終わらせていい道理がない。だから自分は当然の如く、いつかあの空に辿たどり着くのだと――そう少年は信じて疑わなかった。
　やがて成長し、世間の道理をある程度弁わきまえるようになってからも、葛かっ藤とうなどは微み塵じんもなかった。平民が飛行機の操縦を習得したいと思うなら、道は空軍への入隊しかない。進路を巡る両親の意見などいっさい斟しん酌しゃくすることなく、彼は兵科を進んだ。ごく個人的な主観で語るなら、至極安易な日々だった。それがいつか大空に至る道なのだと弁えている限り、どんなに厳しい修身も、彼は辛苦と感じなかった。

　二十歳そこそこの若造が、真新しい制服を身に纏まとい、やや萎い縮しゅくぎみな足取りで、そのくせさも珍しそうに周囲を見回しながら歩いていれば、それはもう配属初日の新兵が迷子になっていますとプラカードを掲げているも同然だ。
　おそらくは宿舎を探しているのだろうが、それがなんで格納庫に迷い込んでくるのかと呆あきれつつ、一人の航空士官が自機の整備点検の手を休め、声をかけた。
「よう新入り。今日からウチの隊に配属されるってのはお前だな？」
　声をかけられた新兵は緊張も露あらわに背筋を伸ばし、溌はつ剌らつ

と敬礼する。
「は、はい！　本日付けで着任しました、カール・シュニッツ伍ご長ちょうであります。よろしくお願いします！」
　つい先日までの自分を合わせ鏡で見るようだと苦笑しつつ、声をかけた士官も、こちらは少しだけ手慣れた敬礼を返す。
「ゲプハルト・ミュラー。少尉だが、俺も先月来たばかりの新入りだ。……お前さん、訓練校から直じかに配属だって？」
「はい、そうですが……」
　なんら含みがあるようには見えないカールの返事に、ゲプハルトはますます胡う乱ろんそうに眉まゆ根ねを寄せる。
「あと二年寄り道して士官学校に行っとけば将校コースだろうが。何考えてんだお前？」
　戦時下でもあるまいに、歴れっきとしたエリートコースである飛空士養成学校を出ておきながら、そのまま士官候補生への道を辿たどらずいきなり着任するというのは、まず普通に考えて有り得ない。後々の待遇を考えれば、たとえ借金をこしらえてでも学費を工面して士官学校へ進むのが当然である。
　だがカールは、おそらく行く先々で同じ質問を浴びせられてきたのだろう。もう説明にも慣れたとばかりに苦笑して、ただ一言だけで回答した。
「自分は、飛行機に乗れさえすればいいんです」
「ふむ……」
　これはまた、とんだ変人が来たものだ——ゲプハルトは歎たん息そくした。そう思って見れば見るほどに、いかにも和やかで人の良さそうな笑顔といい、まるで兵士らしからぬ居住まいの男である。果たして軍隊という組織の中でうまくやっていけるのかどうか、先行きを不安にさせる雰囲気がある。
　こいつは何かにつけて、面倒を見てやらねばならんのだろうな、と、そう覚悟を決めたゲプハルトは、ひとまず手元の作業を切り上げることにした。

「来いよ、どうせ宿舎がどこだか分からなくて迷ってたんだろ？」
「はい……あの、どうして解ったのでありますか？」
「お前の顔にそう書いてある。こっちだ。隊の仲間にも紹介してやる」

　カール・シュニッツと一緒に飛ぶ空には、いつも不思議な感慨が伴った。
　ゲプハルトが空軍を志したのは、それが己の適性を鑑かんがみた上で昇進に最も有利なルートだったからでしかない。戦闘機の操縦も、順当なエリートコースを実感する満足感こそあれ、それ以上の喜びなど感じるいわれはない。
　なのにカールを僚機として伴う任務では、なぜか、言い様のない高揚感が心の隅に燻くすぶるのだ。カールの機体は翼の挙動を見ているだけでも、空を飛ぶことの開放感と全能感を満喫しているのがひしひしと感じられる。無意味に大おお袈げ裟さな機動をするせいで、しばしば編隊が乱され、時には飛行計画のルートを逸脱することすらあるのだが、なぜか目くじらを立てて怒る気になれない。
　今日の哨しょう戒かい任務も、配備されたばかりの新型機Ｈａ１１２による初飛行という、それなりに緊張を伴うものだった。どんな挙動をするやも知れぬ未知の機体を託されるなど、ゲプハルトには貧乏籤くじとしか思えない。なのにカールが意気揚々と志願したせいで、結局は彼を放っておけず、こうして付き合う羽目になったのだ。
　結果的に、新型機は操作感の良好な名機だったので幸いだったが、カールは端はなから杞き憂ゆうなど皆無であったかのように、嬉き々きとしてスロットルの手応えを堪たん能のうしている。
『凄いエンジンですよ！　こんな高度でもぜんぜん咳せき込んだりしない！』
「そうだな。さすがハフナー製は違う……あそこの技術主任は本物の天才だって話だからな」
　高度三六〇〇〇フィートという高々度を巡航しつつも、ゲプハルト

の斜め後方に着くカール機は、隙すきを見て横滑りやバレルロールを繰り返し、まるで落ち着きというものがない。普段なら少しは諌いさめるところだが、今日は新型機の操作性について報告する任もあるため、一応のところアクロバットの名目も立つには立つ。——それにしても初めて乗る機体でよくもあそこまで無茶ができるものだ。その無謀さにゲプハルトは呆あきれることしきりである。
『ねぇ少尉、こいつで霞龍ネーベルドラッヘと競争したらどっちが勝つと思います？』
「龍りゅうと競争？　なんでまた？」
『はぁ、いや……ただ思いついただけですが』
「まったく……つくづく変な奴やつだな、お前」
　言葉とは裏腹に、ゲプハルトは苦笑を禁じ得なかった。
　確かに時折、飛行空域に入り込んでくる小型の龍は鬱うっ陶とうしいものだが、べつに実害があるわけでもないし、仮に本気で張り合おうとしても、現行の戦闘機には龍に追いつけるほどの機動性はない。とはいえ、この新型エンジンの力強さがあれば、あるいは霞龍ネーベルドラッヘぐらいならいい勝負になるかもしれないが……
　ついカールに釣られて益やく体たいのない想像を膨ふくらませてしまった自分を、ゲプハルトはかぶりを振って戒める。
　基地への定時報告も、ついさっき済ませたばかりだ。手持ち無ぶ沙さ汰たに無線の周波数を短波に切り替え、どんなラジオ放送が拾えるか探ってみる。もちろん服務規程違反だが、遊び半分のカールが一緒のときに生き真ま面じ目めを通すのも馬鹿らしく、この程度のことはしてみたくもなる。
　うねる空電音の中から、ふと立ち現れた力強い口調の演説が、ゲプハルトの注意を惹ひいた。
『……忘れてはならない！　栄光ある公国の歴史の影に、つねにあった悲運と屈辱の数々を！　我ら民族の統一は、建国の祖リフテン公より受け継いだ悲願であり、二〇〇年に渡り無惨に分断されてきた我らが領土は、神に愛されしヴィルドバッハの民にとって最大の屈辱であ

る！　よって……』
　いったん交信周波数に戻して、カール機にも呼びかける。
「カール、６２８５ｋｈｚの電波を拾ってみろ。面白いものが聞けるぞ」
『は？』
　指示された短波のチャンネルで、カールもしばしの間、さっきの演説の続きに耳を傾けていたのだろう。ややあってから再びゲプハルトに届いた通信は、困惑しきった声だった。
『少尉……何なんですか？　あれ』
「ヴィルドバッハの国営放送だ。あそこ、このあいだの選挙でタカ派の党首が政権とっただろ。お前、新聞も読まんのか？」
『はぁ……』
　困ったものだと呆あきれつつ、いかにもカールらしいと納得もする。
「しかしなぁ……就任演説でいきなりコレか。あいつら本気でシルヴァーナに喧けん嘩か売ってくる気かな」
『そうなったら……戦争ですか』
「ああ。勘弁してほしいね。それぱっかりは」
　いざ事が起これば、誰よりも迷惑を被こうむるのは前線に立たされる兵士たちだ。勿もち論ろん、それを栄誉として受け取る手合いもまた少なくないことはゲプハルトも知っているが……
　結局のところ、一介のパイロットに出来ることなど何もない。政治屋たちの外交努力に期待しつつ、ただ流れに身を任せるしかないのだ。

2

　その夜のカールは胸騒ぎに苛さいなまれ、なかなか寝付けなかった。
　待機任務中ならまだしも、非番の夜に眠気をもよおさないというのは、あまり歓迎できることではない。寝られるときにぐっすり眠るか

らこそ、有事には休むことなく集中力を維持できる。必要とあらば床に寝袋を敷いただけでも熟睡できる神経の太さが、パイロットには要求されるのだ。実際、普段のカールはそうだった。目が冴さえて眠れないなどという経験は、基地の独身寮に入って以来、実に初めての経験ではないか。

　或あるいは既に、天性の勘とでも言うべきものが、やがて訪れる嵐の到来を予見していたのかもしれない。

「おいッ、起きろカール！　一大事だ！」

　ほとんど扉を蹴け破らんばかりの勢いでノックし呼びかけるゲプハルトの声を聴いたときも、カールが懐いだいたのは、驚きよりむしろ悪寒じみた不安感だった。

　毛布を蹴り除のけ、下着一着のままドアを開けると、既に飛行服を身につけたゲプハルトは顔面蒼そう白はくであった。

「……何事ですか？　少尉」

「総員召集だ。とうとう始まりやがった……さっさと着替えろ！」

「始まったって、何が……」

「戦争だよ！」

　――事の重大さを理解するより、ゲプハルト少尉が普段の冷静沈着さをかなぐり捨て、慌てふためいていることの違和感の方が、まずカールを途方に暮れさせた。

　深夜にも拘かかわらず、基地のブリーフィングルームは人で溢あふれかえっていた。

　ヴィルドバッハは宣戦布告と同時に国境を越えたらしい――

　味方の守備隊は潰かい走そう、国境沿いの都市は既に占領されたとか――

　幾つかの基地は、スクランブルすら間に合わず壊滅させられたと――

　声をひそめて交わされる噂うわさ話ばなしは、どれもこれも憶測の域を出ず、まるきり状況把握の用を為なさない。いずれ司令官が現れて

状況説明を行うまでは、確かなことなど何一つ知りようがないのだが、だからこそ彼らは喋しゃべり続けずにはいられなかった。重苦しい沈黙に身を委ゆだねるよりは、無為と知りつつ流言飛語を囀さえずる方がまだましだと、誰もが思っていたのだろう。

　この基地に配属されているパイロットは、予備役の者も含めほぼ全員が出揃っていた。足りない顔ぶれといえば、つい数十分前まで待機任務でここに詰めていたはずの数名である。緊急発進で飛び立っていった彼らが、いくら待てども帰還しないこともまた、皆の神経をささくれ立たせていた。

　結局——彼らを待ち惚ぼうけから解放したのは、けたたましく鳴り響くサイレンの絶叫だった。

『敵襲！　総員戦闘態勢！　これは訓練ではない！　繰り返す——』

　友軍が趨すう勢せいを立て直して反撃に移るより、この基地が標的になる方が、わずかばかり先行したのだ。

　ひとたび離陸してしまえば、そこにはいつもと変わらぬ空があるものと、そんな根拠のない期待をカールは最後まで捨てきれなかった。当然、そんな甘い見込みは見事に裏切られた。滑走路の先にあったのは慣れ親しんだ空ではなく、未だかつてカールが踏み込んだことのない、何か別の領域だった。

　なぜか確信に等しく理解できた——今夜の空は、かつて憧あこがれた楽園ではないと。むしろそれとは真逆の場所だと。

　冥めい府ふ……わけもなくそんな言葉が脳裏を過よぎる。

　闇に塗り込められた頭上は、初めはなんの変哲もない闇夜に見えた。だが基地から打ち上げられた照明弾が、その正体を暴き出す。分厚い雲を背景にして、不吉な影を落とす無数の機影。ヴィルドバッハの先せん遣けん隊だった。接触事故の危険よりも奇襲攻撃の利を取り、敢あえて無灯火のまま編隊飛行を敢行するという暴挙。それを支える覚悟とは、即ちシルヴァーナのパイロットに対する絶対的な殺意に外ほかならなかった。

敵編隊の中枢には、二隻の飛空艦が守られている。巨大なヘリウム気き嚢のうの下に抱え込まれた爆弾倉は、小都市ひとつを灰かい燼じんに帰すのに充分な破壊力を備えているはずだ。あの二隻が基地上空にまで達した時点で、シルヴァーナ軍の敗北は決定する。

『全機突貫！　蹴け散ちらせェ！』

隊長機の号令一下、シルヴァーナ側の迎撃機は隊列を組む暇いとますら惜しんで、先を争うようにヴィルドバッハの編隊へと突っ込んでいく。

堰せきを切ったかのように虚空へと撒まき散らされる曳えい光こう弾が、月も星もない闇夜を絢けん爛らんたる光で飾る。散開しつつ、飛空艦を狙うシルヴァーナ機に牙を剥むくヴィルドバッハの護衛機編隊。両軍の機体は交錯して入り乱れ、機銃の応酬を浴びせ合う。

カールにとっては初めての——それどころか、つい一時間前までは覚悟すらしていなかった実戦だった。死にたくない、その一心だけが脳裏を占め、それ以外の万事が意中になくなる。すると途端に、何を為なすべきかが天恵のように閃ひらめいた。

撃つのだ。カールを撃とうとした敵を撃つ。そのためにまずは誰がカールを狙っているのか見定める——

七時上方にいた。右も左も敵だらけの状況で、なぜその一機だけに注目できたのかは解らない。ともかくその翼の角度が、速度が、〝お前を殺す〟と告げていた。それが『表情』としてカールには読めた。

左九〇度のロールを加えつつ急上昇、敵の高度を追い抜いてから、自機の速度の減衰に乗じて一八〇度反転。鮮やかな斜め宙返りウィングオーバーにより、一瞬のうちに攻守が逆転する。不意打ちを期してカールを狙っていた敵機は、予期すらしなかったまさかの反撃機動で、逆に虚を突かれ反応が遅れた。直後、カールが操縦桿かんのトリガーを引く。その意味について考える暇すらなく、そこに存在することすら忘れていた引き金を——引く。

敵機の尾翼が消し飛び、次の瞬間には独こ楽まのように旋転しながら暗い大地へと落下していった。あまりの呆あっ気けなさに、むしろ

撃ったカールの方が唖ぁ然ぜんとなる。何が起こったのか、理解することを思考が拒む。それよりまず優先すべき事柄として、二時下方にいる敵の背後ががら空きだと本能が囁ささやく。

夢を見ているかのようだった。まるで誰かが頭の後ろで指図しているかのように、考えるより先に判断が決まる。

まるで忘れていた待ち合わせの場所に、ただの偶然で通りがかったかのような、薄気味悪いほどの調和を感じだ。其そ処こに待ち構えていた何かが囁く——ようこそ。オマエを待っていた。オマエの統すべるべき世界がここにある、と。

気がつけば三機目の敵が照準機の向こうで四散していた。今や空域にいるすべての敵機がカール一人を狙っていた。だがそれすらも二の次で構わない。なぜならカールのすぐ目の前に、飛空艦の一隻が鈍重な巨体をさらけ出していたからだ。期せずして彼はヴィルドバッハ護衛機の壁をことごとく蹴け散ちらし、突破していたのである。

今カールが翼下に吊ったロケットランチャーを全弾発射したとしても、それに対処できる敵、阻止できる敵は一機もいない。そう閃ひらめいたときにはもう、彼の指は雷撃ボタンを押していた。夜空を紅ぐ蓮れんに貫いて六条の火ひ箭やが迸ほとばしり、その巨きょ躯くに不釣り合いなほど薄い船体を引き裂き、ヘリウムの気き嚢のうを破裂させる。

うち一発のロケット弾は、気嚢を破くだけで飽きたらず、さらに爆弾倉にまで到達してから炸さく裂れつした。

誘爆により花開いた灼しゃく熱ねつの炎が、入道雲のように夜空にそそり立ち、真昼も同然に辺り一面を照らし出す。まさしく地獄の景観だった。

カールはただ呆ぼう然ぜんとその惨状を眺めながら、それをもたらしたのが外ほかならぬ自分であるという事実を、いつまでも持て余していた。

緒戦におけるシルヴァーナ側の被害は甚じん大だいだった。死傷者の総数は三〇〇〇人を超え、五つの要害と二つの都市が陥落。瓦が解かい

も同然の防衛戦を立て直すために、シルヴァーナはミルヒ河以東にまで大幅な撤退を余儀なくされた。

悲観的な空気が蔓まん延えんする中、わずかなりとも希望をもたらす朗報は、諸もろ手てを挙げて歓迎された。たとえば初うい陣じんにおいて戦闘機三機、飛空艦一隻という驚異的な撃墜数を記録した若き伍ご長ちょうの存在などは、その最たるものといえた。

天運に恵まれた幸運児、カール・シュニッツの奇跡は、シルヴァーナが未だ神に見放されていない祝福の証あかしとして喧けん伝でんされた。その風評は、彼が引き続き戦果を上げるにつれ、不屈の愛国心による偉業の一例と評されるようになり、やがて撃墜数が二桁けたを超えるに至って、救国の英雄の到来を告げる熱狂へと変わっていった。

実際のところ、たしかにカールの才能は開戦と同時に開花したと言っていい。それ以前の彼は、ただ積極性に富むというだけの、程々に秀でたパイロットでしかなかった。それが空戦を経験した途端、天性のものとしか思えない異常なまでの戦術眼で敵機の意図や隙すきを見極め、常に勝利と生還を勝ち取るようになった。そうやって生命の遣り取りを何度も繰り返すうちに、カールの操縦技術は着実に磨きがかかり、それがさらに彼の撃墜スコアを伸ばしていく要因になった。

確かにそれは類たぐい希まれな、一種異様とさえいえる天分だった。きっとカールの中には『空で狩猟により生存する』感性――言うなれば『翼ある肉食獣』としての本能が備わっていたのだろう。それが手段としての技術を貪どん欲よくに吸収し、凄すご腕うでの操縦能力へと昇華されていったのだ。

だがそんな成長と変へん貌ぼうを理解できず、誰よりも戸惑っていたのは、外ほかでもないカール自身であった。

もう幾度目になるのかさえ知れない、死の空。

幾多の敵の屍しかばねと、さほど数としては変わらない味方の屍を踏み越えて戻る帰路。今日も無傷で済んだのはゲプハルトとカールの二機だけだった。もう一機、辛うじて撃墜を免まぬがれたゲオルグの機体

は被弾している。それも、相当に酷ひどい。罅ひび割われで白く曇った風防キャノピーは、敵弾がコックピットに飛び込んだことを示している。
「ゲオルグ！　速度が落ちてるぞ！　立て直せ！」
　じわじわと編隊から遅れつつあるゲオルグ機に向けて、ゲプハルトは無線で叱しっ咤たする。ややあって届いた返信の声は、血けっ痰たんの絡んだ苦しげな呻うめきだった。
『速度……はは、速度計が血ち塗まみれで読めねえよ……畜生、信じられるか？　これ、ぜんぶ俺の血なんだぜ……』
　喘ぜん鳴めいに途切れがちな声を聞いて、ゲプハルトの頭の中の、感情と切り離した一番冷酷な部分が判断する。——こいつは、もう駄目だ。
『畜生、死にたくねぇ……俺はまだ……カール、おいッ、カール！』
　擦かすれた声をやおら荒らげて、ゲオルグは沈黙を守るもう一機に呼びかける。まずい、と思ったゲプハルトだったが、今さら止める手立てもない。
『テメェ、なんであのとき援護を……俺が撃たれてるの見えてただろ……なんで助けてくれなかった!?』
　カール機からの応答は、怯おびえきった、しどろもどろの声だった。
『俺は——あんたなら避よけられるだろうって——』
『ケッ、ふざけるな……俺たちゃテメェとは違うんだ……六時を取られたら終わる……死んじまうんだよ！』
　ゲオルグの糾弾は、とても味方に向けたものとは思えない、怨えん嗟さと慟どう哭こくに満ちていた。
『畜生……テメェだけ、なんで墜ちない……なんで殺すばかりで殺されねぇんだ!?　テメェは……なんなんだ？　本当に、同じ……人間なのか？』
　味方という言葉の定義が『生死を共にする仲間』であるならば、ゲオルグにとってカールは既に味方ですらないのだろう。捉とらえよう

によっては敵よりもなお忌まわしい、容認しがたい〝何か〟なのだ。
『不公平だろ、なぁ……俺だって、まだ……畜生……死にたく、ない……アンナ……』
　ぐらりとゲオルグ機が姿勢を崩し、そのまま錐きり揉もみに陥って落下していく。
「ゲオルグ!?　おい、ゲオルグ！」
　あとはゲプハルトがいくら呼びかけようと、無線機には虚むなしい空電音が返ってくるばかりだった。
　こうして、開戦前から同じ基地で飛んできた仲間は、カールとゲプハルトの二人だけになった。
　次に墜おちるとすれば、俺だろう——そうゲプハルトは乾いた達観で認める。カールが先に墜ちることは決してない。それどころか未来永えい劫ごう、あの男は飛び続けるに違いない。そう確信させるほどに、彼の強さは段違いだった。
　まるで雀すずめ同士の喧けん嘩かに一羽だけ鷹たかが紛れ込んでいるようなものだ。飛び方が違う。精度が違う。同型の機体に乗っているとは思えないほど、信じがたい機動をしてのける。
　ゲプハルト自身、一二機を撃墜したエースパイロットだが、カールの隣にいたのではそんな功績などお笑い種ぐさである。そもそも毎回カールが敵機の編隊を恐慌に陥れている間に、漁夫の利で横合いからスコアを掠かすめ取ってきたようなものなのだ。
　だが、カールより長生きできないと解りきっているのなら——なおのこと死ぬわけにはいかないと、そうゲプハルトは決意を新たにする。
　あの男を独り残して逝いくわけにはいかない。そんな孤独に耐えられるほど、カールは剽ひょう悍かんな男ではない。英雄だ、軍神だなどと祭り上げられてはいるが、その実体は純朴で温和な、未だに子供じみた甘さを残す男なのだ。それを理解しているのはゲプハルト一人しかいないだろう。そう思えばこそ、最後まで隣に居続けてやることだけが、友情に賭けて譲れない精一杯の意地だった。

カールが拳銃自殺を図ったのは、その夜のことだった。

ゲプハルトが奪い取ろうとした拳銃を、カールは手放すまいとして必死に抵抗した。そのあまりの力強さに、ゲプハルト自身が驚いた。体格では自分の方が優位な筈はずなのに、なぜかカールの手は銃じゅう把はを掴つかんだきりびくともしない。

仕方なく、銃口がゲプハルトの懐を向くように仕向けて押さえ込む。ここで暴発すれば死ぬのは友人の方だと理解した途端、カールの手から力が抜けた。その隙すきを逃のがさず、銃を取り上げる。するとカールは糸が切れた人形のように座り込み、動かなくなった。

幸い、誰にも見られてはいない。虫の知らせで心配になったゲプハルトが、捜し求めたカールの姿を見つけたとき、彼は無人の格納庫の片隅で、銃口を顎あごの下に押し当てているところだった。あと数秒でも遅かったら、手遅れになっていたかもしれない。

奪った銃の遊底を引くと、はたして薬室には本当に実包が装そう填てんしてあった。冗談でもなんでもなく、カールは本気で自殺するつもりでいたのだ。ゲプハルトの胸に、やるせない憤いきどおりが溢あふれかえる。狂言ならばそれはそれで怒りもしただろうが、こんなにも苦くて後味の悪い悔しさを味わうことはなかっただろう。

「……敵が撃っても当たらん弾を、自分で自分にブチ込むつもりだったのか？　お前、なんのために今日まで生き残ってきた⁉」

ゲプハルトの罵ば声せいなどまるで聞こえていないかのように、カールは虚うつろな表情でかぶりを振る。

「あれは……俺じゃない」

「なんだと？」

「飛んでるのも、戦ってるのも、俺じゃない……違う誰かなんです。だって、俺なんかに……あんな真似、できるわけがない……そうでしょ？」

カールは一目でそれと解るほど明らかに、心神喪失に陥っていた。口ずさむ言葉は譫うわ言ごとのようにぎこちなく、引き攣つった口元は

笑っているようにさえ見える。

「ねえ中尉、俺はいったい誰なんですか？」

　泣き笑いに顔を歪ゆがめながら、カールはゲプハルトに詰め寄る。

「俺じゃない俺が、殺しまくって、仲間さえ放ったらかして、敵を墜とすことしか頭になくなって……ワケわかんないんですよ……俺はいったいどうなっちまったんですか!?」

　ゲプハルトは出会ったばかりの頃のカールを思い出す。ただ空を飛びたいだけだと笑っていた呑気な若者の笑顔を。新型機を与えられてはしゃぎながら、龍と飛び比べをしてみたいなどと放言していたお調子者を。

　カールはあの頃と何も変わっていなかった。変わらぬままに手を血に染めて、撃墜王の玉座に座らされてきたのだ。何一つ受け止める覚悟すらないままに。

「まるで……今日まで泣いたり笑ったりしてきたこと全部が、こうして人を殺しまくるための前振りだったみたいに思えてくるんです。……こんな筈はずじゃあ……俺は、こんなところに来る筈じゃなかったのに……」

「……」

　ゲプハルトには、かけてやれる言葉がなかった。それでもカールが限界なのは理解できた。おそらく彼はもう二度と飛べないだろう。立ち上がることさえ出来ないかもしれない。今すぐ戦火のない土地にでも逃がしてやらない限り、この男は廃人になるだろう。

「中尉……俺は何を楽しいと思ってたんですか？　何を欲しがってたんですか？　今までの俺はぜんぶ嘘っぱちですか？　殺し屋が居眠りしてる間に見てた夢だったんですか？　ねぇ、教えてくださいよ……中尉ッ！」

　或あるいは――真にカールを救済しうるのは、ただ一発の銃弾だけなのかもしれない。彼自身に代わって脳天にそれを撃ち込んでやるのが、精一杯の慈悲なのかもしれない。明日をも知れぬ戦場で、自我を引き裂かれる苦痛を長引かせるよりも、それが本当の優しさかもしれない。

　だが、ゲプハルトは軍人だった。たとえ戦争を忌避していても、いざ戦いが始まればそこに命を賭とすのが務めだった。かつて奪われた

命の痛み、やがて奪われゆく命の苦さを、誰よりも重く受け止め、決して無為にしないこと——それがゲプハルトが自らに課す生き様のすべてであった。

　故ゆえに、結論はひとつだった。

　ここでカール・シュニッツを失うわけにはいかない。英雄は、奪った命の意味を背負わねばならない。その血でもって明日の同胞の命を購あがなわねばならない。

「そう——何もかも、嘘だ」

　手の中の銃を撃つよりも、なお残酷な決意を込めて、ゲプハルトはそう断言した。

「お前はシルヴァーナの救世主だ。ヴィルドバッハ人の命を刈り取る死神だ。不思議なことなど何一つない。過去のお前は幻なんだ」

「……」

　涙に濡ぬれたカールの瞳から、恐怖と錯乱が消え去った。そしてそこに何もかも消失した虚無だけが残った。今まさに親友の心が、二度と元に戻らぬほど粉々に砕け散り、ヒトとしての在り方を喪うしなった——それをゲプハルトはまざまざと実感した。

「だから、カール……もうお前は悩まなくていい。考えなくていい。かつてヒトであったことなど忘れていい。

　お前は神の名の許もとに鋳ちゅうじられた鉄だ。罪などない。殺し尽くせ、カール。祖国はそのためにお前を産んだんだ」

　声もなく、はらはらとカールが涙を落とす。それはまだ彼が人として流し残していた最後の感情だった。

　壊れたように泣き続けるカールの肩を、ゲプハルトは固く抱きしめた。彼は今、銃弾ではなく言葉でもって一人の男を破壊した。己の業で喪われたモノの意味を背負うのは、軍人として当然の義務だ。

　この男と共に、我が身もまた人としての幸を捨てよう——そうゲプハルトは心に誓った。この過酷なる時代が求めるままに、己もすべてを擲なげうって祖国に殉じよう、と。

　首相官邸の前庭は、これまで数々の国こく賓ひん歓迎や受勲式が執り行われてきた、シルヴァーナ共和国の威信を託された檜ひのき舞台ともいえる場所である。
　今その名誉ある芝生の上に、三六人の空軍兵士が整列し、異例の式典に臨んでいた。演壇に立つのは司令官でも将軍でもなく、外ほかならぬ首相その人である。
「今ここに結成されたシルヴァーナ空軍王冠中隊クローネンシユタツフエルは、各方面の部隊で突出した撃墜数を記録したエースのみによって編成された、空軍初の戦略特殊部隊であり、正真正銘のエリート部隊である。貴官らはこの戦況を打破する鍵かぎとなることを期待され誕生した集団であり、明日のシルヴァーナの命運は、ひとしく諸君ら一人一人の双肩にかかっていると言っていい……」
　訓令を拝聴する士官たちは、みな意匠も新たに誂あつらえられた青灰色の軍服に身を包み、左袖には王冠のエンブレムを縫ぬい取った腕章を留めている。
　緒戦の大惨敗による失地を未だに挽ばん回かいできないまま戦況が膠こう着ちゃくしつつある現状、政府も軍も、少しでも民意と兵の士気を鼓舞できるイベントを切実に必要としていた。
　エースパイロットのみを集めた精鋭部隊という発想も、当初は戦意を昂こう揚ようさせる偶像としての英雄を提示する意図からきたものだ。首相官邸の前庭において行われた異例の結成式典も、群れ集った報道陣のカメラを意識してのことである。熟練兵士の一極集中投入が、結果的にもたらした覿てき面めんの戦果によって世間が瞠どう目もくするのは、まだ先のことだった。
　召集された選抜隊員の中には、カール・シュニッツとゲプハルト・ミュラーの姿もあった。新調されたカールの軍服には、少尉の襟えり章しょうが縫いつけられている。士官学校未卒のために、下士官止まりで昇進が見送られていたカールも、今後は特例待遇によって戦果に見

合うだけの階級章を手に入れられるようになるのだ。
　だがそんな名誉を悦とする表情は、彼の面おも持もちからは窺うかがえなかった。喜怒哀楽はおろか覇気さえもない、あらゆる意志の光が失せた虚うつろな眼まな差ざしは、ただ目を開けているというだけのデスマスクを思わせる。こんな人物が操縦桿かんを握っただけで百機あまりの敵機を屠ほふってきたなどと、一体誰が想像できようか。
　カールの視線は演壇で弁を振るう首相ではなく、その傍かたわらの広場に公開展示されている新型戦闘機に向けられていた。
　ギュンター社製、Ｇｕ１９０征空戦闘機。王冠中隊クローネンシユタツフエルへの配備を前提として新たに設計された特殊仕様機である。現行主力機であるＨａ１１２と比べ、加速性で二割増、格闘性能で三割増という驚異的な高性能を謳うたっているが、その対価として防御力が犠牲となっている。要求性能を満たすためには装甲板を省略してまで軽量化を図るしかなかったのだろう。結局、わずかな被弾ですら命取りになりかねない脆ぜい弱じゃくな機体となったものの、『撃たれる前に撃ち落とせば良い』という、熟練パイロットにしか要求し得ない運用方針によって採用が決まったのだそうだ。
　編成第一期の隊員は、過去の戦績順に機体番号が割り振られる取り決めになっていたのだが、カールの一二八機というスコアには誰一人として及ばず、さすがに少尉を筆頭に据えるわけにもいかないという配慮から、カールより年長の佐官五名が一番機から五番機までを受領し、カールには六番機が与えられることとなった。
『王冠六号クローネゼクス』――それが今日からの彼の呼称であった。人であることを辞めた身には、カール・シュニッツなどという人名で呼ばれるよりも肌に馴な染じむ響きであった。

　ヴァルハラ半島の空に、今日もエンジンの唸うなりと機銃の怒号が鳴り響く。
　シルヴァーナのＨａ１１２に対するのは、ヴィルドバッハが誇る主力戦闘機メルダース１０９式。速度でこそハフナーに分ぶがあるが、

旋回性能と充実した武装はメルダースに軍配が上がる。
　かねてからの軍拡政策、総動員体制により賄まかなった物量と、緒戦の圧勝に鼓舞された士気は、依然ヴィルドバッハ軍の優位を支えていた。爆撃飛空艦の進路を確保するべく、防戦一方のシルヴァーナ機を蹴け散ちらしていくパイロットたちの心境は、さながら鴨撃ちの猟師の如くである。
　だが遊び好きな勝利の女神は、決して一方に操みさおを捧げない。
　絶対防衛戦を前にして撤退する手負いのＨａ１１２編隊と入れ替わるようにして、シルヴァーナ側の増援部隊が東の空から飛来する。その尾翼を飾る青い王冠のエンブレムは、ヴィルドバッハ軍パイロットの悪夢の具現だ。
「くそ……また王冠中隊クローネンシユタツフエルか！」
　メルダース編隊を統すべる小隊長が、舌打ちとともに部下に檄げきを飛ばす。
「怯ひるむな！　数ではこちらが優勢だ。押し切れる……奴らの六番機を落とせば公国十字勲章だぞ！」
　報ほう仇きゅうの怒りに燃えて、二番、七番、八番、一一番のメルダース四機が『王冠六号クローネゼクス』に襲いかかる。数多あまたの同胞を喰らった悪魔の化身に、今日こそが引導を渡す日だと心に誓って――
　王冠六号クローネゼクスは、まるで恐れをなしたかのようにふらふらと高度を上げ、上空に逃のがれようとしたかに見えたが、勢い込んだ先頭の二番機が下から突き上げようとした途端、いきなり落雷の如ごとき背面降下でその死角へと回り込み、気がつけば最後尾で出遅れていた八番機の背後に着いていた。尾翼をごっそりと打ち砕かれた後も、八番機は何が起こったのかさえ理解できていなかっただろう。
「野郎ッ！」
　転進して敵に向き直ろうとした二番機も、それを見越していたかのようなリードターンによって王冠六号クローネゼクスの射線上に捕らわれる。咄とっ嗟さの水平ジンギングで躱かわそうとするが間に合わない。

二機のメルダースが血祭りに上げられるまで、その間――わずか一〇秒。
　味方の危機を悟った七番機が、さらに乱戦に割り込んだ。だが隙すきを突いたつもりのその奇襲さえも完全に見抜かれていたのか、申し合わせたかのようなタイミングの急減速であえなくオーバーシュートの憂うき目に遭い、易やす々やすと背後を取られる。なまじ仲間を庇かばったが故ゆえの無惨な末路であった。機関砲弾の雨は機体背面から風防キャノピーまでを一掃し、パイロットを即死に至らしめる。
　後に残った一一番機は、半狂乱になりながら垂直旋回を繰り返し、どうにかして相手の背後を取ろうとする。が、王冠六号クローネゼクスもまた応じて斜め宙返りウィングオーバーを連続。両者はローリングシザーズを展開しながら徐々に高度を落としていく。
「ひぃっ……ひいいッ！」
　次第次第に内角へと斬きり込まれ、追い詰められていくメルダース。一片たりとも無駄のない、悪魔じみた正確さで反復される王冠六号クローネゼクスの旋回運動は、まさに弱者の命脈を切り刻む『鋏はさみ』であった。
　ついに地表すれすれまで追い落とされ、逃げ場を失った一一番機は、最後にミスを誘発したか、或あるいは銃弾で抉えぐられる恐怖に耐えかねたか、自ら大地に激突することで末路を遂げた。
　都合四機のメルダースが異国の地に屍しかばねを晒さらすに至って、上空でもまた大局は決していた。ヴィルドバッハ護衛機たちの奮闘虚むなしく、立て続けの火か箭せん雷撃を浴びた飛空艦が、火の玉となって轟ごう沈ちんしていく様を、カールはさしたる感慨もなく傍観する。
『任務完了――王冠中隊クローネンシユタツフエル全機、撤収せよ』
　編隊長の指示に従って、上昇し友軍機と合流するカール。今回もまた鮮烈な戦果を挙げたかに見える王冠中隊クローネンシユタツフエルであったが、再集結したその数は四つの機影を欠いていた。あくまで乗員の生命を省かえりみないＧｕ１９０の軽量設計が、またしても勝利の対価を取り立てていったのだ。

何一つ目新しいこともない、それは連日と変わらぬ日常だった。空に飛び立ち、敵を殺し、減った仲間の数を数える――その繰り返し。欠員はすぐさま補充され、そして明日もまたヴィルドバッハは攻めてくるのだろう。

こんな毎日がいつまで続くのか、カールには見当もつかなかった。或あるいは永遠に繰り返されるのだと言われても、疑問など抱かなかっただろう。すべてのヴィルドバッハ人を殺し尽くすか、もしくはシルヴァーナ人が死に絶えるまで、こうして空を飛び続けろと命じられるなら、彼は悄しょう々しょうとそれに従うまでだ。

慨嘆も、疑問も、ありはしなかった。彼はただ、死をもたらすだけの罪なき鉄だった。

休戦を告げる号外が市街に撒まき散らされたのは、翌春早々のことだった。

戦局に大きな変化があったわけではなく、むしろ一進一退を繰り返す泥沼化の様相を呈していただけに、前線にいる将兵であればあるほど、それは青天の霹へき靂れきたる報しらせであった。

もちろん為政者たちが非を悔いたわけでも、密ひそかなる和平への取り組みが実を結んだわけでもない。とどのつまりは双方が同時に根負けしたというだけのことだった。このまま国を挙げて戦時体制を維持すれば内政が破は綻たんするというぎりぎりのラインまで、両国が奇くしくもほぼ前後して踏み込んだのである。

世間は歓喜や祝福に沸き立ったわけでもなく、どちらかといえば遣り場のない怒りより、安あん堵どの方がやや勝まさった、というだけの失意じみた反応で、この唐突な平和を迎え入れた。最終的に敵国の侵攻を押し返したシルヴァーナだったが、結局のところミルヒ河の奪還までには至らず、両国間の遺恨と確執は、ほぼそのまま将来に持ち越されることになった。

休戦の報を告げられても、カールはなんの感慨も得られなかった。

　達成感はおろか安堵すら感じない。さりとて、活躍の場を奪われたからといって悔しさや寂しさを感じるわけでもない。

　そもそも彼が今日まで墜おちることなく飛んでいられたのは、何かを感じたり、考えたりすることを辞めたからなのだ。そして彼がそうやって放棄した諸もろ々もろは、一いっ旦たん手放したが最後、もう二度と取り戻すことは叶かなわないものだった。

　最後に涙を流した夜から、もうどれほど経っただろうか。あのとき以来、彼は生ける屍しかばねであった。そんな屍しかばねでさえも皆が必要としていた日々が、終わりを告げた。ただ空っぽな無痛感のままに、カールは人生の終結を受け入れた。

　宿舎の自室で一人になったカールは、目障りな廃品を屑くず籠かごに放り込む程度の気分で、拳銃の銃口を頭に押し当ててみた。が、そんな行いすら虚むなしくなった。確かに生きる理由もないが、かといって死ぬほどの理由もありはしない。こんな自分を始末するのには、銃ひき爪がねを引くことさえも無駄な徒労としか思えなかった。

　ただ、墜おちよう――そう決めた。操縦桿かんにもスロットルにも手を触れず、ひたすらに自由落下の法則に身を任せる、あの感覚で墜ちていこう、と。

　まずは、この場を去る必要がある。軍に留まる限り、カールは『英雄』という名のモビールとして天井から宙吊りにされたままだろう。その吊り糸を断ち切らなければならない。

　どうすれば軍がカールを見捨てるように仕向けることができるだろうか……しばらく思案した後、至極簡単な手口を思いついたカールは、さっそくその作業を実行に移しはじめた。

「除隊……ですって？」

　基地司令官から告げられた信じがたい報しらせに、ゲプハルトは愕がく然ぜんとなった。

「そうだ。カール・シュニッツ少佐は本日付けで軍務を解かれた。本人たっての希望だ」

「そんな……」
　混乱のあまり、二の句が継げない。あのカールが軍を捨てて、一体どうしようというのか。
　戦闘機三五二機、飛空艦一二隻を撃墜。被撃墜なし——空前の偉業を遂げて戦役を生き延びたカールは、押しも押されもせぬ国家の英雄だった。戦争が終わったからといって彼の役目がなくなるわけではない。否、尚のこと重要度が増したと言ってもいい。疲ひ弊へいした祖国を再建していくためには、その旗印としての偶像が不可欠なのだ。
　己の戦友が、生ける伝説として明日のシルヴァーナ空軍を導いていく姿を夢想するたび、ゲプハルトは感無量の誇りに胸を満たされてきた。むしろ死の淵ふちから戻った今だからこそ、カールはようやく本当の意味での晴れ舞台に立てる筈はずだったのだ。
「なぜ……なぜ許可したのですか⁉　我が軍には彼が必要なはずです！」
「……君はあの男の本質をまるで理解しとらんようだな、ゲプハルト中佐」
　やや辟へき易えきした口調で言いながら、司令官はデスクの上に薄汚れた靴箱を置く。
「奴の置き土産だ。開けて見たまえ」
　訝いぶかりつつ箱を取ったゲプハルトは、中に詰まっている鉄屑の山に目を見開いた。
　すべて粉々に砕かれた星の破片だった。輪郭を失ってなお、刻み込まれた精せい緻ちな彫刻のせいで、もとの姿は概おおむね察しがつく。空軍殊勲章、戦功十字章、共和国功労勲章……明らかに青色特功章のものと解る七しっ宝ぽう焼やきの破片もあった。すべてカールの武勲を讃たたえて戦中に授与されたものだ。
「除隊嘆願書と一緒に寄越しおったのが、それだ。……この先、奴を式典に参加させようにも、胸に飾らせる物が何もない。第一、こんな無法をしでかす男を人前に立たせられるか？　どんな失言をやらかすかもしれん。そうなったら責任を問われるのはこの私だ」

「カール……どうして……」
　悲嘆に暮れるゲプハルトの姿に、司令官も哀れをもよおしたのか、声を和らげて続けた。
「あの男については忘れろ、中佐。確かに戦死は免れたようだが、代わりに頭が壊れおったのだ。戦争ではよくあることだ」

4

　軍を捨てたカールは、南部の山陰にひっそりと佇たたずむ湖こ畔はんの山荘で、整備工としての職を得た。人目から姿を隠したかったカールにとっては、あらゆる意味で好条件の人生がそこにあった。
　山荘の所有者はリフテン公の遠い血族に当たる富豪で、戦前・戦中から親ヴィルドバッハ派のロビー活動を支援してきた人物である。もちろんカールのようなヴァルハラ戦役の英雄を快く思う道理などないのだが、かつて『王冠六号クローネゼクス』とまで謳うたわれた男を今は下男も同然に傅かしずかせているという構図は、それなりに歪ゆがんだ方向性で自尊心をくすぐられるものだったのだろう。
　山荘はオーナーの知人である金持ちや貴族を相手に内々の社交場として開放されており、陸路での到来が極端に不便なため、しばしば湖に離着陸できる水上機が利用された。オーナーの所有機や来訪者の自家用機をメンテナンスするために、住み込みの整備士は必要だった。
　給金はないも同然、実質的な奉仕の対価は賄まかない飯と寝床だけのようなものだったが、カールもそれ以上は要求せず、世間の好奇の眼まな差ざしから身を隠して暮らせるならそれだけで充分満足だった。陸の孤島も同然の私有地となれば、厚かましい取材を試みる記者たちも近寄りようがない。
　ただ従順でありさえすれば、身み嗜だしなみや素行についてなんら口うるさい注文をされないことも、カールには幸いだった。彼が見るからにうらぶれた姿で、無教養も丸出しの惨めな使用人として振る舞えば、かつての英雄でさえも実のところは愚かな戦争の犠牲者でしかな

いという実例として、オーナーはゲスト達に鹿しか爪つめらしい説法をして悦に入ることができたのだ。

　季節は、穏やかに過ぎていった。

　かつての銃火と血に彩られた毎日に比べれば、まるで時が止まっているかのような日々だった。

　たまに水上機の面倒を見るだけの務めは、仕事と呼ぶのも烏ぉ滸こがましいほど簡単で暇ひまなものだ。雇い主や他の使用人たちへの応答は、愛想笑いと相あい槌づちだけで事足りた。初めのうちは山荘への来訪者から、興味本位に問い質ただされることもしばしばあったが、不ぶ躾しつけな振る舞いは雇用者の許可するところだったので、遠慮なく無視を通した。そうしてカールは、当たり前の人間を装い会話する責務からも解放され、またひとつ身軽になった。

　望んだとおり、自由落下で墜ぉちるに身を任せたカールだったが、その結果解ったことは、人間、ただ墜ちただけで死ねるものでもないという皮肉であった。

　命を奪われるほどの勢いで大地に叩きつけられるには、やはりそれ相応の重さが必要なのだ。その点、人として最低限の意地すら背負うことを辞めたカールの存在は、もはや綿毛も同然に軽かった。

　自分が、もうそれ以上は墜ちようがないほどの最底辺にまで落着していることは解っていたが、ただそれだけのことで死ぬわけでもない。本能の赴おもむくままに苦痛を避けて通るなら、結局のところ空腹になれば餌えさを食い、凍えれば毛布にくるまり暖を取ることになる。それが叶かなう環境にいる限り、生はただ延々と無為に続くだけだ。つまりは野の獣と同じことだった。

　時折、湖こ畔はんから静かな水面みなもを眺め、そこに身を沈める空想を弄もてあそぶこともあった。だが死に急ぐことの億ぉっ劫くぅさは、生きることの億劫さよりも、常にほんの少しだけ勝まさっていた。最も安易で面倒のない選択として、カールはただ食事と排はい泄せつを繰り返しながら、過ぎていく時間を素通りさせることを選んだ。

　ただ一度だけ、明け方の湖畔に、一頭の霞龍ネーベルドラッヘを見かけたことがあった。龍は濃い朝あさ靄もやを掻かき乱しながら、数回、悠々と湖の上を巡り、それから高く嘶いななないて北の空へと消えていった。そのときカールは、彼自身にも説明のつかない理解不能な感情に駆られ、大声で喚わめきながら走り出したいという衝動に囚とらわれたが、結局、ただ呆ぼう然ぜんと桟さん橋ばしに立ち、途方に暮れるだけに終わった。ふと気がついて頬ほおに触れると、なぜか涙に濡ぬれていた。……山荘での生活で、たった一度だけ、それが心の平静を乱された体験だった。

「お若いの、ちょっといいかな？」
　ある日、カールが客人の飛行機に給油をしていると、格納庫に入ってきた一人の老紳士が声をかけてきた。
　常連のゲストではない——と断言するには、人の顔を憶えようとしなくなって久しいカールだったが、その老人に限って言えば、おそらくこの山荘では初見のはずだった。それというのも、何な故ぜか記憶の何ど処こかにひっかかる風ふう貌ぼうだったのだ。たぶん戦争より以前……今となってはまるで前世の記憶も同然である。
　そういえば、いま点検させられている水上機にも見覚えがない。昨日の朝から桟さん橋ばしに繋けい留りゅうされていた機体なので、誰の持ち物なのか解らないままにルーチンワークの整備に当たっていたのだが、双方考え合わせれば、おそらくはこの老人が機体の主と見て間違いない。
　滞在を切り上げるつもりなのか、老人はすっかり旅支度を調ととのえていた。革の外がい套とうに飛行帽まで被かぶっているところを見ると、どうやら年甲が斐いもなく自力で操縦してきたらしい。確かに飛行機を私有しているような金持ちには、そういう趣味人も珍しくはないのだが。
「儂わしはな、グスタフ・ヴァイニンガーというんじゃが——」
　老人がそう名乗ったことで、カールは相手の素性と、何ど処こでそ

の顔を見かけたのかに合点がいった。

「――ちと急ぎの用事で、今すぐ戻らなきゃならなくなっての。ところが困ったことに今朝方、寝室のドアに指を挟んじまってのう」

　ほれ、とヴァイニンガー老人は、大おお袈げ裟さなほどに分厚く包帯を巻かれた右手を示す。たしかに怪け我がの具合はどうあれ、あの包帯では操縦桿かんを握るのは難しかろう。

「ここのお抱えのパイロットに送ってもらおうかとも考えたんじゃが、生あい憎にくと他の客の送迎に出向いとるそうでな……そこで相談なんじゃが、なんでもお前さんも飛行機の操縦が出来ると聞いてな」

　普段なら例外なく無視を決め込むところだが、相手がグスタフ・ヴァイニンガーとなると、さしものカールも受け答えをする程度の敬意は払わざるを得ない。ヴァイニンガー自身に身の覚えはないだろうが、カールにとってはある種の『恩人』とも言うべき人物なのだ。

「……俺は、もう、飛ばない。悪いが、他を当たってくれ」
　およそ何年ぶりかと思うほど久しく言葉らしい言葉を口にしたカールだったが、それがどれほどの譲歩だったのか老人は気付く様子もなく、まるで市場で値切りに挑むかのように屈託ない笑顔で食い下がる。
「まぁまぁそう言わんでくれんか。手当ては弾む。ブロームの港まで、ほんの一時間程度で済むフライトじゃ」
「……」
「なぁ頼む。年寄りを助けると思って、な？」
　迂ぅ闊かっに応答したばかりに、これか――そうカールは、久方ぶりに味わう対人交渉の煩わずらわしさに、さっそく辟へき易えきしていた。いくら拒絶しようとも、この老人はこちらが根負けするまで拝み倒す気でいるのだろう。
「……操縦なんて、もう何年もやってない。墜ぉちても知らんが、それでいいなら……」
「あぁ頼むぜひ頼む！　そうと決まればさっそく出発じゃ！」
「……俺、ゴーグルも持ってないが……」
「儂わしの予備がある！　さぁ使ってくれ」
「……」
　どうにも担がれた気がしてならないカールだったが、ヴァイニンガー老人はさっそく後部席に乗り込んで離水に備える構えである。仕方なくカールは、飛行服の代用になりそうな防寒着を探しに、いったん自室へと引き返した。

　カールがヴァイニンガー老人を邪険に出来なかった理由はひとつ。その名を現代航空史を支える偉人の一人として胸に刻んでいたからである。ハフナー・インダストリィの技術主任グスタフ・ヴァイニンガーが航空機産業にもたらした貢献はとてつもなく大きい。とりわけ傑作機Ｈａ１１２の中核をなすＶａ２１０エンジンの開発は、数ある業績の中でも最高のものと言ってよかった。あの高性能エンジンがも

たらす類たぐい希まれな上昇性能がなければ、カールは初うい陣じんで命を落としていたかもしれない。

　ヴァイニンガー私有の水上機は、旧式のＨａ43複葉機にフロートを追加した手製のカスタム機だった。複葉機など操縦するのはカールにとって訓練学校以来だったが、その不慣れな感覚がむしろ気持ちの上では幸いした。これがもしＧｕ１９０のように挙動のすべてを知り尽くした戦闘機であったなら、カールは断固として搭乗を拒否しただろう。

　操縦の感覚は、思い出すまでもなく身体が憶えていた。始動の前に操作系のレイアウトの差異を確認したら、あとは自分でも驚くほどスムーズに機体を離水させ、巡航高度で安定させることができた。

　もちろん戦闘機に比べれば遙はるかに鈍足だが、開放式の操縦席で風を浴びていると、空を飛んでいるという実感がしみじみと湧き上がってくる。懐かしさと同時に、死に別れた恋人を偲しのぶかのようなやるせない痛みを——二度と取り戻せない幸福への惜別を、感じた。

「見事なもんじゃな……まるでブランクを感じさせない操縦じゃ」

　後席のヴァイニンガーが、プロペラの唸うなりに負けじと腹から声を出して、そう賛辞をよこす。なるほどパイロットの操縦ぶりには一家言あるらしい。

「だといいんだがな……離水はできたが、着水の仕方まで憶えてるとは限らんぜ」

「いやいや、生いけ簀すに閉じ込められたからといって、魚が泳ぎ方を忘れるわけでもなかろうて。まさに水を得た何とやらじゃ。……あんたは空に戻るべきなんじゃよ。カール・シュニッツ」

　相手に素性が割れていると解った途端、カールは警戒心の塊になって口を噤つぐんだ。

「なぜ飛ぶのを辞めなすった？」

「……」

「いつまでもそうやって、あんな山奥に自分を埋葬して生きていくつもりかね？」

　ヴァイニンガー博士の語調は柔らかく、詰問には程遠かったが、ブローム港までこうして質問攻めにあいながら飛ばなければならないとなると、とても黙殺だけで通せそうにはなかった。

「……そんな説法をするために、俺を連れ出したのか？」

「ああ。ただ口説いただけで、また飛んでもらえるとも思えなかったしな」

　博士は右手に巻いた包帯の塊かたまりをあっさりと引っこ抜き、傷一つない指をひらひらと振って見せる。とんだ狸たぬき爺じじいだ——そうカールは内心でごちるしかなかった。

「なぁカール、お前さん、いったい何から逃げとるのかね？」

「……」

「人が死にすぎたのを悔いておるのか？」

　遠慮なく心の内側を暴きにかかるヴァイニンガーの言葉は苛いら立だたしかった。——が、図星でもある。カールは今なお、戦中の自らの行為を背負いきれずにいる。

　もしカールが兵士としての大儀を胸に懐いだいて戦っていたのなら、そこにはなんの葛かっ藤とうもなかっただろう。英雄としての名声を誉ほまれに思うこともできただろう。だが当時からカールには、軍人であることに覚悟も信念もなかった。彼が敵機を撃ったのは、それがたまたまカールにとって、もっとも安易に状況を切り抜けられる手段であったからに過ぎない。

〝死にたくなかった〟という言い分で正当防衛を主張できるのは、初陣の出撃だけだ。二度目以降は、そこが紛れもない死地であると理解した上で参加した。理由は単純——敵前逃亡の責任を問われるよりも、敵を殺すほうが『楽』だったからだ。

　確かに彼は最後まで生き残り、友軍の勝利に貢献した。だがそれは結果でしかなく、カールが意図して成し遂げた成果ではない。彼はただ単に逃避の手段として殺さっ戮りくを選んだに過ぎないのだ。それを

可能とする能力に恵まれ、誰よりも優先的な生殺与奪権を手にしていたというだけの理由で、だ。
　思考停止し、ただ義務や責任から逃げ続けるうちに、気がつけば数百人が死んでいた。『王冠六号クローネゼクス』の撃墜スコアは、カール自身にしてみれば、彼の優柔不断が招いた災害による犠牲者の数と同義であった。
「……ガキの頃、俺もあんたの伝記を読んだよ。ヴァイニンガー博士」
　苛いら立だちのあまり、カールは話の矛先をそらしにかかった。
「あんた、自分の実験機で息子を死なせてるんだろ？」
「……」
　今度はヴァイニンガー博士の方が、沈ちん鬱うつに黙り込む番だった。
「それでもあんたは、飛行機造りを辞めなかった。……大した根性だな。俺にはそんな図太さ、とても真似できない」
　願わくばお互いに不愉快な話題を自重する空気になることを、カールは期待していた。だがヴァイニンガーはそれでも穏やかに、真しん摯しな口振りで返答をよこした。
「儂わしは思うんじゃが……誰かの死の上に生き延びた者は、死んだ奴のぶんまで生きまくらにゃあならんのじゃないかね。そうでもしなけりゃ死んでいった連中が浮かばれん」
「……」
「せっかく生き延びておきながら、生きた屍しかばねに成り果てるってのは……本当に死んじまった連中を馬鹿にしとるも同然じゃぁないかね？」
　ぐうの音も出なかった。年の功とでも言うべきか。もはやカールは頭こうべを垂れて、この老人の言葉を拝聴するしかないと観念した。
「カール、あんたはな、まず自分の意志で何かを成し遂げなきゃならん。そうやって、自分が何者なのかを、自分自身で確かめなくちゃならん。——それが出来て初めて、あんたは過去の行いと向き合える。

自分自身をどんな風に裁き、どうやって赦ゆるしてやるか、自分で決められるようになる」
「……俺に、何をしろと？」
　ようやくカールの強情を砕いたという手応えを得てか、ヴァイニンガー博士は満足げに含み笑いしながら頷うなずいた。
「燃料には充分余裕がある筈はずじゃよな？　ちょっとばかり寄り道していかんかね」

　ヴァイニンガー博士に指示された通りの方角と距離を辿たどり、水上複葉機は何処いずことも知れぬ深い山やま間あいへと分け入っていった。
　眼下に沼沢でもあるのか霧が濃く、日没も間近な斜光のせいで視界は極めて悪い。久々の操縦ということもあり、見通しの利かない飛行にカールは神経を尖とがらせる。
「この辺りは大抵の飛行機が怖がって通るのを避ける。まぁ無理からぬ理ワ由ケがあってな……」
「理由？」
「喧けん嘩かっ早い連中が屯たむろしとるのさ。下手に目をつけられると厄介なことに……ほれ」
　なんのことかと問い質ただすより先に、カールは六時方向から迫る質量の気配に勘付く。
　脳裏を過よぎる空戦の記憶。何者かが背後に近づいてくるというただそれだけで、反射的な悪寒に囚とらわれる。そんな道理はないと重々承知してはいても——
　霧の向こう側から、黒く威い嚇かく的な影が立ち現れる。本能的な脅きょう威いを感じてスロットルを全開に叩き込むカール。だが複葉機の苦しげなエンジン音は、とても迫り来る飛影の勢いに及ばない。
「ほれほれ、気合いを入れんとすぐ追いつかれるぞ」
「な、何が——」
　そして背後を凝視するカールの眼前に、ついに靄もやを突き破って

追跡者が姿を見せた。昂こう然ぜんと翼を拡げ、長い尾を高速振動させて背後の霧を渦巻かせながら、一頭の霞龍ネーベルドラッヘが覆い被かぶさらんばかりの勢いで突進してくる。

　あわや追突かと肝を冷やした刹せつ那な、龍は複葉機の隣に滑り出た。手を伸ばせば届くかという程の至近距離から、初めてカールはその姿を目まの当たりにする。

　それはあまりに圧倒的で、力強く、そして美しかった。空を飛ぶという行為の究極の理想形を、カールはそこに見て取った。

「あ……」

　言葉もなかった。その衝撃が幾重もの記憶を貫き、魂の根幹へと突き刺さる。幼い日、未だ憧あこがれるしかなかった蒼そう穹きゅうに舞う、遠く遙はるかなる孤高の翼……

　あの飛翔に憧れたのだ。あの姿に導かれたのだ。

　併走は、わずかな間しか保もたなかった。霞龍ネーベルドラッヘは悠々と複葉機を追い抜くと、小馬鹿にしたような勝ち鬨どきの咆ほう吼こうだけを残して飛び去っていった。

「……まぁ連中、悪気はないんじゃ。ただ、速く飛ぶものを見ると我慢ならなくなるタチらしくてな」

　ただ呆ぼう然ぜんと見送るカールに、妙に得意げな口調でヴァイニンガーが説明する。どうにも年としとは裏腹に稚気が過ぎる老人は、カールを驚かせたい一心で今の龍との邂かい逅こうを仕組んだらしい。はたして効果は覿てき面めん——というより効き過ぎだった。カールは殆ほとんど魂を抜かれたような有様で、操縦桿かんの感触すら定かであるのか疑わしい。

「この先の山肌に、龍のコロニーがあるんじゃよ。まぁ近づく度胸のある奴は滅多におらんが。行ってみるかね？」

「危険じゃ……ないのか？」

　言葉とは裏腹に、カールの声には警戒心など微み塵じんもなかった。

「速度を一〇〇ノット以下に抑え、高度は二〇〇フィート以上を維持。このルールを破ったら極めて危険なことになる。間違っても着陸

する素振りなぞ見せてはならん。龍は地上にいるときの方が無防備になるぶん狂暴化するんでな」
「……わかった」
　カールは夢見るように呆ほうけた眼まな差ざしで、そのくせ確固たる進路を見定めた軌道で機体を操りながら、霧の奥へと分け入っていった。人魚の声に魅入られた船の舵かじ取とりも、さしずめこんな有様だったのだろう。
　やがて、山肌を吹き下ろす気流の壁に阻まれたのか、濃密だった霧が唐突に晴れ、一気に視界が開ける。燃えるような夕焼けの中、そこにカールが見み出いだしたのは、信じがたい光景だった。
　岩肌を剥むき出しにした山さん麓ろくのそこかしこに、大小様々な龍がうずくまり、翼を休めている。生み落とした卵が無事に孵ふ化かするまでの数か月を、親龍たちはああして過ごすのだろう。他の生物の生息圏では決して着地しようとしない龍たちの、それは限りなく希け有うで貴重な姿だ。
　だがそれよりもなお驚異的だったのは、コロニーの上空を旋回する龍たちの群体だ。
　わずか数頭の群れでさえ滅多に見られない龍たちが、ここには間違いなく数百頭の規模で集まっている。霞龍ネーベルドラッヘだけでなく雲龍ヴォルケドラッヘや嵐龍シュトゥルムドラッヘといった大型種も混じっていた。生体や生息圏すらまちまちだとされている多種多様な龍たちが、一丸となって渦を描き、円舞しているのだ。
　地上の親龍たちを守護するための示威行為なのだろうか。おびただしい数の龍たちが演じる竜巻のような集団飛行は、さながら一体の巨大極まる怪獣が蜷局とぐろを巻いているかのようで、その迫力と威圧感は圧倒的に過ぎるものだった。どれだけ飢えた獣であろうと、こんな光景を前にしては、龍の卵や幼生体に食欲を催すはずもない。
「……およそ一〇年に一度のサイクルでしか見られない光景じゃよ」
　後席のヴァイニンガー博士も、畏い敬けいの念を懐いだいたかのように神妙な口調で語る。

「ここは崖がけに囲まれて下界から孤立した土地でな。内陸で唯一、繁殖期の龍がコロニーを作る条件を満たしている場所なんじゃ。この機を逃のがさぬよう、あんたに見てもらいたかった」
　そんなヴァイニンガーの声すらも意中にないかのように、カールはただ我を忘れて龍たちの飛翔に見入った。互いの軌道は複雑に絡み合い、すれ違い、まるきり無秩序としか思えないのに、遠目に見た全体の渦は洋々と静かなリズムを保っている。まるですべての龍が一つの意志を共有し、遊び戯たわむれながら即興の演舞を繰り広げているかのようだ。
　翼とは——あんなにも自在で無む縫ほうなものか。
　空とは——これほどの美しさを秘めた場所なのか。
「こいつらは……何なんだ……」
　その眺めに圧倒されるあまり、カールは声を詰まらせて問う。
「……本当に、一体……何なんだよ……」
「この世で最も自由で、潔いさぎよく、そして誇り高い生物……この空を恣ほしいままにすることを本当の意味で許された、誰よりも神に近しい者たちじゃよ」
　カールとヴァイニンガーは、しばしの間、時を忘れて龍たちの乱舞に見入った。
「なぁカール、もう一度飛んでみんか？　今度はあいつらと一緒に」
「……あいつらと？」
　その、想像するだに恐れ多い提案に、カールは耳を疑った。だがヴァイニンガー博士の表情は、冗談とは程遠い。
「儂わしはな、技術者として過ごした四〇年余りの間、常に龍たちに嫉しっ妬としてきた。あんなにも自由に飛べる彼らが羨うらやましくて、その足下にも及ばぬ人間の科学が悔しくて、嫉ねたましくてなぁ。いつか自分の飛行機で、あいつらの領域に辿たどり着きたいと願ってきた。……その昔せき年ねんの夢を叶かなえる計画に、いま儂は着手しておる」
　プロジェクト・ブリッツフォーゲル——まるで祈りを託した聖言の

ように、博士はそう口にした。

「龍たちはな、ただ速さのみを以もって空の覇権を問う。その龍に速さで競り勝つ飛行機を造りたい。虹龍グレンツドラッヘよりも、帝凰龍カイザードラッヘよりもなお速い——音速を突破する機体をな」

「そんなことが……できるのか？」

「図面は引いた。金と人も集めた。あとは、前代未聞の危険な挑戦に応じてくれるテストパイロットが必要じゃ。儂ら人類の代表を務める、最高の腕を備えた飛行機乗りが、な」

　武者震いに総身が痺しびれた。永らく血の巡りすら疑わしかった心臓が、今は早鐘を打っている。死者の如き日々に甘んじていた心が、蘇そ生せいしつつあった。いつか湖で霞龍ネーベルドラッヘを見かけたときと違い、今度こそはっきりと、カールは目から溢あふれる涙を自覚した。

　なぜ忘れていたのだろうか、ここに楽園があることを。

　かつて翼は地獄を呼ぶものでなく、己を解放するための術すべだった。

　それを手放したのは彼自身だ。己の意志で飛ぶことを辞め、天翔る意義を貶おとしめた。そうして失った魂が——今、ようやく還ってきた。

　或あるいは今日この日まで、自分は本当の意味で空を飛んだことなど、ただの一度もなかったのだろう。

　ならば挑もう。今度こそ、本物の空へ。

　今度は憎しみと恐怖のためでなく、誇りと歓喜のために飛ぼう。

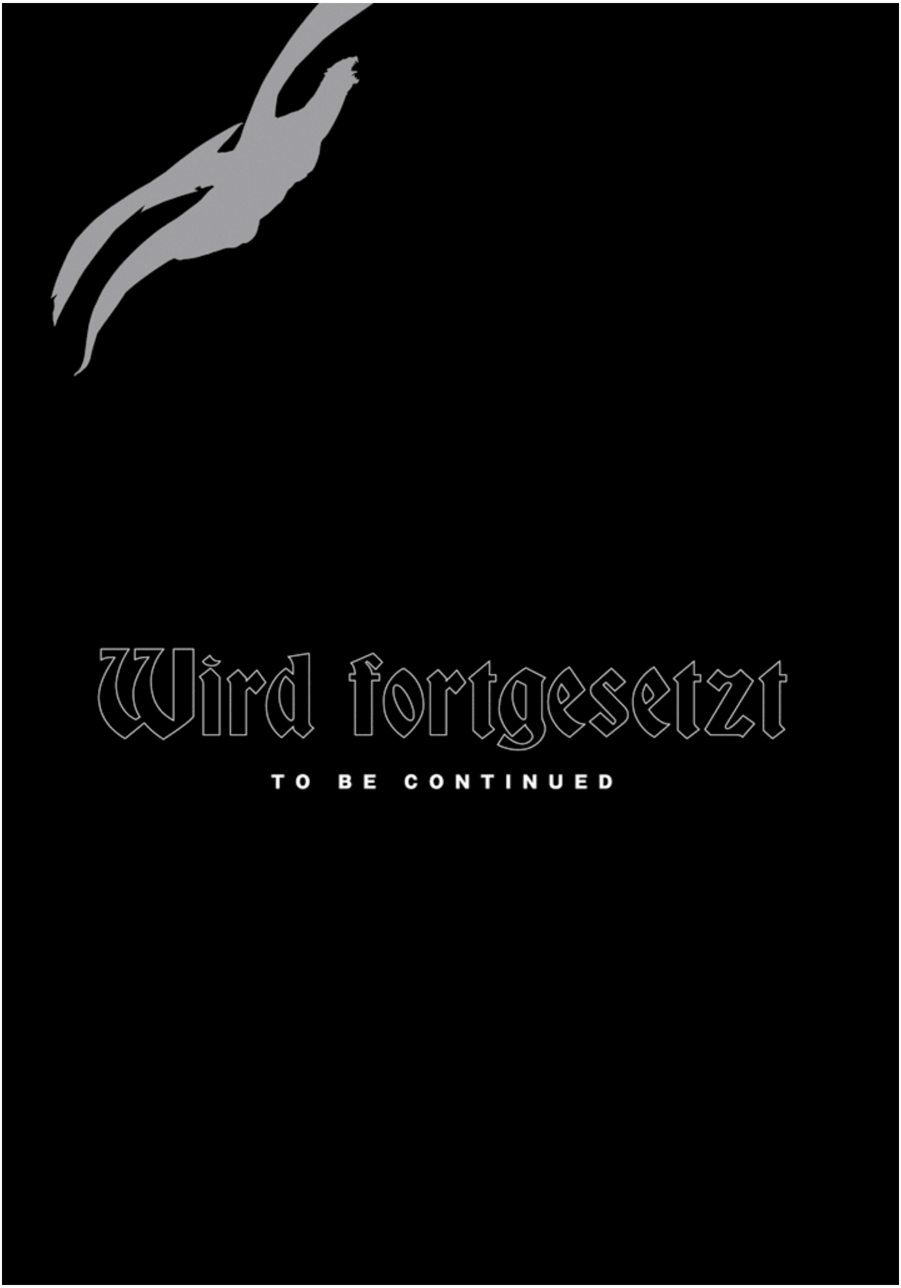
「本当に、俺なんかで……いいのか？」

「まぁ、まずはブルームの港でテストじゃな。ちゃんと着水できたら、合格じゃ」

　趣味の悪いジョークを口にして、博士はげらげらと大笑した。釣られてカールも笑った。開戦の夜より今日まで久しく途絶えていた、何年ぶりもの笑顔だった。

　複葉機の機首を返し、暮れなずむ空の龍たちに別れを告げながら、

カールは心の中で感謝を述べた。
　お前たちは俺を救ってくれた。もう一度、俺に命をくれた。……だから、お前たちに約束する。もう二度と、俺はこの空を血に染めたりはしない。
　いつの日か龍と共に、龍の如く飛ぼう。この無限の空の喜びを讃たたえて——


Wird fortgesetzt
TO BE CONTINUED

虚淵玄

GEN UROBUCHI

ゲームメーカー「ニトロプラス」所属の脚本家。２０００年『ファントム-ＰＨＡＮＴＯＭ ＯＦ ＩＮＦＥＲＮＯ-』にてデビュー。流行を追わない独自のスタイルが作品を発表するたびに話題を呼ぶ。近年はビジュアルノベル『ＦＡＴＥ/stay night』の外伝小説『Fate/Zero』、サンデーＧＸ連載マンガ『ブラック・ラグーン』の外伝小説（小社刊）など、小説家としても活躍中。２００９年４月、脚本家デビュー作が『ファントム～Requiem for the Phantom～』のタイトルでＴＶアニメ化。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

アイゼンフリューゲル

２０１２年12月１日　電子書籍版発行

者　虚淵玄

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　望月　充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００９年７月22日　初版第１刷発行

©Nitroplus 2012　ISBN978-4-09-451146-8

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。